

博士学位論文（東京外国語大学）
Doctoral Thesis (Tokyo University of Foreign Studies)

氏 名	黄 允實
学位の種類	博士（学術）
学位記番号	博甲第 257 号
学位授与の日付	2018 年 9 月 5 日
学位授与大学	東京外国語大学
博士学位論文題目	現代日本語の名詞述語文に関する一研究 — 〈「形容詞＋名詞」述語文〉の意味・機能 —

Name	Hwang, Younsil
Name of Degree	Doctor of Philosophy (Humanities)
Degree Number	Ko-no. 257
Date	September 5, 2018
Grantor	Tokyo University of Foreign Studies, JAPAN
Title of Doctoral Thesis	Noun Predicate Sentences in Modern Japanese : The Semantics and Functions of “Adjective + Noun” Predicate Sentences

博士学位論文

現代日本語の名詞述語文に関する一研究

〈「形容詞＋名詞」述語文〉の意味・機能

東京外国語大学大学院

総合国際学研究科 博士後期課程

黄 允實

目次

凡例	7
----------	---

第 I 部 序論

第 1 章 はじめに	8
1.1 本研究の目的	8
1.2 本研究の考察対象と言語資料	9
1.2.1 本研究の考察対象	9
1.2.2 本研究における言語資料	10
1.2.2.1 手作業による用例	11
1.2.2.2 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』	11
1.2.2.3 各章の考察対象の言語資料	11
1.3 本研究の構成：論のすすめ方	13
第 2 章 先行研究	15
2.1 名詞述語文と形容詞述語文に関する研究	15
2.1.1 ものがたり文と品さだめ文	15
2.1.2 形容詞述語と名詞述語の意味機能	16
2.2 形容詞に関する研究	17
2.2.1 形容詞の分類	18
2.2.1.1 属性形容詞と感情・感覚形容詞	18
2.2.1.2 質形容詞（特性形容詞）と状態形容詞	18
2.2.2 形容詞の性質	19
2.2.2.1 形容詞における程度性と比較	19
2.2.2.2 形容詞の意味における主観的な側面と評価性	21
2.2.2.3 持続的な性質と一時的な態度・様子—《特性》と《状態》の二重の性格 ..	23
2.3 連体句と語順に関する研究	25
2.3.1 連体動詞句に関する研究	25
2.3.1.1 動詞の連体形と連体機能	25
2.3.1.2 動詞句の名詞へのかかわりのタイプ	26

2.3.2	現代文における語順の傾向	27
2.4	「モノダ」文と「コトダ」文に関する先行研究	29
2.4.1	実質名詞「もの」「こと」と形式化	29
2.4.1.1	「もの」と「こと」の指示対象	29
2.4.1.2	「もの」と「こと」の形式化	29
2.4.1.3	実質名詞「もの」と形式的用法との意味的つながり	32
2.4.2	「ものだ」と「ことだ」の意味・用法	33
2.4.2.1	「ものだ」のモーダルな意味	33
2.4.2.2	「ことだ」のモーダルな意味	35
2.5	本研究における用語の扱いについて	37
2.5.1	文の意味機能に関する用語	37
2.5.2	文の成分に関する用語	38

第Ⅱ部 本論Ⅰ

—「形容詞＋名詞」述語文の性質—

第3章	「形容詞＋名詞」述語文の主語と述語構造にみられる特徴	40
3.1	主語名詞について：個別・具体的なものか、一般・総称的なものか	40
3.2	主語名詞と述語名詞との関係	41
3.3	形容詞の意味と述語構造	44
3.3.1	装定用法と述定用法による意味の違い	45
3.3.2	装定用法の制限による場合：「多い」「少ない」「遠い」「近い」	47
3.4	第3章のまとめ	49

第4章 「形容詞＋名詞」述語文と形容詞述語文 [1]

	—主語の示し方に注目して—	51
4.1	分析対象と用例数	51
4.2	文中における主語の示し方	51
4.3	主語名詞の性質別の主語の示し方	57
4.4	第4章のまとめ	62

第5章 「形容詞＋名詞」述語文と形容詞述語文 [2]

—主語名詞の表す事物の〈特性〉の恒常性と一時性—	64
5.1 分析対象と用例数	64
5.2 「形容詞＋名詞」述語文と形容詞述語文の共通の基本的な特徴	65
5.2.1 程度副詞による修飾	65
5.2.2 比較表現による修飾：比較表現Ⅰ	66
5.3 「形容詞＋名詞」述語文と形容詞述語文の異なる特徴	67
5.3.1 状況語を伴う場合：時を表す成分・条件節	67
5.3.1.1 時を表す成分	67
5.3.1.2 条件節からなる状況語	69
5.3.2 時の規定語を伴う場合：主語名詞にかかる場合	71
5.3.3 修飾語を伴う場合：頻度副詞・比較表現Ⅱ	73
5.3.3.1 頻度副詞による修飾	73
5.3.3.2 比較表現による修飾：比較表現Ⅱ	75
5.4 第5章のまとめ	77

第6章 「動詞句＋形容詞句＋名詞ダ」型の文における連体句の意味関係

—「形容詞句＋動詞句＋名詞ダ」型の文と比較—	79
6.1 研究目的	79
6.2 分析対象と分析方法	80
6.3 「動詞句＋形容詞句＋名詞ダ」型の文について	82
6.3.1 同質な側面を述べるもの	82
6.3.2 異質な側面を述べるもの	88
6.4 「形容詞句＋動詞句＋名詞ダ」型の文について	91
6.4.1 同質な側面を述べるもの	91
6.4.2 異質な側面を述べるもの	93
6.5 おわりに	93

◆第Ⅱ部（本論Ⅰ）のまとめ：「形容詞＋名詞」述語文の性質	95
------------------------------	----

第Ⅲ部 本論Ⅱ

—述語名詞からモーダルな形式へ—

第7章 「形容詞＋モノダ」文と「形容詞＋コトダ」文.....	97
7.1 分析対象と用例数	97
7.1.1 「形容詞＋モノダ」文の用例	97
7.1.2 「形容詞＋コトダ」文の用例	99
7.2 「形容詞＋モノダ」文	100
7.2.1 「形容詞＋モノダ」文の主語の示し方	100
7.2.2 「形容詞＋モノダ」文のタイプ	103
7.2.2.1 「Nハ Adj モノダ」タイプ (「Nガ Adj モノダ」)	103
7.2.2.2 「N/節トイウノハ Adj モノダ」「Nトハ Adj モノダ」「N/節ッテ Adj モノダ」 「Nφ Adj モノダ」タイプ	105
7.2.2.3 「Nモ Adj モノダ」「Nナンテ Adj モノダ」タイプ	109
7.2.2.4 「節＋Adj モノダ」「節ナンテ Adj モノダ」「節トハ Adj モノダ」タイプ	111
7.2.2.5 「Adj モノダ」タイプ	114
7.2.2.6 「節＋モノダ」タイプ	117
7.2.3 7.2 節のまとめ	118
7.3 「形容詞＋コトダ」文	119
7.3.1 「形容詞＋コトダ」文の主語の示し方	119
7.3.2 「形容詞＋コトダ」文のタイプ	122
7.3.2.1 「Nハ Adj コトダ」タイプ (「Nガ Adj コトダ」)	122
7.3.2.2 「N/節トイウノハ Adj コトダ」「Nトハ Adj コトダ」「Nモ Adj コトダ」タイ プ	124
7.3.2.3 「N/節ッテ Adj コトダ」「N/節 φ Adj コトダ」タイプ	125
7.3.2.4 「節/N ナンテ Adj コトダ」「節/N トハ Adj コトダ」「節＋Adj コトダ」タイ プ	127
7.3.2.5 「Adj コトダ」タイプ	131
7.3.2.6 「節＋コトダ」タイプ	135
7.3.3 7.3 章のまとめ	136
◆第Ⅲ部 (本論Ⅱ) のまとめ : 「形容詞＋モノダ」文と「形容詞＋コトダ」文	138

第Ⅳ部 結論

第8章 おわりに.....	141
8.1 本研究であきらかになったこと.....	141
8.2 本研究の意義.....	144
8.3 今後の展望と課題.....	146
参考文献.....	149
参考資料.....	157
言語資料一覧.....	158

表目次

表 1：本研究における各章の考察対象の用例数.....	12
表 2：形容詞述語、名詞述語の意味機能.....	16
表 3：「形容詞＋名詞」述語文と形容詞述語文の主語の現れ方と用例数.....	51
表 4：「形容詞＋名詞」述語文と形容詞述語文の文中における主語の示し方.....	52
表 5：「形容詞＋名詞」述語文と形容詞述語文の主語名詞別の用例数.....	58
表 6：主語名詞が個別・具体的なものを指す場合における主語の示し方.....	58
表 7：主語名詞が一般・総称的なものを指す場合における主語の示し方.....	59
表 8：文中における主語の示し方のまとめ.....	62
表 9：主語名詞の性質別の主語の示し方のまとめ.....	63
表 10：「形容詞＋名詞」述語文と形容詞述語文の共起成分の現れ方と用例数.....	64
表 11：「形容詞＋名詞」述語文と形容詞述語文の共通の特徴.....	77
表 12：「形容詞＋名詞」述語文と形容詞述語文の異なる特徴.....	77
表 13：「V+A+Nダ」型と「A+V+Nダ」型の文の総用例数.....	81
表 14：「動詞句＋形容詞句」の意味関係と用例数.....	82
表 15：「動詞句＋形容詞句」の意味関係のあり方〔同質関係〕.....	88
表 16：「動詞句＋形容詞句」の意味関係のあり方〔異質関係〕.....	90
表 17：「形容詞句＋動詞句」の意味関係と用例数.....	91
表 18：「形容詞＋モノダ」文の総用例数.....	98
表 19：「形容詞＋コトダ」文の総用例数.....	100
表 20：「形容詞＋モノダ」文の主語の現れ方と用例数.....	100
表 21：「形容詞＋モノダ」文の主語が文中に現れる場合の示し方.....	101
表 22：「形容詞＋モノダ」文のタイプ.....	102
表 23：「形容詞＋モノダ」文のタイプ別のまとめ.....	119
表 24：「形容詞＋コトダ」文の主語の現れ方と用例数.....	120
表 25：「形容詞＋コトダ」文の主語が文中に現れる場合の示し方.....	120
表 26：「形容詞＋コトダ」文のタイプ.....	121
表 27：「形容詞＋コトダ」文のタイプ別のまとめ.....	136
表 28：「形容詞＋モノダ」文と「形容詞＋コトダ」文のタイプ別のまとめ.....	138
表 29：「形容詞＋モノダ」文と「形容詞＋コトダ」文のタイプ別のまとめ〔表28再掲〕	143

凡例

一. 本研究で使⽤した記号

- 1) ある⽂の容認度が低いことを表す記号は「*」「?」の 2 種類を⽤いる。「*」は⽇本語の⽂としてまったく容認できない⾮⽂だということを⽰し、「?」はその⽂が⽂法的に⾮⽂だということではないが、⽇本語の⽂としてやや不⾃然であることを⽰す（先行研究で「??」を⽤いている場合は本文のまま引用する）。なお、例⽂の容認度判断については母語話者の判断を参照した。

- 2) 引用実例中の下線については、「 」（下線）、「 」（二重線）、「 」（太線）、「 」（波線）、「 」（点線）の 5 種類を⽤いる。下線は形容詞（句）、二重線は述語（述語名詞＋ダ）を⽰す。太線は主語名詞を⽰しており、文中に主語が現れない場合には主語として想定されるものに点線をつけた。なお、波線は各章の焦点となる⽂の成分などの構⽂的な条件や動詞句に⽰した。

例示) 山田先生はとてもやさしい人だ。

- 3) 本文の中では、太字と斜体を⽤いる。注目したい個所は**太字**や*斜体*で目立たせた。なお、実例においては主語（主語名詞＋助詞）を**太字**で⽰した。

例示) **山田先生**はいつもやさしい。

二. 本研究における用語の統一

- 4) 「形容詞＋名詞ダ」⽂と「形容詞＋名詞」述語⽂

黄允實（2016）の研究までは「山田先生はやさしい人だ」のような⽂を「形容詞＋名詞ダ」⽂と称したが、黄允實（2017）以後は「形容詞＋名詞」述語⽂と記す。本研究においても「形容詞＋名詞」述語⽂に統一した。

第 I 部 序論

第 1 章 はじめに

1.1 本研究の目的

日本語の主要な品詞には動詞、形容詞、名詞がある。動詞と形容詞は文の中で述語として働くことが多く、名詞は主語や補語として働くことが多い。また、名詞が述語として働く場合もあり、名詞が述語になる文を名詞述語文という。

(1) 山田さんは先生だ。(名詞述語文)

名詞述語文には、例 (1) のように述語が名詞のみの単純名詞述語文もあれば、例 (2) のように名詞が飾り成分（ここでは形容詞¹）と組み合わせさせた複合名詞述語文もある。

(2) 山田先生はやさしい人だ。(述語構造が「形容詞＋名詞ダ」の名詞述語文)

この文は、例 (1) とは違って「山田先生は人だ」だけでは文が意味を成さず、実質的な意味は連体句の形容詞が担っており、文の全体の意味としては例 (3) の形容詞述語文のように、山田先生に対して「やさしい」という〈特性〉を述べる文になると言える。

(3) 山田先生はやさしい。(形容詞述語文)

事実、例 (2) 「山田先生はやさしい人だ」のような「形容詞＋名詞」述語文は、意味の面においても機能の面においても形容詞述語文と重なりあうところが多く、しばしば比較される。しかし、「形容詞＋名詞」述語文と形容詞述語文は同じく主語の〈特性〉を表しているとしても、一方は述語に名詞を含んでいるが、他方は含んでおらず、本質的に述語構造が異なっている。このような構文的な違いは両形式の表す意味が完全に一致しているとは言い難いことを示していると思われる。

それでは、両者の構文的な違いはどのような面において、こういった特徴として現れているのだろうか。今後の研究では両者の重なりあう部分だけでなく、両者間の相違点に注

¹ 本研究で「形容詞」と呼ぶものは学校文法でいう「形容詞」と「形容動詞」の両方を指す。

目することも重要であるように思われる。よって、本研究では例(2)のような「形容詞＋名詞」述語文と例(3)のような形容詞述語文を研究対象とし、二つの構文の重なりあうところを考慮に入れつつ、両者間の異なる構文的な性質に注目することにする。両者の構文的な性質を手掛かりに比較考察を行い、「形容詞＋名詞」述語文の特徴を明らかにすることを目指す。

また、いわゆる形式名詞と呼ばれる「もの」「こと」の性質にも着目し、述語名詞とモーダルな形式との連続性という観点から「形容詞＋モノダ」文と「形容詞＋コトダ」文の総合的な考察を試みる。

1.2 本研究の考察対象と言語資料

1.2.1 本研究の考察対象

ここでは、本論の各章ごとの考察対象について概観する。

新屋(2009: 33)には、「名詞を述語とする性質規定文の形」として、次のような文が挙げられている(例文番号は原文のもの)。

- ① ソノ話ハ事実ダ
- ② アノ子ハ素直ナ子ダ
- ③ 彼ハ太陽ノヨウナ明ルサダ
- ④ 彼ハオトナシイ性格ダ
- ⑤ 彼ハ熊ト格闘シタ男ダ

以上はいずれも性質規定であるが、意味構造はすべて異なっており、ほかにもさまざまなパターンがあるとしている。本研究では、このうち、②の「素直ナ子ダ」のように述語構造が「形容詞＋名詞ダ」である文(以下、「形容詞＋名詞」述語文と記す)を主な対象として扱う。

本論Ⅰの第4章と第5章では、「形容詞＋名詞」述語文が主語名詞の表す事物の恒常的な特性を表すという意味的な共通点から形容詞述語文を比較対象としている。この二つの章では、「形容詞＋名詞」述語文と形容詞述語文の比較分析を試み、「形容詞＋名詞」述語文の意味機能を明らかにする。

次に、第6章では「形容詞＋名詞」述語文の内部構造に注目し、動詞句と形容詞句が複合連体句をなしている「動詞句＋形容詞句＋名詞ダ」型の文(「仕事ができる素晴らしい人だ」)を分析対象とする。連体句をなす動詞句と形容詞句の結びつきにおける意味的なあり方に着目し、「形容詞句＋動詞句＋名詞ダ」型の文(「若いやせた女性だ」)と比較考察する。

さらに、本論Ⅱの第7章では、いわゆる形式名詞と呼ばれる「もの」と「こと」が述語名詞になっている「形容詞＋モノダ」文と「形容詞＋コトダ」文を対象とし、述語名詞とモーダルな形式の連続性に注目した。

なお、全章を通じて、人やものの部分や側面を表す語（高橋（1975）のいう「部分語」「側面語」）が後接する形容詞とあいまって全体で〈特性〉を表す文も対象に入れる。次の例（4）（5）は「形容詞＋名詞」述語文で、例（6）（7）は形容詞述語文である。

- (4) 「班長は、人情に篤い人だ。退官した先輩や異動した部下にも必ず年賀状を出すような人だ。人の気持ちを大切にする人なんだよ。」（同期：66）
- (5) 「彼女の妊娠と流産のことは、他の人は知っているのだろうか？」「私が知っている。ユズのお姉さんも知っている。彼女は口が堅い人だから。それにいろんな費用も工面してくれた。」（色彩を持たない多崎つくると彼の巡礼の年：93）
- (6) 首相は、上の唇が非常に薄い。そのうえ話しているときや笑ったときに前歯が出ない。（週刊現代）
- (7) インドのステンレスの二段重ねのお弁当箱は、形もかわいい。具沢山のカレーを二種とサラダを詰めて、鮮やかな色の布に包んで持って行きましょう。

（12ヶ月のスクラップブック）

但し、文末に「のだ／んだ」がついている「形容詞＋名詞」述語文と形容詞述語文は対象外とし²、非過去形の述語に限る。なお、考察にあたって本研究の例文の文法性の判断に際しては、母語話者の判定を参照した。

1.2.2 本研究における言語資料

本研究において考察の対象とした言語資料には、文庫本と単行本の現代小説や随筆などの印刷された書籍から手作業によって採集したものと国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（BCCWJ）から採集したものがある。

² たとえば、次の「のだ／んだ」のついた例をみると、bのように「のだ／んだ」のない文に置き換えると不自然に感じられる。そのため、aの文における主語表示「ってのは」は文末の「のだ／んだ」によるものと考えられる。本研究の目的は「形容詞＋名詞」述語文や形容詞述語文の特徴をさぐることにあるため、文末に「のだ／んだ」のついている例は対象外とする。

・ a. 「あんな豪邸に住んでいるなんて、どうせ、父親の仕事はろくなものじゃねえだろう」「豪邸というわけではないですよ」「偉そうな奴ってのは、ずるいんだよ」と彼は、ここにいない何者かに恨みを抱いているようでもあった。（オー！ファーザー：294）

b. ? 「偉そうな奴ってのは、ずるい」

用例によっては、主語の示し方と「のだ／んだ」とが関係のない例や、「のだ／んだ」をとっても違いがみられない例もあるだろうが、今回は対象に入れなかった。

1.2.2.1 手作業による用例

手作業によって採集した用例は、文庫本と単行本の現代小説や随筆を対象にしたもので、文学作品の選定においてはなるべく賞をもらった有名な作品やベストセラーを中心に収集した。手作業の用例収集に使用した作品は、1985 年度から 2014 年度までの文庫本 94 冊、単行本 8 冊の計 102 冊を使用した。言語資料の詳細については稿末に掲載する。本文で例文を挙げる際に括弧の中に用例の出典を示したが、手作業によって採集した用例の出典のあとにつけた数字はそのテキストにおける頁数を表している。

1.2.2.2 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese、以下 BCCWJ) は、国立国語研究所が中心となって開発した日本語に関する初めての大規模均衡コーパスである。2011 年 8 月以来、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ) は 2 種類の検索インターフェースを用いて、オンライン公開されている。全文検索専用のインターフェースは『少納言』(<http://www.kotonoha.gr.jp/shonagon/>)、形態素解析済データ検索用のインターフェースは『中納言』(<https://chunagon.ninjal.ac.jp/>)と呼ばれている。本研究における用例は主に『中納言』を使用して収集したものである。

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ) は、出版(生産実態)サブコーパス、図書館(流通実態)サブコーパス、特定目的サブコーパス三つのサブコーパスから構成される。『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ) の基本構成は次のとおりである(下の図は http://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/bccwj/basic-design.html の図を引用したもの)。

図 1：現代日本語書き言葉均衡コーパスの構成



1.2.2.3 各章の考察対象の言語資料

ここでは、各章ごとの考察対象の言語資料について述べる。

第 4 章と第 5 章では、「形容詞＋名詞」述語文と形容詞述語文の用例について、主として

手作業によって採集した用例を考察対象としている³。但し、必要に応じて『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ) から得られた用例を取り上げている。

次に、第 6 章の「動詞句＋形容詞句＋名詞ダ」型の文と「形容詞句＋動詞句＋名詞ダ」型の文の用例、第 7 章の「形容詞＋モノダ」文と「形容詞＋コトダ」文の用例については、主として『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ) から検索アプリケーション「中納言」を用いて採集したものを対象に考察を行った。

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ) の用例の検索において、形容詞については、短単位⁴の品詞分類から「形容詞」(「形容詞—一般」「形容詞—非自立可能」と「形状詞—一般」、そして名詞のうち「名詞—普通名詞—形状詞可能」「名詞—普通名詞—サ変形状詞可能」の四つを指定して検索した⁵。具体的な検索条件については、各章で取り上げることにする。本研究で考察対象とする用例数は、次のとおりである。

表 1：本研究における各章の考察対象の用例数

章	各章の対象用例	用例数
第 4 章	「形容詞＋名詞」述語文〔手作業〕	496
第 5 章	形容詞述語文〔手作業〕	943
第 6 章	「動詞句＋形容詞句＋名詞ダ」型の文	439
	「形容詞句＋動詞句＋名詞ダ」型の文	19
第 7 章	「形容詞＋モノダ」文	5,295
	「形容詞＋コトダ」文	5,818

³ 「形容詞＋名詞」述語文と形容詞述語文の用例は、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ) の検索では用例数が膨大であるため、手作業による用例を使用することにする。

⁴ 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ) の形態論情報については、BCCWJ に格納したサンプルの言語的特徴の解明に適した「長単位」とコーパスからの用例収集に適した「短単位」の 2 種類の言語単位に解析し、それぞれの単位に見出し・品詞・語種等の情報を付与している。短単位は言語の形態的側面に着目して規定した言語単位であり、本研究の言語資料においては、短単位の品詞分類にそって検索条件を指定している。BCCWJ の形態論情報について詳しくは、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』利用の手引第 1.1 版の第 5 章を参照されたい (http://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/bccwj/doc.html)。

⁵ 本研究の対象となる品詞である形容詞（形容詞と形容動詞）と名詞について、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ) の短単位の品詞分類では、次のように分類されている。

- ・形容詞：「形容詞—一般」「形容詞—非自立可能」
- ・形状詞：「形状詞—一般」「形状詞—タリ」「形状詞—助動詞語幹」
- ・名詞：「名詞—普通名詞—一般」「名詞—普通名詞—サ変可能」「名詞—普通名詞—形状詞可能」「名詞—普通名詞—サ変形状詞可能」「名詞—普通名詞—副詞可能」「名詞—普通名詞—助数詞可能」「名詞—普通名詞—一般」「名詞—固有名詞—一般」のほかは省略

形容詞については、このうち「形容詞」（「形容詞—一般」（「高い」「大きい」など）、「形容詞—非自立可能」（「いい」「ない」など）、「形状詞—一般」（「大切な」「好きな」など）、「名詞—普通名詞—形状詞可能」（「不思議な」「楽な」など）、「名詞—普通名詞—サ変形状詞可能」（「贅沢な」「失礼な」など）の四つを検索条件として指定した。

1.3 本研究の構成：論のすすめ方

本研究の構成について簡単に述べる。本研究は、第Ⅰ部序論、第Ⅱ部（本論Ⅰ）、第Ⅲ部（本論Ⅱ）、第Ⅳ部結論の4部構成となっている。

第Ⅰ部 序論

第Ⅰ部は序論であり、この第1章と次の第2章がこれに相当する。この第1章では、本研究の目的、そして考察の対象および言語資料について述べた。そして、次の第2章では本研究にかかわる先行研究全般を概観する。

第Ⅱ部と第Ⅲ部 本論

本論は第Ⅱ部（本論Ⅰ）と第Ⅲ部（本論Ⅱ）の2部構成となる。第Ⅱ部は第3章～第6章からなり、第Ⅲ部は第7章のみからなる。

第Ⅱ部は、「形容詞＋名詞」述語文の構文的・意味的・機能的な性質を明らかにしようとするものである。考察を進めるにあたっては、「形容詞＋名詞」述語文と形容詞述語文の共通点や相違点、「形容詞＋名詞」述語文の内部構造に注目した。第Ⅲ部では、「形容詞＋名詞」述語文の次の考察として、「形容詞＋モノダ」文と「形容詞＋コトダ」文を取り上げる。

以下、本論の各章に沿って研究内容の概観を示す。

第3章では、本研究の考察対象である「形容詞＋名詞」述語文（「山田先生はやさしい人だ」のように述語構造が「形容詞＋名詞ダ」になっている文）の基本的な性質について概観する。主語名詞の分類（個別・具体的なものを指すか、一般・総称的なものを指すか）、主語名詞と述語名詞との関係、形容詞の意味と述語構造との関係など、本研究の全般にかかわる内容について述べる。

第4章と第5章では、「形容詞＋名詞」述語文の意味機能を明らかにするため、形容詞述語文（「山田先生はやさしい」）との類似点や相違点を意識しつつ、実例に基づいて比較を試みる。第一の考察として、第4章では二つの構文の主語の示し方に注目し、両者の違いについて論じる。また、第二の考察として、第5章では文の成分〔状況語、規定語、修飾語〕との共起関係を通して、主語名詞の表す事物の〈特性〉の恒常性と一時性における両者の類似点と相違点について述べる。

「形容詞＋名詞」述語文のさらなる研究として、第6章では「動詞句＋形容詞句＋名詞ダ」型の文に焦点を当て、その内部構造に注目し、「形容詞句＋動詞句＋名詞ダ」型の文と比較考察する。複合連体句をなす「動詞句」と「形容詞句」の意味的なあり方を観察し、「形容詞＋名詞」述語文の特徴をさぐる。

第Ⅱ部（第4章から第6章まで）は、主に「形容詞＋名詞」述語文の性質についての考察であるが、第Ⅲ部（第7章）では「形容詞＋モノダ」文と「形容詞＋コトダ」文を取り上げ、述語名詞としての「もの」「こと」とモーダルな意味を表す形式「ものだ」「ことだ」との連続性に注目し、その構文的な環境をさぐる。

第Ⅳ部 結論

最後に、第Ⅳ部結論では、本研究の考察を通して明らかになったことや本研究の意義、そして今後の課題について述べる。

第2章 先行研究

各章の論考を進めるにあたっては、それぞれの議論に関係する先行研究がある。第2章では本論に入る前に、各章にかかわる先行研究全般について概観する。

まず、2.1 節では本研究全体の考察にかかわる、これまでの名詞述語文の意味機能に関する研究について簡単にふれ、2.2 節では第4章と第5章とかかわる、形容詞に関する研究を取りあげる。また、2.3 節では第6章とかかわる、連体句に関する研究や語順の傾向について言及したものを概観し、2.4 節では第7章と関連して、「モノダ」文と「コトダ」文に関する研究について紹介する。最後に、2.5 節では本研究の用語の扱いについて述べておく。

2.1 名詞述語文と形容詞述語文に関する研究

名詞述語文に関してこれまでさまざまな研究がなされてきたが、その中で、2.1.1 節では佐久間（1941[1995]）を、2.1.2 節では「形容詞＋名詞」述語文と形容詞述語文を比較した主な研究として新屋（2009）を取り上げる。

2.1.1 ものがたり文と品さだめ文

佐久間（1941[1995]）は文を「ものがたり文」と「品さだめ文」とに分けている。ものがたり文というのは事件の成行を述べるもので、品さだめ文は物事の性質や状態を述べたり、判断を言い表したりするものであり、前者は述語として動詞を要求するのに対して、後者は述語としていわゆるコブラ（「繫辞」）のようなもの、形容詞・形容動詞のようなものを要求する（p.153）と述べている。「品さだめ文」はさらに「性状の表現」と「判断の表現」に分類される。

また、「品さだめ文」と主語の示し方について、「多くの性状規定の表現について、「は」を以てするものが恒例的に見うけられるといふのには、そこに相当の理由があるのです。この事は、判断の表現の場合にも同様にいふことができますから、一般に品さだめの構文について共通の現象と見ることができ、また同一の理由・根拠にもとづくことを見出すに至るものです。（pp.159-160）」と述べ、一般的・基本的に次のような表現形式をとる（p.155、160、165）と指摘している。

[性状の表現]	（何々）は（どんなか）だ
[判断の表現]	（何々）は（何か）だ

「形容詞＋名詞」述語文と形容詞述語文は「品さだめ文」に属し、上のような表現形式をとるという共通点をもっている。

2.1.2 形容詞述語と名詞述語の意味機能

新屋（2009）は文の意味機能や表現性の面において、二つの構文を比較しつつ詳細に記述している。まず、意味機能の面において新屋（同：30-33）では、形容詞述語の意味機能には性質規定、状態叙述、評価があり、名詞述語の意味機能には、類別、同定、名称提示、性質規定、状態叙述、評価、動態叙述があると述べている（新屋 2009：33、表 1）。

表 2：形容詞述語、名詞述語の意味機能

意味機能	形容詞述語	名詞述語
類別		珊瑚ハ動物ダ
同定		アノ子ハ息子ノ太郎ダ
名称提示		コノ花ハ“コーレリア”デス
性質規定	氷ハ冷タイ	ソノ話ハ事実ダ 彼ハオトナシイ性格ダ
状態叙述	風ガ強イ	今コノゲームガブームダ 今経済ハ危機的ナ状態ダ
評価	ソノ方法ハマズイ	ソレハ彼ノ能力ノ問題ダ
動態叙述		彼ハ明日出発ダ

新屋（同）のこの表にもうかがえるように、形容詞述語と名詞述語に共通する意味機能は「性質規定、状態叙述、評価」である。そして、新屋（同）はこのうち性質規定について、以下のような例を挙げ、説明をしている（以下の下線は原文のもの）。

a. あの子は素直だ。

b. あの子は素直な子だ。

（新屋 2009：34）

a は形容詞文で、b は名詞文であるが、「あの子」の性質を表しているという意味の面では実質的に同じである。そのため、名詞述語はしばしば形容詞述語と同等の意味機能で用いられ、両者は互換性の高いことが多いと述べている。しかし、形容詞文の性質規定が形容詞自体によるものであるのに対し、名詞文のそれは述語名詞の概念を限定、類別するという操作を介した性質規定であると述べている（pp.34-35）。

さらに、両形式の表現性について、次の例文を取り上げ、説明をしている（新屋 2009：36、原文（12）a,b、（13）a,b）、以下の例文番号は本論文の通し番号）。

- (8) a. 「とにかく、青山さんは、心ここにないんだ。けさも彼女のことをぐじゅぐじゅ
言いながら味噌汁の中に納豆をつっこんでいたからなあ」
「情けないなあ。どうしようもないよ。ほっとけよ」
- b. (…)「情けない人だなあ」
- (9) a. 太郎がダイニング・キッチンへ入ると、圧力鍋はガス台の上で、ひゅうひゅう
口笛を吹くような音をたてていた。「おもしろい鍋だね」黒谷も入ってきて、興
味深げに見ながら言った。
- b. (…)「おもしろいね」

(8) a の「情けない」は相手の話を聞いて発した一言で、主観の瞬間的な表出であるの
に対し、(8) b の「情けない人」は「情けない」という主観を媒介とした話題中の人物に
対する人としての類別であり、主観と話し手との距離は相対的に間接的であると述べてい
る。また、(9) b の「おもしろい」は眼前の光景に対する話し手の直接的な感想であり、
「おもしろい」が話し手の感情なのか、「鍋」の評価なのか判然としないのに対し、(9) a
の「おもしろい鍋」は話者の知識にある既知の「鍋」を前提とした眼前の知覚対象の類別
であると述べている。すなわち、発話時の現場的な状況と発話内容との距離から、形容詞
文はより直接的・現場密着的、名詞文はより間接的・概念的であると言えるとし、こうし
た違いは、形容詞自体を述語の意味的中心とする形容詞文、事物の類別あるいは概念の限
定という形で現場の事象を認識的に表現する名詞文、それぞれの構文形式にそのまま反映
している (pp.36-37) と指摘している。

以上のように、二つの構文は共通の意味機能をもっており、表現性においても互換性が
高い。だが、両者は構文面において異なる特徴があり、両形式の相違点をより明らかにす
るためには、構文上における考察が必要であると考えられる。本論 I の第 4 章と第 5 章は、
このような点に注目して考察を行ったものである。

2.2 形容詞に関する研究

本研究で「形容詞」と呼ぶものは、学校文法でいう「形容詞」と「形容動詞」の両方を
指す。この節では形容詞に関する研究について概観する。2.2.1 節では、形容詞の分類につ
いて国立国語研究所〔西尾〕(1972)、荒 (1989) を概観し、2.2.2 節では形容詞が有して
いる内的性質について観察する。

2.2.1 形容詞の分類

2.2.1.1 属性形容詞と感情・感覚形容詞

国立国語研究所〔西尾〕(1972: 21)では、「形容詞には、客観的な性質・状態の表現をなすもの(「属性形容詞」)と、主観的な感覚・感情の表現をなすもの(「感情形容詞」)との区別があることが認められている。この区別は単語の意味による形容詞の分類の一種である」と述べ、形容詞を〈属性形容詞〉(「おおきい」「しろい」「かたい」)と〈感情形容詞〉(「嬉しい」「いやな」)に大別している。

感情形容詞の諸特徴として、「形容詞から動詞をつくる接尾語「～がる」がつくつかないか」(pp.23-25)、「感情の主体としての、人を主語にとりうるか否か⁶という主語の制限⁷」(pp.25-30)、「ガ格の対象語をとりうる性質」(pp.31-33)を挙げ、他の形容詞と区別している。感情形容詞はさらに感情形容詞(「嬉しい」と感覚形容詞(「痛い」「だるい」)に分けられる。

2.2.1.2 質形容詞(特性形容詞⁸)と状態形容詞

荒(1989)では、述語の位置にあらわれる形容詞はおおきくわけて二つの意味的なタイプ《状態》《特性》⁹にかかわっていると述べている。意味的なカテゴリーとしての《状態》はあたえられた時間の断片のなかで生じる、アクチュアルな現象をとらえていて、つねに特定の具体的な時間にしばられているのに対して、意味的なカテゴリーとしての《特性》は物にコンスタントにそなわっている、ポテンシャルな特徴をとらえており、特定の時間にしばられていることがなく、時間外的である(p.147)と述べている。「うれしい、悲しい」「痛い、痒い」のような感情的・身体的な状態(p.152)を表現している形容詞のことを《状態形容詞》、「大きい、小さい、辛い、甘い」(p.156)のような特性を表している形容詞のことを《質形容詞》と呼んでいる(例文番号は本論文の通し番号、例文と下線は原文のもの)。

⁶ 感情形容詞は主語が表現されていない場合、想定される主語は第一人称の人である(国立国語研究所〔西尾〕1972: 26)。

⁷ 国立国語研究所〔西尾〕(1972)では例外的とみられる事例もあるとし、「すきな」「きらいな」を取り上げている。「すきな」「きらいな」は感情形容詞の性格をもってはいるが、一般の感情形容詞とは違う独特の性質をもっているために、例外的な事例をなしていると述べている(p.30)。

・かれはかの女がすきだ。

・あの人はたばこがきらいです。

⁸ 樋口(1996)では、荒(1989)の《質形容詞》を《特性形容詞》と呼んでいる。

⁹ 荒(1989)は、「《特性》という言葉のかわりに、《特徴》とか《質》とか《属性》とかいう用語が使われていることもあるが、このうち《特性》という言葉を選ぶ」とし、《特性》について次のように説明をしている(p.156)。

この《特性》とは何かといえば、物や人のなんらかの側面である。もっと正確に言えば、ある物の、他とのちがひ、ひとしさを条件づけている、そのような物の側面である。たとえば、色、形、大きさ、重さ、味など、物にコンスタントにそなわっている特徴が特性なのである。

(10) 「まあ、嬉しい。今夜は久しぶりでスペイン料理なのね。」(p.149)

(11) 本場のカレーは辛いね。(p.157)

国立国語研究所〔西尾〕(1972)の言う《感情形容詞》《属性形容詞》という分類のしかたと荒(1989)の言う《状態形容詞》《質形容詞》という分類のしかたとはほぼ同じであるが¹⁰、荒(1989)の分類は形容詞の構文的な特徴、なかんずく述語によってさしだされる特徴の時間的なありか限定がもっとも重要な分類基準であり、その点で国立国語研究所〔西尾〕(1972)の分類とは異なると荒(1989)は述べている(p.161)。以上のような《質形容詞》と《状態形容詞》の分類は、樋口(1996)、八亀(2001)に受け継がれている。

本研究で扱う形容詞については、属性形容詞や特性形容詞のような主語の特性を表す形容詞、もしくはそれに準ずる形容詞を対象としている。

2.2.2 形容詞の性質

本節では形容詞の性質について概観する。形容詞の主な性質として「程度性と比較」、「主観的な側面と評価性」があり、以下ではそれぞれにかかわる先行研究について述べる。

2.2.2.1 形容詞における程度性と比較

国立国語研究所〔西尾〕(1972)では、形容詞における程度性について、「ものごとの属性を表す主要な品詞である形容詞においては、その意味の特性として「程度性」を含んでいることが非常に多い(p.155)」と述べている。また、「少し」「かなり」「非常に」などの、いわゆる程度副詞は、主として形容詞を修飾することを職能とするもので、形容詞の意味に内在している「程度性」が有形化して表わされるのが程度副詞である(p.155)と指摘している。

形容詞の中には、いわゆる反対語の関係で対をなしている(「ひろい—せまい」)ものが数多く存在しており、このことも形容詞の意味における程度性と深い関係をもっている(pp.158–159)。日本語の形容詞における反対語は性質の程度が漸層的に増減していて、反対語のどちらにも属さない中間の段階が存在するとし、このことは形容詞によってあらわされる内容が、いちじるしく程度的な性質のものであることを示している(p.160)と述

¹⁰ 荒(1989: 161)では、国立国語研究所〔西尾〕(1972)は感覚・感情を《状態》としてみていないと述べ、「もし、感覚・感情を《状態》としてとらえるとしても、《状態》は感覚・感情よりもひろい。《状態》は、生理・心理的な状態に限定されないし、物の状態もありうるからである」と指摘している。

べている。

なお、程度性ということは「比較」ということと深い関係があるとし、「一般的に形容詞が比較表現の文の述語の中心になる主要な品詞である。比較ということはものごとのある属性の程度の大小を比べることだから、程度性をその意味に本来的に含んでいる形容詞として、これは自然ななりゆきであろう。形容詞を述語として、比較表現が成り立つのは、形容詞の意味の根底に程度性が存在するからこそである (p.161)」と述べている。

日本語の形容詞は、英語などの形容詞における原級・比較級・最上級のような、比較のための語形変化はもっておらず、「より」「ほど」「ほう」「いちばん」などの形式が日本語の比較表現では大切な働きをしている (p.161、以下の例文番号は本論文の通し番号、下線は原文のもの)。

(12) a きょうはきのうよりあつい。

b きのはきょうほどあつくなかった。

c きょうのほうがあつい。

d きょうがいちばんあつい。

(国立国語研究所〔西尾〕1972 : 161)

石神(1981)にも比較構文と程度性との関連性についての指摘がある。石神(1981)では、「比較とは、ある事象を基準として、それと文の直接の素材とする事象とを比べ、その間の関係性を明らかにすることである。比較構文はその関係性を構文上に顕現させたものである (p.241)」と述べている。

また、比較表現の〈程度性〉と程度副詞の〈程度性〉の違いについては、次のように説明をしている。

比較表現の場合には、直接の素材とする事象を捉えた現実句¹¹に対し、個別的な基準としての事象を捉えた基準句を相関させることによって〈程度性〉を捉えたのであった。それは、基準を取り換えることにより〈程度性〉を逐次捉えるものである。これに対して、程度性副詞¹²の場合は、素材としての事象と同質の前提事象を言語主体が主観的に設定し、それと素材としての現実事象との相対的な関係としての関係性、即

¹¹ 石神(1981 : 241)では、比較構文「太郎の顔は次郎の顔より赤い」について、素材である〈太郎の顔が赤い〉コトと、基準となる〈次郎の顔が赤い〉コトとの間に、言語主体が比較作用によって関係設定を行っていると言明している。

・(a) 太郎の顔が赤い。(現実句)

・(b) 次郎の顔が赤い。(基準句)

¹² 石神(1981)は程度副詞を程度性副詞と称している。

ち〈程度性〉の抽出ということになる¹³。これは構文上では、前者を前提句、後者を現実句とする二句相関として存立することになる（p.244）。

以上のように、形容詞が〈程度性〉という性質を有していて程度副詞の修飾を受けるということは、比較作用によって表される〈程度性〉とも深く関係しており、本論の考察の手掛かりとなっている。

2.2.2.2 形容詞の意味における主観的な側面と評価性

国立国語研究所〔西尾〕（1972）は、形容詞の意味を調べるにあたっては、現実の世界やものごとに関する客観的な側面と、それらに対する人間の側の気持ち・受け取り方など、主観的な側面（話し手個人の主観だけでなく、その言語を使う社会の集団的な主観も含めている）とその両面を十分考慮に入れることが要請される（p.178）と指摘している。

2.2.1.1 節で取り上げた形容詞の分類（「属性形容詞」「感情形容詞」）で考えると、感情形容詞は話し手の主観的な感情・感覚そのものを表すことを基本的な性格とする形容詞グループであるが、その表す感情・感覚に対応する客観的な事態という側面があって、それは言語的に対象語の問題と深くかかわり合っている（p.178）と述べている。

うらやましい { (客) 他の人が、自分にはない、よい条件に恵まれている。
(主) 自分もその人のようであつたらよいのというきもち。

また、属性形容詞については客観的な性質・状態を表す語であるが、それは客観的な要素が語性をきめるファクターになっているということであって、主観的な要素が従属的なものとしてまつわりついていることをさまたげるものではない（p.179）と指摘している。たとえば、「まだるっこい」（「まだるい」を含める）を取り上げて、次のように説明をしている。

「まだるっこい」は客観的な側面に関しては「おそい」や「てぬるい」に共通するような性質をあらわしている。（中略）ところが、「まだるっこい」にはそういうおそいやり方や手ぬるいやり方に対する、じっとしていられないような、いらだたしい気持

¹³ 石神（1981：243）では、程度副詞の〈程度性〉は「比較表現での個別的な基準に於ける個別的な〈程度性〉ではなく、相互に関連を有することによって己れの位置を有する、言い換えれば体系的存在としての〈程度性〉としてある」と述べている。

ちも合わせ含まれている (p.179)。(中略) すなわち、「まだるっこい」は客観面では「おそい」「てぬるい」などに共通する面をもち、主観面では「もどかしい」「はがゆい」などに共通する面をもっている。そして、重点は客観面のがわにあって、属性形容詞に属している、という風に考えられる (p.180)。

さらに、もっと主観性の濃い属性形容詞になると、客観的属性を直接に表すというよりも、ある主観的な情意をよびおこすような客観的属性を表すという性格を帯びることがある (p.180) とし、「いやらしい」を取り上げている。「いやらしい」の意味は「いやな」気持ちという、主体の側の情意からでないと、簡単に規定できないといい、「いやらしい」のようなある種の形容詞の場合、話し手などの感情から独立に、一定の性質・状態が存在するというよりも、むしろ話し手などの感情のあり方によってはじめて成りたつような、性質・状態を表しているものさえある (p.181) と述べている。

そして、国立国語研究所〔西尾〕(同：185-189) では「形容詞は一般に、人間がものごとをどのように感受したかをあらわすという性格が濃いので、言語主体（ないし言語社会一般）のものごとに対する評価・価値づけの要素を含んでいることが多い (pp.185-186)」と述べたうえで、形容詞の意味における評価性について調べるにあたっては、まず、単語に含まれる評価と、単語の使用に伴う評価とを区別しなければならない (p.186) と指摘している。

単語の意味として、評価の要素を含んでいると認められるためにはその語の普通の使用において、つねにある一定の方向をもった評価性を含んでいることが必要である (p.187) と述べ、形容詞に含まれる評価的な要素の認定について、いちばん包括的な評価語である「いい」「わるい」などと、共存しやすいか、共存しにくいのか、を調べる方法を利用している。形容詞の含む評価性はこの方法によって、次の三つのグループに分かれることになる (p.189) と述べている。

- | | | |
|-------|---|---|
| いい | { | すばらしい、りっぱな、うつくしい、おいしい、あたたかい、すずしい、
しんせつな、かしこい、・・・ |
| わるい | { | くだらない、きたない、まずい、暑い、さむい、くさい、ずるい、
ふしんせつな、・・・ |
| (中立的) | { | おおい、ちいさい、ふとい、ちかい、かるい、あかるい、はやい、
あまい、わかい、・・・ |

樋口 (2001a) では、物の意義をあきらかにする、人間の意識的な活動のことを《評価》

と呼び、その人間の意識的な活動としての評価はすべての形容詞の意味のなかにうつしだされていて、色や形などの客観的な特性をさししめす形容詞であっても、その意味のなかには、その特性を物にみいだす人間の主体的な側面がくいこんでいる (p.43) と述べている。また、すべての形容詞が評価性をもっているとするれば、その評価性にしたがって形容詞を一般化することもできるとし、《特性形容詞》と《状態形容詞》(2.2.1.2 節の荒 1989 を参照) の評価性の違いを具体的に記述している。

簡単にいえば、特性形容詞では、人間による評価はある基準に照らして、それとの比較のなかで物を意味づけるが、状態形容詞では、それは人間に生じる感情をもとにして、その感情をひきおこす原因としての対象を意味づけている (p.47) と述べている¹⁴ (例文と下線は原文のもの)。

「干瓢にしちゃあ幅が広いな」

「まだ乾かねえからさ」(暗夜行路)

「よんでくれてどうも有難う。うれしいなあ、俺、こんな風によんでもらえるなんて、夢にもおもっていなかったよ」(冬の旅)

はじめの用例の「広い」という特性形容詞においては、話し手は評価することで、ある物の大きさを、それと同種の他の物との関係のなかで意味づけており、あとの用例の「うれしい」という形容詞は、人間が体験する、一時的な現象を言い表しているが、そればかりではなく、このような感情をひきおこす因果関係のなかに捉えられる対象を快の感情をひきおこす《よい》ものとして評価している (p.47) と指摘している。

本研究では、以上 2.2.2.1 節と 2.2.2.2 節の国立国語研究所[西尾](1972)、石神(1981)、樋口(2001a)が述べた形容詞の「程度性」と「評価性」という性質を参考にし、本論での考察を進めることにする。

2.2.2.3 持続的な性質と一時的な態度・様子—《特性》と《状態》の二重の性格

国立国語研究所[西尾](1972: 124-125)では、人に関する属性について、ある人のそ

¹⁴ 樋口(2001a)は、特性形容詞と状態形容詞の評価の仕方について、対象に対する人間の評価が一方では判断として、他方では情緒的な反応を通してあらわれてくるという点で異なっている (p.47) と述べている。特性形容詞では、人間による評価は、ある基準にてらして、それとの比較のなかで物を意味づけており、その意味に伴われている評価性に従って、《資格づけ的な評価》(「まるい」「赤い」など)と《価値づけ的な評価》(「やさしい」「じみな」など)とに分けている (pp.48-49)。これに対して、状態形容詞では、それは人間に生じる感情をもとにして、その感情をひきおこす、原因としての対象を意味づけており (p.47)、人間の状態をとらえているものと物の状態をとらえているものとにわけ、さらに人間の状態は生理的な状態と心理的な状態へとわかれていく (pp.52-60) と述べている。

なえている内在的・持続的な性質を表す場合がある（例 13）が、ある場合におけるある人の態度や動作のようすを表すのにもよく使われる（例 14）と指摘している（例文番号は本論文の通し番号、例文と太字は原文のもの、用例出典は省略する）。

(13) 竹尾さんなら面倒な係累もなければ、人物も極**おとな**しい方だし、(p.124)

(14) 今は明子は**おとな**しくうなずくのであった。(p.125)

前者を持続的な属性を表す用法、後者を一時的な属性を表す用法と呼んで、形容詞の意味を大きく性質と状態とに分けるとすれば、前者は性質と、後者は状態と関係が深いと述べている (p.125)。

そして、2.2.1.2 節で取り上げた形容詞の分類《質形容詞（特性形容詞）》と《状態形容詞》を中心とする荒（1989）、樋口（1996）にも同じような指摘がある。

荒（1989：155–160）では《特性》をあらわす質形容詞であっても、テンスの形をとらせて《特性》に時間的なありか限定を与えるとすれば、その《特性》が《状態》へ移行したり、状態形容詞が時間のありか限定をうけた場合や連体修飾語に使用される場合、語彙的な意味の変更が生じて《特性》の表現へと移行したりするというような現象がみられると指摘している。たとえば、「明るい、暗い、暑い、寒い、冷たい、暖かい、静かだ、賑やかだ、穏やかだ、さわがしい」のような形容詞は、時間的なありか限定のありなしとかかわって、状態を表したり（「きのうの風はつめたかった」p.155）、特性を表したりする（「北氷洋の風はつめたい」p.155）ということである（p.160）と説明している。

また、樋口（1996：49–53）でもある種の形容詞は《状態形容詞》でもあるし、《質形容詞》でもあって、二重の性格をもっていると述べている。たとえば、「さむい」とか「あつい」という形容詞は、地方の気候的な性格をさししめすためにも、またその日その日の気温の状態をさししめすためにも使われている。なお、「かたい」とか「やわらかい」とかいう形容詞、「あかい」のような色を表す形容詞なども、ときとしては状態をさししめすために使われたり、ときとしては恒常的な特性をさししめすためにも使われたりすると指摘している。次のまえの二例が状態を表し、あとの二例が特性を表す（p.50、下線は筆者）。

「今夜はずいぶんさむいわね。みんなでさわいでいること」

「今夜はあついわねえ。わたしね、いまもうスリッパ一枚でいるのよ」

「京都って、東京よりあたたかいんですか」

「冬はさむく、夏はあついというけれど、いまなら東京とおなじとおもっていいだろう」

以上 2.1 節と 2.2 節で述べたように、これまで名詞述語文、形容詞述語文についてはさまざまな研究がなされており、示唆に富んでいる。しかしながら、名詞述語文には研究を必要とするところがまだあるように思われる。名詞述語文にはさまざまな形があるが、本研究ではまず、「形容詞＋名詞」述語文（たとえば「山田先生はやさしい人だ」）に注目し、形容詞述語文との比較を通してその特徴をさぐる。

2.3 連体句と語順に関する研究

第6章では、「動詞句＋形容詞句＋名詞ダ」型の文と「形容詞句＋動詞句＋名詞ダ」型の文を取り上げ、連体句をなす動詞句と形容詞句の意味関係について考察を行う。これまで連体句についての研究は名詞とのかかわりを中心に行われており、筆者の調査の限りでは、動詞句と形容詞句（本論文では「複合連体句」と記す）の意味関係について論じた先行研究はみあたらない。

以下では、従来の研究の中で第6章と関連のある研究として、高橋（1997）の「連体機能」、高橋（1979）の「連体動詞句と名詞のかかわりあい」、佐伯（1960）の語順に関する研究を概観する。

2.3.1 連体動詞句に関する研究

この節では、高橋（1979、1997）で述べている動詞の連体形と機能、連体動詞句と名詞のかかわりあいに関する内容を紹介したい。

2.3.1.1 動詞の連体形と連体機能

まず、動詞の連体形¹⁵について、高橋（1979：77）では「動詞の連体形は、文中において、単独で、または、句や節というまとまりで、名詞にかかる」とし、「動詞句のあらわす動作や性質の主体をあらわす名詞といっしょになった形で、名詞にかかっている。これらの、動詞または、動詞でむすぶ単語群をあわせて連体動詞句、または、略して動詞句と呼ぶ」と述べている。

また、連体機能について、高橋（1997：39）では「文を構成する部分のうち、名詞でつくられた主語、補語、名詞述語のような、モノをあらわす部分にかかっている部分」を規

¹⁵ 本研究の連体形というのは、学校文法でいう「連体形」ではなく、名詞を修飾する時に用いられるさまざまな形（「買った本」「読んでいる本」など）をいう。

定語¹⁶と呼び、規定語は、そのモノがどんな特徴をもつかということでかざりつけながら（特徴の付与、「ちいさなのみがおおきなすもうとりをなやました」 p.39）、そのモノがどのモノであるかをきめつける（モノの限定、「そのくつをください」 p.40）文の部分であると述べている（p.39）。前者をカザリツケ、後者をキメツケと言っている。

2.3.1.2 動詞句の名詞へのかかわりのタイプ

高橋（1979）では、「連体動詞句と名詞のかかわりあい」について詳しく研究されており、「動詞句の名詞へのかかわりのタイプ」として「関係づけのかかわり」「属性づけのかかわり」「内容づけのかかわり」「特殊化のかかわり」「具体化のかかわり」の五つのタイプを取り上げている（pp.97-135、下線は原文のもの）。

- ・ **関係づけのかかわり**：名詞のさししめすものごとを、それが、参加者、状況など、一定の役割でかかわっている動作や状態と関係づけるかかわり（「ふたりは海外からくる返事をまった」 p.109）
- ・ **属性づけのかかわり**：名詞のさししめすものごとに属性の面からにくづけをほどこすかかわり（「自炊する浴客がおおい」 p.109）
- ・ **内容づけのかかわり**：名詞が言語活動や心理活動、表現作品などをあらわしていて、動詞句がそれに内容をあたえるかかわり（「お幾は、一夜とまって、いなかの土族のますますれいらくしていくはなしなどをつきずに良太夫婦にした」 p.123）
- ・ **特殊化のかかわり**：名詞が上位概念をあらわしていて、連体句がその下位概念で、それを特殊化するかかわり（「むすめは心から同情する気もちをかおにあらわした」 p.127）
- ・ **具体化のかかわり**：ようす、ていど、方法などをしめす抽象名詞に対して、どのようなできごとやうごきを抽象したものであるかをしめすかかわり（「やどやのゆかたがけで、このわらっているかつこうは、どうしてもうつしてくれている人がおとこね」 p.131）

「関係づけのかかわり」と「属性づけのかかわり」の間には、さまざまな段階があって、両者は連続的につながっており¹⁷、「具体化のかかわり」と「特殊化のかかわり」の間にも

¹⁶ 規定語という用語は、鈴木（1972）によるもので、工藤（2002a）、松本（2005）、早津（2010）などもこの用語を使用している。

¹⁷ 高橋（1979）では、「関係づけのかかわり」と「属性づけのかかわり」の間にはさまざまな段階があり、両者は連続的につながっていると述べている。動作の特定の時間からの解放の過程には、くりかえしてあらわれる動作があり、動作主体からの解放の過程には、一般的な主体というものがある（p.120）と指摘

中間的なものがたくさんあってそのことが動詞による連体句の性質、あるいは動詞の連体形のはたらきの性質をよく表している（p.109）と述べている。

第6章で扱う構文における動詞句は、このうち、「関係づけのかかわり」「属性づけのかかわり」「内容づけのかかわり」と深くかかわっており、高橋（1979）を参考に考察を進めたい。

2.3.2 現代文における語順の傾向

語順に関する研究には、佐伯（1960）、宮島（1962 [1994]）のような動詞にかかる補語間の語順に関するものがある。本節では佐伯（1960）について簡単に概観する。

佐伯（1960）では補語どうしのあいだにおける語順傾向について考察を行っており、語順の傾向を支配する条件を補語そのものの意味なり機能なりにそなわった支配条件にもとづいて生じる語順傾向（＜成分的条件にもとづく語順傾向¹⁸>）と補語の構文的なもののうちにある支配条件によって生じる語順傾向（＜構文的条件にもとづく語順傾向>）に分けて説明をしている。後者の＜構文的条件にもとづく語順傾向>として、次の四つを取り上げている（pp.61-63、下線は原文のもの、用例出典は省略する）。

・ながい補語はみじかい補語のまえにくる（pp.61-62）。

例）通夜の晩に集って来た近所の主婦達の中で口の多いのでよく紛擾のもとをつくる
表具師の細君が、「ほんたうに可哀さうに……同じものならお婆さんと代ればね。」
と言ったのを、煮べめの皿をかへに来たお婆さんが背中合せにゐてたしかにきいて
みたといふ。

＜成分的条件にもとづく語順傾向＞では＜ガ→ヲ＞となるところであるが、ヲがガの

し、次の図を提示している（p.121）。右下へむかうにしたがって、属性づけ的な性格が、量的にすこしずつ増大するということになる。

	くりかえし	時間から解放
特定の主体あり	① 番人はそこにいたのが <u>ときどきみかける伸子だとわかると</u> （道標203）	② <u>伸子たちがかりることのできる寢台がひとつしかなくて</u> （道標188）
一般的な主体あり	③ ニコライは…… <u>映画俳優がよくやる、いっぽうのまゆのしたからはすにあいてを見るめつきで</u> （道標180）	④ ふたりは、…… <u>年配の母娘だけがもつ信頼の調子で</u> うちあわせた。（真知25）
主体は問題にされず	⑤ <u>一月ごとにかえるあたらしい流行</u> （真知152）	⑥ <u>急所にうちこむ針の</u> ようなすどさ（桜の26）

¹⁸ ＜成分的条件にもとづく語順傾向>として次の五つを挙げている（佐伯1960：58-61）。

- ・位格（ニ・デ・カラ・ヲ）は他の格のまえにくる。
- ・トキの位格はトコロの位格のまえにくる。
- ・ガは位格をのぞく他の格のまえにくる。
- ・与格のニは対格のヲのまえにくる。
- ・カラは着格のニ・へのまえにくる。

まえにきている例である。その理由として次の二つが考えられる (p.61)。

(イ) ながい補語、とくにそれが動詞をおおくふくむばあい、それがあとにまわると、
かかり・うけの関係がまぎらわしくなる。

(ロ) 接続語以外のかかり成分は、それがながくなるにつれて性格的に接続語にちかづく¹⁹。

・指示語をふくむ補語はそれをふくまない補語のまえにくる (p.62)。

例) それを井口が受けたのだとは……。

<成分的条件にもとづく語順傾向>では<ガ→ヲ>となるところである。指示語をふくむ補語がそれをふくまない補語よりまえにくるのは、それがあとにまわるとかかり・うけの関係がまぎらわしくなるからそれをふせぐためということがあるにはあるが、やはりこれは前項の(ロ)にのべたところと同じ理由によるものと考えられる。但し、前項の長い補語は「動詞+接続助詞」による接続語にちかづくのに対し、指示語をふくむ補語は「そして・それから・そこで」などの、接続詞による接続語にちかづくのである (p.62)。

・一補語の意味が他の補語の意味にひびいていくばあい、一補語は他の補語のまえにくる (p.62)。

これはひろい意味でのかかり、うけである。「川波」が「真上」に意味のうえでひびいており、「真上」は「川波の真上」である。

例) 川波が真上に日をうけているキラキラを

・動詞に、特定の補語をともなって融合 (cohesion) 化する慣用のあるばあい、特定の補語はそれを要求する動詞の直前にくる (p.63)。

例) 隅田川へ身を投げて

例) 昨夜の事を根に持ったおしいは

「身を投げる・根に持つ」のような「補語+動詞」²⁰のあいだに他の補語をいれたりす

¹⁹ 佐伯 (1960 : 62) によると、「補語は「名詞+助詞」のかたちをとって、意味の重点は名詞にあるが、接続語は「動詞+助詞」のかたちをとって意味の重点は動詞を中核とする叙述におかれる」とし、ここに補語と接続語の性格差があると述べている。

また、同じく補語であっても、動詞をふくむ長い補語は接続語に近い性格を持っており、語順のうえでも題目語をこえ、接続語のあとにまでさかのぼると指摘している (p.62、下線は原文のもの)。

・ 海に臨んだ数百尺の高さの崖の突端で睡眠薬を飲んで倒れているところを海上の漁船に発見されたのだという。

・ むしろ吟子がアッサリと真鍋に会わないことを希ったものの、一面、

²⁰ 佐伯 (1960 : 63) では、「なづける・よみつかれる・ちかよる」のような動詞を<複合動詞>と呼ぶの

ると、補語や動詞が意味的に独立して、それぞれ別の意味をもったり、そうならないまでも心理的・感覚的に自然さをうしなったりすることになるのである (p.63)。

これをもとに考えると、「動詞句＋形容詞句＋名詞ダ」型の文では動詞句が形容詞句より通常長いため、形容詞句の前に配列されるということになる。しかし、このような構文的な条件以外にも、動詞句と形容詞句の組み合わせには何らかの意味的な特徴があるのではないかと考えている。

2.4 「モノダ」文と「コトダ」文に関する先行研究

本論Ⅱの第7章では、「形容詞＋モノダ」文と「形容詞＋コトダ」文を取り上げているが、考察に先立って、この節では「モノダ」文と「コトダ」文全般にかかわる主な先行研究について紹介しておきたい。

2.4.1 実質名詞「もの」「こと」と形式化

2.4.1.1 「もの」と「こと」の指示対象

寺村(1981)は「モノ」と「コト」²¹の指示対象について、「モノ」は「石」や「足音」や「ビール」のように、五官で知覚されるもの(「物理的な具体的存在」)、「旅」「運命」「波瀾」「情欲性」「楽シミ」など、それぞれの文脈、状況での特定のそれら(「心理的な具体的存在」)を指す(p.753)のに対して、コトの対象は命題で表されるような内容や、動詞、形容詞で表される動作、作用、変化、状態、属性などを一般的に概念として表したものである(p.754)と述べている。つまり、モノが個別的であるのに対してコトは一般的、モノが感覚(五官)ないしそれに準ずる心理作用によって把握される対象であるのに対して、コトは思考によって把握される対象、発話や知識の内容であるというように対置できる(p.754)と述べている。

2.4.1.2 「もの」と「こと」の形式化

寺村(1981)は名詞の形式化について、寺村(同：744)で「名詞がその実質的意義によって文の実質的内容を埋める文末の機能から、実質的意義を担う部分をつなぎ合わせた文の陳述を完成させたりする機能に転ずるに従って、それらの名詞の実質的意義は希

に対して、「身を投げる・根に持つ」のような「補語＋動詞」のかたちの動詞を＜融合動詞＞と呼んでいる。

²¹ 先行研究を引用する際、「もの」「こと」の平仮名、片仮名の字体については、原則的に原文のまま引用する。

薄になり、時には前身を云々するのが無理なほどかけはなれたものとなる」と述べたうえで、「名詞の文末の形であるモノダ、コトダと「助動詞化」したモノダ、コトダとはっきり一線を画することが難しい場合がある (p.755)」と指摘している (pp.755-756、例 26～28、例文番号は本論文の通し番号)。

- (15) 「私は、せんそうがとてゝざんこくなものだとなりました。一つのせんそうがあるため国はメチャメチャになり、ほのおの海になってしまうのです。だれがせんそうなんて考えだしたのでしょうか」
- (16) 「もうちょっと云わせて」とおそのは頭をぐらぐらさせながら続けた。「一女というものはね、おしのちゃん、自分のためにはなにもかも捨てて、夢中になって可愛がってくれる人が欲しいものよ。あたしのためならむさし屋の店も、財産もくそもないというほどうちこんでくれたら、あたしだってもう少しあの人に愛情を持てたと思う」
- (17) 「……北海道のよさは、晩秋と冬ですね。雪の深いのも見事ですが、今ごろ、満山の葉が落ちて蕭条とした風景になっているのもいいもんですよ」

(15) のモノダのモノは、「ざんこくなものだ」を「(その) ものが残酷だ」と置き換えられないこともないから、名詞としての使い方と同じであると言えるが、そのような「修飾語対被修飾語としてのモノ」という関係を (16) にも認めることはもはや無理であり、(17) のように、「いいものだ」という叙述の主題は、一つの風景である、といった場合になると、モノはダといっそう強く一体化して、先行する句全体に対する話し手の主観を表わすものとなっている (p.756) と説明している。

つまり、「…モノダ」は、本来はある対象を大きくモノに属するものと類別し、修飾部「……」でそれを特定するという形であるが、その修飾部が単なる特定・限定という範囲を越えて、「一般に(主題となっているあの特定の対象が) こういう性格、本性をもっている」という主張の、その性格、本性を表わすように使われることが多い。そのように「X ハ…モノダ」という単なる類別と特定を表わすための容れものが X についての話し手の本性規定を表わすためのものとして利用されるとき、モノダは「X ガ……デアルコト」を包む陳述の助動詞とみなすべきものとなる。そしてその「本性規定」は、客観的な事実として述べる体裁をとりながら、自分がこれまで気付かなかったある対象の本性、話し相手ないし世間一般が気が付かずにいるある本性を相手に訴えたい、気付かせたい、共感を求めたい、といった心の動きに出ている (p.756)」と述べている。

寺村 (1984) では、「モノ」という名詞は最も抽象名詞らしいものの一つであり、どのよ

うな用法までを実質名詞としてのモノの用法、どこから先を形式化したもの、と分けるかはむずかしく、慎重な観察が必要である（p.297）と述べている。

「モノダ」文の構文的な特徴と意味との関係については、以下の前の三つの文（例 18～20）と後の四つの文（例 21～24）を比較しつつ、その構造や意味の違いについて説明をしている（pp.298-300、例 100～103、104～107、下線は原文のもの、例文番号は本論文の通し番号）。

(18) これはじゃがいもの皮をむくものです。（p.298）

(19) 病人はいつも自分より軽症の者に嫉妬を感じるものだ。（p.298）

(20) 運命というものは分からぬものだ。（p.298）

(21) 男ノ子ハ泣カナイモノダ（p.299）

(22) 何年も前から、「もっと魚を食べよう」というキャンペーンがソ連全土で行われた。

畜産の伸びなやみを魚でカバーしようというものだった。（p.299）

(23) 夏祭ニハイツモソウメントハモヲ食ベタモノダ（p.299）

(24) 毎日掃除していてもよくごみがたまるもんだねえ。（p.299）

これらの文を「P ハ Q モノダ」という型の文だとした場合、(18) ～ (20) と比べてみると、(22) ～ (24) は「P ハ」の部分がその文中にみあたらない。また、前者は何らかの意味でPを特徴づけ、性状を規定する文型であるのに対し、(23) はかりに「私たちは」を補っても、「私たち」に対して性状規定をしている文とは認めがたく、(24) にいたっては、「……モノダ」に対するPを設定することは明らかにできないと述べている。例 (21) については、(19) (20) の意味が本性、本質を表しているのに対し、(21) のそれは、本性という形をとって「かくあるべし」という当為、または理想の姿を主張する言い方であると指摘している。

「こと」の形式化については、寺村（1981）は助動詞化したとみられるコトダはモノダほど多彩ではないとし、例 (25) のような「何々スルコトガ大切ダ、必要ダ」を端折ってという言い方と例 (26) のような感嘆、意外（時に心外）を表す言い方があると述べている（p.760、例 38、40、例文番号は本論文の通し番号）。

(25) とにかく睡眠を充分とることです。

(26) 天の河と大地の交合の前では、人々の営みがいかに小さく、はかなく見えることか。

また、日本語記述文法研究会（2003：193）では「ことだ」の文が「～が」「～は」を伴

い、「ことだ」に「こと+だ」という意味以外の特別の意味合いが感じられない場合は名詞の「こと」で（例 27、28）、「ことだ」に「こと+だ」という意味以外の意味合い（助言・忠告など）が感じられる場合は、助動詞の「ことだ」である（例 29）と述べ、次の例を挙げている（下線は原文のもの、例文番号は本論文の通し番号）。

(27) この仕事こそが、私がずっとやりたかったことだ。

(28) 大切なのは、あきらめないことだ。

(29) 後悔したくなかったら、あきらめないことだ。

「ものだ」と「ことだ」の意味用法については、2.4.2 節であらためて述べることにする。

2.4.1.3 実質名詞「もの」と形式的用法との意味的つながり

揚妻（1991）は実質的名詞としての「もの」とモーダルな表現として形式化した「もの」との意味的つながりという点に注目して論じている。

まず、揚妻（同：6）では、名詞「もの」の性格について、次のような例を挙げて説明している。（以下、例文と下線は原文のもの、例文番号は本論文の通し番号）

(30) a このケーキ、とてもおいしいから、ひとつどう？

b このケーキ、とてもおいしいものだから、ひとつどう？

a の場合、ケーキが“おいしい”という判断は、話し手自身が下しているのに対して、b のケーキが“おいしい”というのは、ケーキという“もの”がもつ属性であり、“もの”の属性であるということは、発話時に話し手が判断する以前に、すでに客観的に既定であると述べている。「ものだ」がここではたしている機能は、「ケーキがおいしい」という概念を客観化、既定化することであるとし、「もの」のこういった性格が、形式化しモーダルな表現になった場合の「ものだ」の性格につながっている（p.6）と説明している。

そして、「もの」の意味とモーダル化した「もの」の意味との関係については、次のように述べている（p.7）。

(31) a やっぱり新都庁って、大きな建物だなあ。

b やっぱり新都庁って、大きなもんだなあ。

実質的な意味をもつ「建物」が述部になった（31）a は客体的表現にとどまり、意味の

抽象的な「もの」が述部になった(31) bはモーダルな表現として形式化すると述べ²²、意味の抽象性とモーダルな形式化とが相関している(p.7)と指摘している。

また、「ものだ」のもつ詠嘆、教示・当為表現は上接概念を一般的通念として捉えているわけであるが、一般的通念というものは、話し手が発話時に判断する以前に客観的に既定されたものであり、こういった点で、実質名詞の「もの」の性質と通じている(p.10)と述べている。

2.4.2 「ものだ」と「ことだ」の意味・用法

これまで「ものだ」と「ことだ」の意味・用法については、多くの研究者によって論じられてきた。本節では、そのうち寺村(1980、1984)、日本語記述文法研究会(2003)、高橋他(2005)を概観する。

2.4.2.1 「ものだ」のモーダルな意味

寺村(1984 : 301-305)には、次のような「ものだ」の意味・用法が挙げられている。(括弧内の例文番号と下線は原文のもの、例文は文末が「ものだ」で終わる文のみを引用し、前後の文は省略する)。

- (i) 理想の姿、当為を表わす((113) 一人っ子というのは、両親をはじめおとなが過保護にしすぎて、わがままで自尊心がつよく、自己中心的となりやすいものだ。 p.301)
- (ii) 既に起こった事件、現象、状態について、どういう成り行きでそうなったのか、その原因は何か、その背後の事情は何か、などを解説的に述べる。((116) この危機を乗り切るため、タフで知られ、かつカーター大統領の信任の厚い「スーパー大使」ストラウス氏の出馬となったものだ。 p.302)
- (iii) 追想、なつかしさをこめての回想((122) 芸術に興奮したのかあるいは酒に酔ったのか、鳥海や林武や私など鎌倉の海辺の砂浜をおどくったものだ。 p.304)
- (iv) 驚き。ある事実に(改めて)驚き、あるいは一種の感慨をおぼえたときの表現((124) 根本は、若いときの彼の顔を思い出し、この男も年を取ったものだなど見ていた。 p.305)

また、日本語記述文法研究会(2003 : 218-225)では、「ものだ」の主な用法として「本

²² 揚妻(1991 : 7)では、(31) bのような文を寺村(1984)ではまだ普通の名詞文の範疇に入るとしているが、これは詠嘆的表現性を有しており、すでに形式化しているといってよいと述べている。

質・傾向」「当為」「回想」「感心・あきれ」の四つの用法を取り上げている（以下、下線は原文のもの）。

- 1) 本質・傾向：「**X**は**Y**ものだ」の形で、**X**の本質や傾向を述べる用法である。**X**は総称的な名詞に限られる（p.221）。
 - ・人は、寂しいものだ。（p.219）
- 2) 当為：「**X**は**Y**ものだ」の形で、一般的に望ましいと話し手が考えている行為を提示する（p.221）。
 - ・学生は勉強するものだ。（p.221）
- 3) 回想：過去の出来事を回想する用法。習慣的な出来事を回想することが多い。単に思い出しているのではなく、なつかしさを伴う回想である（p.222）。
 - ・夏祭りには毎年ゆかたで出かけたものだ。（p.218）
- 4) 感心・あきれ：意外な事態に対する、感心やあきれを表す。終助詞「な（あ）／ね（え）」や、可能を表す動詞が用いられることが多い。可能を表す動詞の文では、「よく（も）」が必須である（p.223）。
 - ・こんな雨の中、たくさん人が集まったもんだなあ。（p.223）

日本語記述文法研究会（2003）では、「もの」は名詞として用いられているのか、助動詞「ものだ」として用いられているのかという区別が困難な場合がある」とし、次の例を挙げ、説明をしている。「ものだ」の「もの」をほかの実質的な名詞で置き換えても意味が変わらず「ものだ」に「もの+だ」という意味以外の特別の意味合いが感じられない場合は、名詞の「もの」である（p.192）と述べている。

- ・これは、手紙の封を切るものだ。
- ・これは、手紙の封を切る道具だ。

これに対し、「ものだ」の「もの」をほかの実質的な名詞で置き換えることはできるが、「ものだ」に「もの+だ」という意味以外の特別の意味合い（本質や傾向を表すなど）が感じられる場合は、中間的であるが、助動詞の「ものだ」である（pp.192-193）と述べている。

- ・人間というのは、孤独なものだ。
- ・人間というのは、孤独な生き物だ。

なお、「ものだ」の「もの」をほかの実質的な名詞で置き換えることができない場合（「うれしいときにはうれしそうな顔をするものだよ」p.193）は、助動詞の「ものだ」である。

このほか、高橋他（2005：229-232）では、「ものだ」の意味用法について、接続助詞的用法を含め、六つの用法を取り上げている。

① 一般化されたものごとをあらわす「スルモノダ」

・りくつや習慣からいって当然そうなる（そうである）ことをあらわす。

（死にもの狂いで愛していれば、そんなことわかるものよ。p.230）

・使用の場では、あいて、またはじぶんにいつてきかせるという当為的な性格をおびることがおおい。

（いいんだよ、さっさと沸かしなよ。だいいち湯なんてもものアねえ、ちゃんと沸かしとくもんだよ、そうだろう？p.230）

② できごとの回想をあらわす「シタモノダ」

・くりかえされたデキゴト、あるいはつづいた状態を回想するものがおおい。

（兄の隆一郎が、時々、自分や弟に、カブトを折ってくれたものだ。p.230）

③ 感心、あきれをあらわす「シタモノダ」「スルモノダ」

（妙なところに迷いこんだものだ。p.231）

④ 命題の確認と宣言の「スルモノデアル」「シタモノデアル」

（失神させた上、さらにデスクの上の電話機のコードで吉井を絞殺した。その後、テーブルや椅子、電話機、出入り口のドアの握手などに付着した指紋を拭いて、逃走したものである。p.231）

⑤ 理由をあらわす「スルモノダカラ」「スルモノデ」

（空腹なものですから、失礼しています。p.232）

⑥ 反語的な「スルモノカ」

（膝の上へ茶をこぼして、ポカンと見てる奴があるもんか。（p.232）

2.4.2.2 「ことだ」のモーダルな意味

次は、「ことだ」のモーダルな意味用法について概観する。「コトダ」文に関する主な研究としては、寺村（1980、1981、1982、1984）、日本語記述研究会（2003）、高橋他（2005）などがある。

寺村（1980）では「ことだ」のモーダルな意味用法について、次の二つを取り上げている（pp.116-117、例 40、41）。

(i) 「～ことが大切、必要だ」の意味²³

・「復帰した以上、日本人になり切ることです。子どもの将来、たとえば進学や就職にさいして、洋名では、自ら差別を求めることになりはしないでしょうか。」

(この否定には「～ナイコトダ」「～コトハナイ」のふた通りがある。p.116)

(ii) 感心・感嘆

・「今頃になって、よくそんなことが言えたことだ」

(この用法の「ダ」が落ちると、これはもう終助詞化したものというべきである

²⁴。p.117)

日本語記述文法研究会(2003)でも「助言・忠告の用法」(「勝ちたいのなら、とにかく毎日練習することだ」p.226)と「感心・あきれの用法」(「ほんとうに、うらやましいことだ」p.227)の二つの用法を取り上げている。

一方、高橋他(2005)では、「ことだ」の意味用法について上の二つの用法のほかに三つの用法を付け加え、五つの用法を挙げている(pp.232-235、下線は原文のもの)。

① とるべき方法をあらわす「スルコトダ」

(トラックは魚くさかったが、魚屋が「何だか知らねえが、もうそろそろ夜が明けるだろう。河岸の松島がどっかで、一ぱいやって、気分をなおすことだね」と慰めてくれた。p.232)

② 感動的に回想・評価する「シタコトダ」「シタコトカ」

(ああ、その時僕がどんなにドキドキしたことか。p.253)

(なんというばかなことだ。p.253)

③ 想像や感動の内容をかかげる「スルコトダロウ」「シタコトダロウ」

想像の内容をかかげて、その実現を推量する。

(雪どけとともにネズミは土からあふれ、灰色の洪水となって林になだれこみ、田畑にひろがってゆくことだろう。p.234)

²³ 森田・松木(1989:205)では、「ものだ」の当為用法との違いについて、「「ものだ」は人間の意志とは無関係に外在する対象を中心に把握するため、話し手の自由な評価や判断を超えた一般論としての当為を主張する。従って、自然の傾向、社会的習慣、常識、習性などに基づくことが多い」のに対して、「「ことだ」は人間中心の対象把握が基本にあるため、その行為や事態・事柄などに対しての話し手自身の個別的な意見・意向を提出することになる。どのような主張をするかは話し手の自由に任されているのである」(p.205)と述べている。

・単語がわからないときはすぐ辞書で調べるものだとよく言われるが、そうではなくて、文の前後関係から意味を判断する練習をすることだ。それが英語力をつけるコツだよ。

²⁴ 「こと」の終助詞化した用法については本研究の対象外とする。

④ 伝聞をあらわす「～トイウコトダ」「～トイウコトダッタ」

(詳しいことは存じませんが、母の話ですとお作業奉行の津田さまがなすったと
いうことでございます。 p.234)

⑤ 理由や前提をあらわす「スルコトデアリ」「スルコトダガ」

(教団も最近はや若い信者層が増加していることでもあり、彼らの意見を代表するよ
うな新しい候補者を送ったほうがよいという声が強くなっている。 p.235)

(精密な植物図鑑を繰ればわかることだが、ササは救荒植物の一つということにな
っている。 p.235)

従来の研究では、「モノダ」文と「コトダ」文の意味用法の分類が中心となっているが、
本研究では述語名詞としての「もの」「こと」とモーダルな形式「ものだ」「ことだ」の連
続性に注目して、その構文的環境をさぐることを試みる。

2.5 本研究における用語の扱いについて

2.5.1 文の意味機能に関する用語

研究者によって、文の意味機能に対して使用する用語に異なりがみられるため、本節で
少し説明しておきたい。2.1.2 節の新屋 (2009) は名詞述語の意味機能について「類別、同
定、名称提示、性質規定、状態叙述、評価、動態叙述」という用語を用いている。これら
の用語については、次のように説明している (pp.30-33)。

- ・「類別」：事物の種類を表す
(「珊瑚ハ動物ダ」 p.33)
- ・「同定」：主語の指示対象と述語の指示対象とが一致することを表す
(「アノ子ハ息子ノ太郎ダ」 p.33)
- ・「名称提示」：事物の内実には言及せず名称だけを表す用法
(「コノ花ハ“コーレリア”デス」 p.33)
- ・「性質規定」：時間に左右されない事物の恒常的性質を表す
(「ソノ話ハ事実ダ」「彼ハオトナシイ性格ダ」 p.33)
- ・「状態叙述」：時間的、空間的に局在する事物（表現主体の内面を含む）の状態を表す
(「今コノゲームガブームダ」「今経済ハ危機的ナ状態ダ」 p.33)
- ・「評価」：自他の行動や事象に対する話し手の評価（狭義）を表す
(「ソレハ彼ノ能力ノ問題ダ」 p.33)
- ・「動態叙述」：事物の動きや変化を表す

（「彼ハ明日出発ダ」 p.33）

一方、荒（1989）、奥田（1996）、佐藤（1997）、工藤（2012）などでは、述語²⁵の意味的なタイプとして〈運動、状態、存在、特性、関係、質〉を用いている。これらは一時的現象〈運動、状態〉か恒常的本質〈特性、関係、質〉かに大別され、このうち、名詞述語文は〈特性、関係、質〉の意味を主に表す（工藤 2012 : 160）と述べている。

- ・タマが障子を破る。 〈運動〉
- ・あの人の自慢話にはうんざりする。 = うんざりだ。 〈状態〉
- ・太郎は優秀だ。 = 優等生だ。 〈特性〉
- ・タマは三毛猫だ。 〈質〉

本研究では、新屋（2009）の「類別」「性質規定、評価」「状態叙述」「動態叙述」を、それぞれ「質」「特性」「状態」「運動」にほぼ相当するものとして捉えている。

2.5.2 文の成分に関する用語

本研究では、「形容詞＋名詞」述語文の考察にあたって、構文的な分析を行うことになるが、文の成分（文の部分）の規定については、国立国語研究所（1963）、鈴木（1972）、工藤（2002a）、高橋他（2005）、松本（2005、2006）などを参照することにする。

学校文法では、「主語、述語、連体修飾語、連用修飾語、独立語」の五つの成分をみとめている。用言にかかるものを一括りして「連用修飾語」としているが、そこには文中での働きを異にするものが混在している。国立国語研究所（1963 : 73）ではこの連用修飾語を解体し、新たに A 類、B 類の二つの種類を立て、さらにこれらを「目的語」「補語」「連用語」「状況語」に下位区分している（以下の例文と下線は原文のもの p.73）。

- (i) 目的語 : 子ドモニ ミカンヲ ヤル
- (ii) 補語 : 彼女ヲ 先生ト ミナス
- (iii) 連用語 : 静カニ 歩ク
- (iv) 状況語 : ケサ アサガオガ 咲イタ

まず、A 類には「目的語」と「補語」が属し、「目的語」は述語の表す事柄の成立に参加

²⁵ ここで述語というのは、「動詞述語、形容詞述語、名詞述語」を指す。

する対象（実体あるいは実体化された事柄）を示す成分で、「補語」は述語の表す事柄の成立に参加する属性（あるいは実体の属性的な面）―変化の結果の状態や認識活動・言語活動の内容―を示す成分である（p.73）。

また、B類には「連用語」と「状況語」が属し、これらは述語の表す事柄の成立に直接参加するものではないものである。「連用語」は述語（あるいは述語にかかる主語・目的語・補語とのくみあわせ）の表す事柄の性質・ようす・程度など、属性を一層詳しく示す成分で、状況語は述語（あるいは述語にかかる主語・目的語・補語・連用語とのくみあわせ）の表す事柄をとりまく外的な状況（時間・空間・原因・理由・条件……）を示す成分である（p.75）。

本研究では、「主語」「述語」「規定語（連体修飾語）」「独立語」のほか、連用修飾語を解体した「補語（目的語、補語）」「修飾語（連用語）」「状況語」を含め、七つの文の成分をもとに本論の考察を進めることにする。

第Ⅱ部 本論Ⅰ

—「形容詞＋名詞」述語文の性質—

第3章「形容詞＋名詞」述語文の主語と述語構造にみられる特徴

本題に入る前に、本章では「形容詞＋名詞」述語文の主語名詞と述語名詞との関係や形容詞の意味と述語構造との関係について観察する。

3.1 主語名詞²⁶について：個別・具体的なもののか、一般・総称的なもののか

本研究では考察にあたって、主語に来る名詞を個別・具体的なものと一般・総称的なものとに大別して考察を行っているので、本論に入る前に本節で主語名詞の性質について簡単に概観する。

まず、本研究でいう個別・具体的な主語名詞というのは、文の中で一つ一つの個別かつ特定の人、物、場所、出来事などを表すものを指す。たとえば、例（1）のように、特定の名前を指名したり、例（2）の「こちら」のようにいわゆる指示詞を使って特定の場所などを指したりするものである（以下、主語名詞は太線で示す）。

- （1）「健太郎君は、ずいぶんと明るい子ですね」（中略）「あいつは勉強は駄目だが、サッカーは上手い」（グラスホッパー：212）
- （2）「この窓の方角は？」（中略）「北西になります。（中略）こちらはこの時間から日が沈むまで、よく日のあたる明るい部屋です」（愛がない部屋：75）

なお、次のように特定の地名を指す場合も個別的な主語名詞として扱っている。

- （3）「シンガポールは面白いところよ。食事もおいしいし、近くに素敵なリゾートもあるし。」（色彩を持たない多崎つくると彼の巡礼の年：101）

一方、一般・総称的な主語名詞というのは、特定の人、物、場所などではなく、「人間、女性、海、山、夏、冬、旅行、人生、自由、世の中」などのような一般的で総称的なものを指す。

²⁶ 本研究での主語名詞は、単純名詞以外に名詞句、名詞節のようなものが主語になるものも含む。

- (4) 「海を守るとはということなのかな。海は人間に守ってもらわなきゃならないほど脆弱なものだろうか」 (真夏の方程式：45)
- (5) 「自由って、いいものですか」(中略)「今の世の中、あたしたちを拘束するなんていう、責任っぽいこと、誰もしてくれないのよ」「はあ」「自由って、いやなものよね」 (風花：138)

但し、次の例のように、普通名詞「自然」「夏」が「日本」による修飾を受けて、文脈上他のものと対比されているなどして特定のものを指している場合、このような主語は個別・具体的な主語名詞として分類した²⁷。

- (6) 「この自然は、なんだか、力が強すぎて、もしも自分が弱っている時だったら、強烈すぎて、胸焼けがしてくるようだろうね。」(中略)「日本の自然と全然違う。」
「日本の自然は、もっと線が細いよ。」 (不倫と南米：157,158)
- (7) 「いいなあ、ほんと日本の夏って」「僕は、もう少し涼しい方が良いと思う」郡司は言った、「北海道とか、スイスの夏が羨ましい」 (カクレカクリ：202)

この分類については、まだまだ考察が必要であるように思われるが、本研究においてはこの分類を参考にして考察を進めている。

3.2 主語名詞と述語名詞との関係

本節では、「形容詞＋名詞」述語文における主語名詞と述語名詞との関係について観察する。本研究で対象としているこの構文は、主語の特性を形容詞の語彙的な意味で表しており、述語名詞は実質的には意味を持たない。すなわち、構文上述語には基本的に主語名詞より上位概念の名詞（上位語）が来るようになる²⁸。

主語が個別・具体的なものを指す場合からみると、主語名詞が人名詞であれば、「人、

²⁷ 今回はこのような基準で考察を行ったが、主語の指すものが個別・具体的なものか一般・総称的なものかというのは文全体の叙述内容によって決まることが多いようである。

²⁸ 新屋（2009：34）に同じような指摘がある。（例文、下線は原文のもの）

1) a. あの子は素直だ。 b. あの子は素直な子だ。
2) a. 雪は白い。 b. *雪は白い雪だ。

2) b が不適格である理由は、主題の指示対象と述語名詞が 1) b では包摂関係にあり、2) b では包摂関係にないためであると言いき、2) a と実質的に等価であるためには、たとえば「雪は白いものだ」のように、述語名詞が主題の上位語でなければならないと述べている。本章の 3.2 節はこれをより詳しく展開、考察したものである。

人間、男、女、子、奴」など、モノ名詞であれば「もの」、コト名詞であれば「こと」、場所名詞であれば「ところ」などが述語名詞になる。まず、人名詞からみる。

(8) 「私はとても平凡な人間です。いや、平凡以上です。頭もはげかけているし、おなかも出ているし、先月40歳になりました。」 (神の子どもたちはみな踊る：170)

(9) 「彼女は髪の長い、物静かな女の子です。顔は風の谷のナウシカを少し虚弱にしたような感じで、性格は明るく、ずっとクラス委員をしていました」

(世界の中心で愛をさけぶ：21,22)

主語名詞と述語名詞の関係からみると、主語名詞と述語名詞は包摂関係にあり、これらの述語名詞はそれ単独では情報伝達上の価値を持たない。すなわち、例(8)(9)は「私は人間だ」「彼女は女の子だ」ということを言いたいわけではなく、「平凡だ」「物静かだ」ということを言いたいのであり、内容的には「形容詞＋名詞ダ」全体が述語として機能しているのである。

なお、次のような物(例10)、事(例11)を表す場合も同様に、述語名詞は主語名詞より上位概念の名詞でなければならない。

(10) 「国境を越えたモンゴル側にも同じような博物館があるけれどそっちはずっと大がかりだし、展示してあるものも立派なものですよ」と案内してくれた人は言っていたけれど、後日行ってみると実際にそのとおりだった。 (辺境・近境：199)

(11) 「おまえ、警察に行きたいのか」「まさか」春は即答した。「でも、悪いことをした」「おまえのやったことは、どちらかと言えば、良いことだよ」良くて、悪いことだ、と心の中で呟いた。 (重力ピエロ：441)

その他、場所や組織を表すさまざまなものがある。次の例も個別の「シンガポール」「コンゴ」と類の「ところ」「国」で、述語名詞が主語名詞より上位概念の名詞であり、形容詞と相まって「面白いところ」「富裕な国」であると述べている。

(12) 「シンガポールは面白いところよ。食事もおいしいし、近くに素敵なリゾートもあるし。」 (色彩を持たない多崎つくると彼の巡礼の年：101) (= (3))

(13) 「略奪物資か?」「そうです。地下資源の量から言えばコンゴは世界一富裕な国です。」 (ジェノサイド(上):179)

では、主語名詞が一般・総称的なものを指す場合はどうであろうか。たとえば、「駅伝」

「バドミントン」のような普通名詞を主語とする文であれば、それを含む上位概念の名詞「競技」「スポーツ」が述語名詞になる。一般的な主語名詞と述語名詞の関係は、個別・具体的主語名詞の場合と同じように、意味上、やはり包摂関係にある。

(14) 「ばらばらになってさ、また会うために走る。駅伝はへんな競技だ」「うん。へんな競技だ」ふたりは静かに頷きあった。(奈緒子：168)

(15) 「バドミントン？娘はバドミントン部か」(中略)「おまえもちろん知ってるだろうけど、あれはかなり激しいスポーツだ。中学生とはいえ、クラブの練習をすればくたくたに疲れる」(容疑者Xの献身：142)

つまり、一般・総称的な名詞というのはそれ自体がある個別かつ特定のものの上位の名詞であるが、それが主語名詞になる場合は、述語にはそれより一層上位概念の名詞が来るのである。次のように、抽象名詞が主語になる場合には「もの」が述語名詞になる。

(16) 「人はいろいろな別れに遭遇するものだ。(中略) おまえの辛さはよくわかる。だがね、それでもわしは、人生はいいものだと思うよ。美しいものだと思う。美しいなんていうと、いまの朔太郎の気持ちにはそぐわないかもしれないが、実感としてそう思うんだ。人生は美しいとね」(世界の中心で愛をさけぶ：201,202)

(17) 「死は美しくなんてない。ただ悲惨で虚しいものだよ。そのことはどうしようもないじゃない」(世界の中心で愛をさけぶ：198)

例(16)(17)の文の主語は、「人生」「死」のような抽象名詞で、これらを具体的な対象として捉え、最上位概念の名詞「もの」が述語になり、それぞれ「いいもの」「美しいもの」「悲惨で虚しいもの」のように、「形容詞＋名詞ダ」全体が「合成述語²⁹」になっている。

また、主語が次のようにコト名詞や事柄を表すものの場合には、述語名詞に基本的に「こと」が来るが、場合によっては、例(19)のように述語名詞に「もの」が来ることもある

³⁰。

²⁹ 述語は組立ての観点から、単純述語simple predicateと合成述語(あわせ述語)compound predicateとに分かれる。単純述語とは、ひとつの単語(単語形式word form)からなる述語で、合成述語とは、ふたつ以上の単語のくみあわせからなる述語である(佐藤2010：50)。まつもと(1978)では、単純述語と合成述語のかわりに、ひとえ述語とあわせ述語という用語を使用している。

³⁰ 『日本国語大辞典』第二版第五卷では、「もの」と「こと」の語誌について、「ふつう、「もの」が、形を備えた物体、この世に生起するあらゆる現象のもとになる持続的な存在をいうのに対して、「こと」はその「もの」の働きや性質・状態、変化の過程、「もの」と「もの」の関係などをとらえる語とされるが、実際には、ある対象を「もの」ととらえるか「こと」ととらえるかは、話し手の対象への対し方によって揺れがあり、必ずしも固定したものではない」(p.901)と記述している。

- (18) 「わしらの世界で人が死ぬことは酷いことだなあ、朔太郎」祖父は親身な口調で言った。「死後もなく、生まれ変わることもなく、死はただの空虚でしかない。なんとも酷いことじゃないか」 (世界の中心で愛をさけぶ：198)
- (19) 「なあ朔太郎、好きな人を亡くすというのは悲しいものだ。この思いは、どんなふうにしたら形では表せない。」 (世界の中心で愛をさけぶ：57)

このように、主語名詞が一般・総称的なものを指す場合には、最上位概念の名詞「こと」や「もの」が述語に来る。但し、次のように主語名詞が個別・具体的なものの場合には、述語名詞に最上位概念の名詞「もの」が来ると不自然な場合がある。つまり、述語に来る名詞は上位概念の名詞なら何でも可能であるということではなく、主語が個別・具体的なもののか、一般・総称的なものかによって、上位概念を表すものとして述語になれる名詞が異なってくると言えるだろう。

- (9)? 「彼女は髪が長い、物静かなものです」
- (13)? 「コンゴは世界一富裕なものです」

一方、主語が一般・総称的なもので、述語名詞に最上位概念の名詞「もの」が来る場合、述語名詞「もの」が形式化し、感嘆・詠嘆のようなモーダルな意味を表すようになることがある。この場合、述語名詞としての「もの」とモーダルな意味を表す「ものだ」と、その境界を線引きすることが難しくなる。

- (20) 「直之くんの相手のお嬢さんと、この間少し話したよ。隣町にある写真館で写真を撮ったことがあるんだとか。そこの主人は昔からよく知っていてねえ。いやあ、世間は狭いものだね。私の方がいい写真が撮れると言っておいた」(中略)「写真家同士、ライバルなんですね」 (思い出のとき修理します：61)

3.3 形容詞の意味と述語構造

本節では、前節でみた「形容詞＋名詞ダ」という述語構造と、その表す意味との関係についてみてみよう。

前節で述べたように、「山田先生はやさしい人だ」のような「形容詞＋名詞」述語文は実質的な意味を形容詞が担っているため、「山田先生はやさしい」の形容詞述語文との互換性

が高いことが多い³¹とも言える。一方、「形容詞＋名詞ダ」という述語構造は、それ全体がひとまとまりになって述語として働くため、やはり形容詞述語とは異なる。形容詞の性質や意味などによって、互換できない場合も出てくる。

このような装定用法（「形容詞＋名詞」述語文の述語構造）と述定用法³²（形容詞述語）における形容詞の性質は、本論で行う「形容詞＋名詞」述語文と形容詞述語文の比較や「形容詞＋モノダ／コトダ」文の考察にかかわってくるため、以下では互換にずれが生じる形容詞について簡単に触れておきたい。

3.3.1 装定用法と述定用法による意味の違い

日本語の形容詞は装定用法だけでなく、述定用法にもたちうるものであるが、装定用法の場合と述定用法の場合とで意味が異なることがある。

まず、感情形容詞からみる。感情形容詞は文末の形容詞述語として用いる場合には主語の感情を表すのに対し、「形容詞＋名詞ダ」の述語構造に入ると特性表現化する³³。例(21)をみると、「いやだ」という形容詞は「形容詞＋名詞ダ」構造の中に入り、述語名詞「やつ」と合成述語になって、人の特性を表すようになっている。これが例(22)のように形容詞述語文になると、「いやだ」という感情の意味がそのまま表れる。

(21) 大晦日には借りてきたDVDを見た。(中略)「こいつ、いやなやつだよ」と、俊明は主人公の榎藤金吾に対してうなり声を上げる。(きみはボラリス：283,284)

(22) 「空港って、いやだね。淋しくて」(不倫と南米：23)

次の例(23)の「悲しい」などの感情を表す形容詞も、同じく「形容詞＋名詞ダ」の構造の中に含まれ、事の特性を表現しており、例(24)は話し手の感情の状態を表している。

(23) 次の週、新聞で橋川さんが亡くなられたことを知る。また、六月十五日の集会にみえていた古屋能子さんが亡くなられた。熱心で、強い人であったので、残念であった。運動の仲間が亡くなるのは悲しいことだ。(「声なき声」をきけ)

³¹ 新屋(2009：34)にも同じような指摘がある。

³² 佐久間(1941[1995：186-196])では「述定」と「装定」について述べている。イエスペルセンは「鳥が飛ぶ」「水が流れる」についてネクサス(nexus)と呼び、「飛ぶ鳥」「流れた水」のような関係をジャンクション(junction)と名づけた(p.187)とし、佐久間(1941[1995：188])では前者について「述定」、後者について「装定」と呼んでいる(寺村(1975：91)にJespersenの用語の佐久間鼎による訳語であるという言及がある)。

³³ 国立国語研究所「西尾」(1972：34)に「感情形容詞が連体修飾語の位置を占めるばあいは、もっと属性表現的になりやすいようである」という指摘がある。但し、属性表現化することの起こりにくいものには、「好きな」「きれいな」「ほしい」などがある(p.35)。

- (24) 「このごろシャンプーをすると髪がたくさん抜けるの」「薬の副作用？」アキは黙って頷いた。「なんだか悲しい」ぼくは思わず彼女の手を取った。こういう場合、何と云えばいいのかわからない。(世界の中心で愛をさけぶ：137,138)

このように、形容詞が述語として用いられるか、「形容詞＋名詞ダ」の構造に入るかによって、感情を表すようになるか、特性を表すようになるかに変わり、形容詞の意味にずれが生じる。つまり、感情形容詞は「形容詞＋名詞ダ」の構造に入って、述語名詞と組み合わせると、その意味は主体の本質的な特性として表れるのである。

また、次に挙げる「いい」のような評価性の意味が強い形容詞も同じく、意味にずれが生じる。形容詞述語文の場合は良いか悪いかという話し手の評価が強く表れているのに対し、「形容詞＋名詞」述語文は「いい＋人」が組み合わせあって、全体が主体の本質的な特性を述べている。

- (25) 「ここは悪いところじゃないと僕も思うよ。静かだし、環境も申し分ないし、レイコさんは良い人だしね。でも長くいる場所じゃない。長くいるにはこの場所はちょっと特殊すぎる。」(ノルウェイの森(下)：184)

- (25)' 「レイコさんは良い」

次の例文の「いい男」をみると分かるように、「いい人」「いい子」などのような合成述語は、形容詞「いい」以上の意味合いをもつために固定化した形で用いられるのかもしれない。

- (26) 「いい男はなに注文するか悩むだけで、絵になるなあ」(中略) カウンターのうえからこの店をひとりで切り盛りしている真奈美が顔をだした。(中略) 「いい男っていうから見てみたら、ほんとうにいい男だね。イモサラ、サービスするよ」「人を見ただ目で差別するな」(夜を守る：118)

そして、形容詞がもっている多義的な意味による場合もある。まず、「若い」という形容詞が表す意味には、絶対的に年齢が少ないという場合と、相対的に年齢が少ない場合とがある³⁴。次の例(27)は、「私の歳と比べて、まだ若い」という相対的な年齢の若さのこと

³⁴ 飛田・浅田(1991：600)『現代形容詞用法辞典』では、次のような例を挙げている。

- ・だれにもわかいときはあった。
- 最近のわかい人は自分の考えをはっきり言う。(以上、絶対的に年齢が少ない場合)
- ・母は年の割にわかく見える。

を述べており、この場合には「平介さんはまだ若い人だ」文は用いにくい。「若い人だ」というのは、例(28)のように「年を取っていない、絶対に年齢の少ない青年」を指しており、相対的に判断されるものではない。この場合、「若い」が結びつく名詞はほぼ人名詞に限られてくる(相対的な基準になる文は波線で示す)。

(27) 「平介さんはまだ若い。私の歳になるまで何十年もある。それを無理して一人で生きていくことはないです。もしそういう気になったら、誰に遠慮することなく、再婚すればいいです。その時には私も賛成しますよ」 (秘密：288)

(28) 「おまえに頼んだ男はどこに行った。黒眼鏡の若い男だろ」蜜柑は小言で言うと、男の胸元をつかんだ。(中略)「知らない。知らない」 (マリアビートル：300)

特に、次の「おわかい」は「挨拶語」としてよく用いられ、「外見が実年齢に比べて生気がある(飛田・浅田 1991：601)」という意味として使用されており、絶対に年齢が少ないという客観的な意味しか表せない「若い人だ」には置き換えられない。

(29) 子どもの声が、下のほうからときおりあがってくる。茫とまのびした声である。「若かったですね、ワタクシもスミヨも」「今もお若いですよ」「そういう意味ではなく」 (センセイの鞆：236)

3.3.2 装定用法の制限による場合：「多い」「少ない」「遠い」「近い」

そして、日本語の形容詞には述定用法としては使えても、装定用法としては使いにくい形容詞があり、たとえば、「多イ」「少ナイ」や「遠イ」「近イ」である(以下は寺村 1976：72-73 の例文)。

(30) *キノウ多イ客が来タ

(31) *私ハ九州ニ少ナイ友ダチ持ッテイル

(32) ?³⁵遠イ工場デサイレンヲ鳴ラシテイル

(33) ?コノ薬ハ近イ薬局デ買イマシタ

「多イ」「少ナイ」については、仁田(1980)と寺村(1991)で詳しく取り上げられて

彼とは同期だが、年は彼のほうが二つわかい。(以上、相対的に年齢が少ない場合)

³⁵ 寺村(1976：73)では、(32)(33)の文について不自然だと述べており、それを本研究では「？」で示した。

おり、以下では先行研究を参考にこれらの形容詞について少し紹介しておく。

仁田（1980）では、述定用法と装定用法との関係のあり方において通常の対応関係を見せない形容詞として「多イ」「少ナイ」を取り上げ、これらの形容詞は通常連体形による装定用法を有していない（p.236）と述べている（以下、例文と下線は原文のもの）。

(34) *多イ人ガ庭ニ集マッテイル（p.236）。

(35) *少ナイ本ガアル（p.238）。

また、「遠イ」「近イ」についても「多イ」「少ナイ」と同様に一般の形容詞の装定形である連体形による装定用法を通常有していないと指摘している（p.239）。

(36) *遠イ本屋マデ本ヲ買イニ行ッタ。

(37) *近イ食堂デ食事ヲスル。

これについて、仁田（同：239-246）は「多イ」「少ナイ」の表している〈数〉や「遠イ」「近イ」が表している〈距離〉は、共に「物」が内在的に有しているあり方の一類型ではなく、「物」が存在する時に帯びる外在的なあり方の一類型である（p.239）と述べたうえで、これらが連体形による装定用法をもつ場合を大きく二つ挙げている（p.246）。

(38) シラガノ多イ女ノ人

(39) 少ナイ資源

一つは句的規定語をなすことによって、もう一つは主要語の意味論的なあり方によって、共に、規定語が、意味論的に主要語の内包している性質、属性の一つによって、主要語を限定することになったことによるものであると説明している。仁田（同：246）では、「多イ」「少ナイ」や「遠イ」「近イ」が通常の意味において装定化する時、これらの規定語は、自らの有する意味論的な特性によって、主要部である名詞が内在的にもっている性質、属性の一つでもって、主要部を限定するタイプの規定語には通常なりにくい。数といった、主要語が外在的（外延的）に帯びるあり方で限定するからである」と述べている。

そして、寺村（1991：264）では、どうして、「この辺には映画館が多いですね」とはいえるのに、「*この辺には多い映画館がありますね」とはいえないのかについて、「多イ」「少ナイ」というのは、ある時、ある所に存在するものの数量について評価することばであって、「大キイ、古イ、シャレテイル（シャレタ）」のようにその存在するものの（他と

比べての) 形状や状態や性質を述べることばではない。「映画館が多イ」というのは、「映画館」の形状でもなければ特徴でもない。映画館を「多イ」「少ナイ」ということで他の映画館と区別することはできない。考えてみれば特異な形容詞である。だから被修飾名詞について、同種のもののなかで、範囲を限定してその特徴をいうのが本来の連体用法には使えないのであろう」と述べている。そのため、次のように、「多イ」「少ナイ」になにか限定する語が付くと自然な文になると指摘している。

(40) この辺りは大阪でいちばん映画館が多いところです。

(41) この辺りではどんな事故が多いですか。

——そうですね、この辺りで多い事故は車と自動車の接触事故です。

以上、形容詞が「形容詞＋名詞ダ」の構造の中に含まれるか、述語に来るかによって、文の中で表す意味が異なるということをみた。このように両者の意味にずれが生じる場合には、「形容詞＋名詞」述語文と形容詞述語文との互換性は低いと言えよう。

以上で分かるように、「形容詞＋名詞」述語文は「形容詞＋名詞ダ」全体が述語として機能しており、このような述語は、意味機能の面において形容詞述語文と異なった特徴をみせることが予想される。

3.4 第3章のまとめ

以上で述べた「形容詞＋名詞」述語文の主語と述語構造にみられる特徴について、二つの点からまとめなおす。

〈1〉主語名詞と述語名詞の包摂関係

「形容詞＋名詞」述語文の述語名詞には、基本的に主語名詞より上位概念の名詞が来る。すなわち、主語名詞と述語名詞の関係からみると、主語名詞と述語名詞は包摂関係にある(「私は平凡な人間です」)。このような述語名詞は実質的な意味が希薄であり、「形容詞＋名詞ダ」全体が述語として機能している。

主語名詞が一般・総称的なものの場合には、最上位概念の名詞「もの」が述語に来る。この場合、名詞「もの」が述語名詞としての「もの」なのか、モーダルな意味を表す「ものだ」なのか、二つの境界をはっきり線引きすることが難しいことがある(「世間は狭いものだね」)。

〈2〉「形容詞＋名詞」述語と形容詞述語の意味上の異同

「山田先生はやさしい人だ」のような構文は、実質的な意味を形容詞が担っているため、「山田先生はやさしい」の形容詞述語文との互換性が高いことが多いものの、形容詞の性質によっては、形容詞が「形容詞＋名詞ダ」の中に含まれるか、述語に来るかで、文中で表す意味が異なることがある（「こいつ、いやなやつだ」「こいつ、いやだ」）。そのような意味のずれによって「形容詞＋名詞」述語文と形容詞述語文との互換性が低くなることもある。

第4章 「形容詞＋名詞」述語文と形容詞述語文 [1]

—主語の示し方に注目して—

「形容詞＋名詞」述語文と形容詞述語文は、構文面において一方は述語に名詞を含んでいるが、他方は含んでいないという違いがある。このような構文的な違いは、両形式の意味機能の面においてどのようにかわっているのだろうか。それをさぐるべく、第4章では第一の考察として、「形容詞＋名詞」述語文と形容詞述語文において主語がどのように提示されるかに注目し、比較分析を行う。

4.1 分析対象と用例数

本章で対象とする「形容詞＋名詞」述語文と形容詞述語文の用例は、主に文庫本と単行本の現代小説や随筆から手作業で採集したものを対象としている³⁶。採集したデータは主語が文中に現れるか、現れないかに大別し、主語が文中に現れる用例のみを対象にして分析を行う。例文中の主語の現れ方は、下の〈表3〉に示したとおりである。このうち、上段（網掛け部分）の例について検討する。

表3：「形容詞＋名詞」述語文と形容詞述語文の主語の現れ方と用例数

用例	「形容詞＋名詞」述語文		形容詞述語文	
	用例数	割合(%)	用例数	割合(%)
主語が文中に現れる場合	210	42.3	599	63.5
主語が文中に現れない場合	286	57.7	344	36.5
合計	496	100.0	943	100.0

4.2 文中における主語の示し方

〈表3〉の主語が文中に現れる場合をみると、その具体的な形式はさまざまである。そして、主語は文頭に現れる場合と倒置される場合があるので、それによって分けて用例数を集計すると〈表4〉のようになる。

³⁶ 本文には説明のため、国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（BCCWJ）から採集した用例も適宜取り上げているが、総用例数には含まれていない。

表 4 : 「形容詞＋名詞」述語文と形容詞述語文の文中における主語の示し方

示し方		「形容詞＋名詞」述語文				形容詞述語文			
		文頭	倒置	総数	割合(%)	文頭	倒置	総数	割合(%)
は		125	6	131	<u>62.4</u>	249	22	271	<u>45.2</u>
というのは (つてのは／つていうのは)		15	-	15	<u>7.1</u>	11	1	12	2.0
ということは		-	1	1	<u>0.5</u>	-	-	-	-
つてところは		1	-	1	<u>0.5</u>	-	-	-	-
とは		1	-	1	<u>0.5</u>	-	-	-	-
も		15	-	15	7.1	31	1	32	5.3
というのも (つていうのも)		-	-	-	-	2	-	2	0.3
だって		2	-	2	1.0	4	-	4	0.7
φ (無助詞)		23	6	29	13.8	120	32	152	<u>25.4</u>
つて (て)		11	-	11	5.2	81	4	85	<u>14.2</u>
なんて		3	1	4	1.9	25	7	32	<u>5.3</u>
といえは		-	-	-	-	1	-	1	0.2
無表示 ³⁷	と	-	-	-	-	6	-	6	<u>1.0</u>
	たら	-	-	-	-	1	-	1	<u>0.2</u>
	けど	-	-	-	-	1	-	1	<u>0.2</u>
合計		196	14	210	100.0	532	67	599	100.0

まず、＜表 3＞の総用例数をみると、形容詞述語文においては“主語が文中に現れる場合”が約 6 割を占めているのに対して、「形容詞＋名詞」述語文の場合にはむしろ“主語が文中に現れない場合”が約 6 割である。

次に、＜表4＞の主語の示し方をみると、「形容詞＋名詞」述語文も形容詞述語文も「は」で提示される割合が相対的に高い。しかし、形容詞述語文で主語が「は」で提示される例は全体の半数弱に過ぎないのに対して、「形容詞＋名詞」述語文の場合は約3分の2を占めるという違いがある。＜表3＞で明らかなように、「形容詞＋名詞」述語文は、“主語が文中に

³⁷ 表中の「無表示」というのは、「と」「たら」などによる節（従属節）をもって特性の持ち主を提示している例であるが、これについては本文で後述する。

現れる場合”の割合（42.3%）が形容詞述語文における割合（63.5%）に比べてかなり低い。それにもかかわらず、主語が文中に現れている場合の約3分の2が「は」に集中しているということは、両者の何らかの違いの反映とみてよさそうである。「は」で提示されないものについては、形容詞述語文では主語が「って」「なんて」で提示されたり無助詞である例の割合が高く、「形容詞＋名詞」述語文では「というのは」類（「ということは」「ってところは」なども含む）で提示される例の割合が高い。以上の結果からみると、二つの構文は基本的に「主題・解説」という提題構文の形式を取っており、主語の恒常的な特性を述べる文であると言えよう。そして、形容詞述語文には「と」「たら」「けど」などをもって特性の持ち主を提示する例（「目が見えないと不便だ」など。以下、本研究では「無表示」と呼ぶ）もみられるが、これは「形容詞＋名詞」述語文にはほとんどみられない。全体として形容詞述語文は「形容詞＋名詞」述語文よりバリエーションがあると言える。

以下、個別の項目について検討する。「は」で示された文からみてみよう。例（1）（2）は「形容詞＋名詞」述語文、例（3）（4）は形容詞述語文で、それぞれ「親切な人だ」「大事なことだ」「親切だ」「美味しい」と主語の特性を表している。

- （1） 「私はあなたの書いたものは、ひとつ残らず読んでいるわよ」「ありがとう。君は親切な人だ」と涼平は言った。 （神の子どもたちはみな踊る：195）
- （2） 「人間ってというのは、抽象的な問題が苦手なんだ。抽象的な質問から逃げたくなる。
そこで逃げずに、自分に分かるように問題を受け入れて、大雑把にでも解説しようとするのは大事なことだ」 （オー！ファーザー：193）
- （3） 「僕は学校行事で何度か来たことがあるんですけど、全部雨、大ハズレでした」
「そうなの？でも、雨が降っても風情がありそうだから、ハズレではないと思うわ」
「奥さんは親切だなあ」 （花の鎖：143）
- （4） 苺は美味しい。が、そればかりを延々と食べ続けているとさすがに飽きる。 （バイバイ、ブラックバード：12）

また、「というのは」類も「形容詞＋名詞」述語文と形容詞述語文とのいずれにも現れるが、「形容詞＋名詞」述語文のほうが割合が高い。特に「形容詞＋名詞」述語文において、一般・総称的な主語名詞と「というのは」とは共起しやすいようである。

- （5） 「ああ、才能というのはたしかに時として愉快なものだ。見栄もいいし、人目も惹くし、うまくいけば金にもなる。女も寄ってくる」 （色彩を持たない多崎つくると彼の巡礼の年：83）
- （6） 「そうです。何かを探し求めるというのは面白い作業です」「マンモスとか？」と

僕のガール・フレンドが訊ねた。「そうです。なんだって同じです」とフロント係は言った。
(羊をめぐる冒険(下):37)

- (7) 「それにしても女性というのは恐ろしい。あれほど合理性のない、矛盾に満ちたトリックを考えつくんだからな」
(聖女の救済:423)
- (8) 「娘さんの様子はどうだ。もう落ち着いたかい」「ええ、まあなんとか」平介は答えた。(中略)「だけどあれだぞ。やっぱり、男手一つで子供を育てるというのは難しいぞ。特に女の子の場合は」「それはよくわかってます」
(真夏の方程式:118)

次に、「って」で主語を提示する場合である。丹羽(2006:273)では、「って」は「Nがどういうものであるか改めて捉え直すという場合に用いられる」としており、形容詞述語文と結びつきやすく、特に、主語名詞が一般・総称的なものの場合によくみられる。これに関しては次節であらためてみることにする。

- (9) 「ノアさんて素敵な女の子ね。わたしが男だったら、絶対に放っておかないと思う。素樹さんも手放しちゃだめよ」
(眠れぬ真珠:72)
- (10) 「誰かを好きになるって、怖いことですね。あんなふうにおかしくなることがある」「そうね」海のにおいには、人の心の硬い殻を溶かしてしまう力があるようだ。
(眠れぬ真珠:273)
- (11) 「日下さんて、無口やね」須賀さんのほっぺたが赤く染まっている。声がいつもより高い。ジョッキのビールはまだ半分も減っていない。
(風花:319)
- (12) 「煙草やめれば?」「まだ時間あるけん、だいじょうぶじゃ」「そうじゃなくて、煙草ってやっぱり体に悪いし」「ガキに言うようなことを親に言うな、アホ」
(流星ワゴン:217)

無助詞による主語提示の例は、「って」と並んで話し言葉で広く用いられる。「形容詞＋名詞」述語文の場合にも無助詞で示される例がみうけられるが、形容詞述語文の場合によくみられる。

- (13) 「あんた、死ぬことについてどう思う?」(中略)藤田は、私を探るように上から下まで視線で舐めるようにした。それからこう答えた。「死ぬことよりも、負けることの方が怖い」(中略)「千葉さん、あんた、面白い人だな」(死神の精度:64,65)
- (14) 「このシャツとパンツ、この写真だけではどこのかはわからないけど、ブランドもんだと思うぜ。(中略) こいつ、結構流行なんかにもうるさい奴だ。それに、この時計」健太は犯人が嵌めている時計を凝視した。
(ようこそ、我が家へ:161)

(15) 友人夫婦は豪華な夕食を用意して待ってくれていた。(中略)「ご主人、ハンサムね」
恭子の言葉に、私は「そうかなあ」と言いながら (後略) (幸福な生活：85)

(16) 「あれ、こんなのあったっけ」「ずっとあったわよ。新作だって熊谷さんが持ってきてくれたの」始は「いつ？」とは聞かなかった。ただ、「へえ」と言ってペンギンを手に載せた。「はは、ちゃんと立つ。あいつホントに器用だなあ」
(きみはポラリス：221)

形容詞述語文の場合、特性の持ち主を「なんて」で示し、その後それについて述べる文がよくみうけられる。特に「なんて」は「すごい、素晴らしい、素敵だ、可笑しい、珍しい、変だ、いい」のように評価性の強い形容詞とよく結びつく。次の例の場合、「手作りの羽子板」を「なんて」で取り上げ、「粋だ」と評価していると言えよう。

(17) 「これー」「新春の飾りにどうかと思ひまして」店長はその板を手にとると、素早くひっくり返す。そして小さくため息をついた。「新品なのね。どこで手に入れたの?」「実は、自作なんです」「手作りの羽子板なんて、お正月っぽくて粋ですね」
私がうなずくと、立花さんが笑う。 (和菓子のアン：317)

なお、主語表示の「なんて」と関連して、「なんて」が判断根拠を示す従属節を導く場合について触れる。

(18) ロッカーから弁当を取り出して広げた。「手作りのお弁当だなんて、あなたもマメねえ」美和子がお総菜コーナーで買ってきたなり寿司をほおぼりながら、真弓の弁当をのぞき込んでくる。
(夜行観覧車：128)

この場合の「なんて」はもとより主語の標識ではない。そして、形容詞述語文であれば、主節に主語が現れうる。それに対して、「形容詞＋名詞」述語文の場合には、述語名詞によって特性の持ち主が限定されることがあるため、主語が省略されやすいと言える。次の例をみると、例(19)は、「放火した」ということから、放火行為の主体に対して「その人は酷い奴だ」と判断している文であるが、述語に「奴」が置かれ、特性の持ち主が限定される。そのため、敢えて主語を表示する必要がなくなるのではないだろうか。例(20)と比較してみるとよく分かる。このような「なんて」の用法(例18、19)は、<表3>と<表4>に含まれていない。

(19) 「放火なんて、酷い奴だな」私は、その場にいない犯人を非難するつもりで言った。

すると春が、「そうだね、最低だよ」

(重力ピエロ : 207)

- (20) 「**放火なんて物騒だ**よねえ」と言った。「うちはね、別に大したことがなくて済んだけど」
(重力ピエロ : 162)

<表 4>で「無表示」としたのは、次の(21)～(23)のような例である。「と」「たら」「けど」³⁸などによる節をもって特性の持ち主を提示している例であり、このような場合は、「目が見えないと、それは結構、不便だぞ」「こんなところにいたら、それは危ないわ」「石油を使ってない石鹼を作ってみたかったんだけど、それはけっこう難しいなあ」のように、「それは」(波線)が省略されている。これは「と」「たら」「けど」で提示することで、その特性の持ち主が何かということが把握できるため、特に主語が必要ではないと思われる。これらのような形式は、「形容詞＋名詞」述語文には用いられにくい。

- (21) 「今、何をやってるんですか」私は口を挟む。「パソコンの勉強だよ。それと、生活の勉強だ」「何ですかそれは」「何にも見えなくなっちゃったから、赤ん坊の頃に戻って、やり直してるんだ。落ち込んでる暇はねえからだ。渡辺、知ってるか？**目が見えないと結構、不便だぞ**」
(モダンタイムス(上) : 56)
- (22) 車を路肩に寄せ、ウインカーを点滅させたまま降りてみた。五十メートルほど引き返した路面に、一人の少女がうずくまっていた。(中略)「とにかく車に乗りなさい。**こんなところにいたら危ないわ**」「ほっといて」 (雨の日のイルカたちは : 220)
- (23) 「なにをやってんのよ、もう。大丈夫？」サヨリが助け起こすと、俊明はしばらくして元気を取り戻した。「いやあ、驚いた。苛性ソーダを注いだら、急にブクブククっと液体の温度が上がってさ」ゴム手袋をつけた俊明は、失敗に終わった石鹼未満の溶液を処分する。「**石油を使ってない石鹼を作ってみたかったんだけど、けっこう難しいなあ**」
(きみはポラリス : 280)

最後に、特性の持ち主が述語の後に来る文がみられるが、本研究では倒置形式として分類した。「形容詞＋名詞」述語文、形容詞述語文、いずれにもみられるが、形容詞述語文のほうに多くみられる。形容詞述語文の場合、文末に来る特性の持ち主は、「は」などを伴う

³⁸ 接続助詞の「が」の題目提示の働きについて、丹羽(2006)は「「が」は「以下の話題がXですが」というように、これから取り上げる話題を聞き手に予告する表現であり、あらかじめそのような予告をすることによって丁寧な含みが出るのだ」と述べている(p.281、例101a、b、下線は原文のまま)。

・先日提出した報告は、もうお読みくださったのでしょうか？
・先日提出した報告ですが、もうお読みくださったのでしょうか？

場合もあるが、無助詞で現れることが特に多い。

- (24) 「あ、お星様が綺麗」花梨は真上を見ているようだ。「良いわね、やっぱり**田舎**は…
…。あ、ねえ、玲奈、あとで浴衣を着ない？」 (カクレカラクリ：66)
- (25) 「ちょっと。ちょっとこっち来て」恵理花は俺の腕をつかみ、居間に引っぱりだした。「もう、ほんとうに意地が悪いよ、**健ちゃん**。なんで黙って見てるの」「あきれて、声をかけるのも忘れたんだ」 (きみはポラリス：68)
- (26) ボールを蹴り、健太郎が近づいてきて、二人でベンチに腰を下ろした。「上手いね、**お兄ちゃん**」「君も上手いよ」 (グラスホッパー：135)

一方、「形容詞＋名詞」述語文は、基本的に倒置形式で用いられる場合が少なく、その際には、無助詞より「は」「ということは」などを伴うことが多い。例(27)は無助詞で、例(28)は「は」で、例(29)は「ということは」で示している。

- (27) 「いくつ？彼。」「今、十一かな。」(中略)「かわいい子ね、**弟さん**。ハンサムになるわよ。」させ子が笑った。 (アムリタ(下)：52)
- (28) 直貴は俯き、首の後ろを搔いた。「汚い男だよな、**俺は**」「直貴君は本当はそんな人やないのに……」 (手紙：266)
- (29) 「子供が幼稚園に入って、私はまた少しずつピアノを弾くようになったの」とレイコさんは話しはじめた。「誰のためでもなく、自分のためにピアノを弾くようになったの。(中略) 素晴らしいことよ、**自分自身のために音楽が演奏できるということ**はね」 (ノルウェイの森(上)：248)

以上のように、主語の示し方において、「形容詞＋名詞」述語文は「「は」で示されるもの」に偏っているのに対し、形容詞述語文のほうはそれが半数以下である。形容詞述語文はそのかわり、無助詞、「って」が占めるなど、全体として「形容詞＋名詞」述語文よりも主語の示し方のバリエーションが豊かだと言える。次節では以上の結果をもとに、主語名詞とその示し方における両形式の特徴について、さらに詳しくみることにする。

4.3 主語名詞の性質別の主語の示し方

前節で述べた結果を、さらに主語名詞が個別・具体的なものか、一般・総称的なものかに分けて、主語表示との関係をみてみると、二つの形式に少し違いがみられる。まず、主

語名詞別の用例の割合は次のとおりである。

表 5 : 「形容詞＋名詞」述語文と形容詞述語文の主語名詞別の用例数

主語が文中に現れる場合		「形容詞＋名詞」述語文		形容詞述語文	
		用例数	割合(%)	用例数	割合(%)
主語	個別・具体的なもの	162	77.1	461	67.0
名詞	一般・総称的なもの	48	22.9	138	23.0
合計		210	100.0	599	100.0

そして、主語名詞別の主語の示し方について、主語名詞が個別・具体的なものを指す場合は<表 6>、主語名詞が一般・総称的なものを指す場合は<表 7>のような結果を得た。

表 6 : 主語名詞が個別・具体的なものを指す場合における主語の示し方

主語表示		「形容詞＋名詞」述語文				形容詞述語文			
		文頭	倒置	総数	割合(%)	文頭	倒置	総数	割合(%)
は		105	6	111	<u>68.5</u>	192	18	210	<u>45.6</u>
というのは（つてのは／つていうのは）		3	-	3	<u>1.9</u>	2	-	2	0.4
も		10	-	10	6.2	24	1	25	5.4
というのも（つていうのも）		-	-	-	-	2	-	2	0.4
だって		2	-	2	1.2	2	-	2	0.4
って（て）		6	-	6	3.7	34	3	37	<u>8.1</u>
φ（無助詞）		22	6	28	17.3	119	30	149	<u>32.3</u>
なんて		1	1	2	1.2	21	7	28	<u>6.1</u>
といえば		-	-	-	-	1	-	1	0.2
無表示	と	-	-	-	-	3	-	3	<u>0.7</u>
	たら	-	-	-	-	1	-	1	<u>0.2</u>
	けど	-	-	-	-	1	-	1	<u>0.2</u>
合計		149	13	162	100.0	402	59	461	100.0

表 7：主語名詞が一般・総称的なものを指す場合における主語の示し方

主語表示		「形容詞＋名詞」述語文				形容詞述語文			
		文頭	倒置	総数	割合(%)	文頭	倒置	総数	割合(%)
は		20	-	20	<u>41.7</u>	57	4	61	<u>44.2</u>
というのは（つてのは／つていうのは）		12	-	12	<u>25.0</u>	9	1	10	7.2
ということは		-	1	1	<u>2.1</u>	-	-	-	-
ってところは		1	-	1	<u>2.1</u>	-	-	-	-
とは		1	-	1	<u>2.1</u>	-	-	-	-
も		5	-	5	10.4	7	-	7	5.1
だって		-	-	-	-	2	-	2	1.4
って（て）		5	-	5	10.4	47	1	48	<u>34.8</u>
φ（無助詞）		1	-	1	2.1	1	2	3	2.2
なんて		2	-	2	4.1	4	-	4	2.9
無表示	と	-	-	-	-	3	-	3	<u>2.2</u>
合計		47	1	48	100.0	130	8	138	100.0

以上をみると、＜表 6＞に示してあるように、形容詞述語文は主語名詞が個別・具体的なものの場合、「は」のほかに無助詞で示すことが多い（32.3%）。

(30) 「コピー機もってきて」「は？コピーですか」思わず聞き返した半沢に、「聞こえなかった？あんた耳遠いね。コピー機だっていったの。コピー機」

（オレたちバブル入行組：130）

(31) 健一は紘子を連れて、救急病院からアパートに戻ってきた。すぐに紘子を寝かしつける。「注射打ってもらったから、そのうち、熱下がるぞ」「健ちゃん、手際いい」ひとりだったら、一晩中苦しんでいた。（愛してると言ってくれ：273,274）

丹羽（2006：298-299）によると、「無助詞は総称名詞句に現れにくく、眼前描写や経験に基づいた叙述に無助詞が現れる」とし、これには無助詞の現場的性格というものに関与していると述べている。本研究の調査でも、無助詞は個別・具体的な主語名詞とよく結びつき、特に形容詞述語文によくみられ、このような結果は形容詞述語文の現場的な性格

をよくみせているのではないかと思われる。

一方、主語名詞が一般・総称的なものの場合は、無助詞で現れることはほとんどない(2.2%)。本研究で採集した用例のうち、一般・総称的な主語名詞を無助詞で示した例には、次のような倒置形式の例がある。例(32)のように指示詞を含む場合には無助詞で示しうるのである。

- (32) 松本は体を戻すと、週刊誌を取り上げた。「夜の街でご乱行、か。神埼先生、何をおやりになったんですか……」松本は、二つの顔の影が重なっている写真を見ながら、「そうだよねえ、くっついていなくても、くっついているように写せるよねえ」とつぶやきながら、またニヤニヤしている。「怖いねえ、この世の中。それにしても、神埼先生。本当にこの娘とやっちゃったのかな」 (完全版昏睡：392)

だが、その他の殆どの一般・総称的な主語名詞の用例は、無助詞のかわりに「は」(44.2%)や「って」(34.8%)で示すことが多い。例(35)～(37)のように主語を「って」で示す場合には、それに対する話し手の評価がよく表れている。

- (33) 「現代文学を信用しないというわけじゃないよ。ただ俺は時の洗礼を受けてないものを読んで貴重な時間を無駄に費やしたくないんだ。人生は短い」

(ノルウェイの森(上)：66)

- (34) 「どうせ日曜日ならいつも暇でごろごろしているし、歩くのは健康にいいしね」

我々は山手線に乗り、直子は新宿で中央線に乗りかえた。(ノルウェイの森(上)：46)

- (35) 「うちなんか高齢出産だったから、命がけだったんだって聞いたよ」「うちも難産だったって聞ける。女性ってすごいよね」 (そのときは彼によろしく：115)

- (36) 「私も子供を作るつもりでしたし、すぐに出来ると思っていたものですから、その約束について、それほど深刻には考えていなかったんです。だけどまさか、一年近く経っても出来ないなんて……。 神様って残酷ですよね」 (聖女の救済：258)

- (37) 「こういうふうに要約しちゃうと、なんだかやりきれない人生のように思えるでしょう？でも、そんなふうには見えなかった。彼は輝いていた。夢があるって素晴らしいわよね。できれば、一年ずっと彼には夢を見続けていさせてあげたかった」

(そのときは彼によろしく：313)

これに対し、「形容詞＋名詞」述語文の場合、主語名詞が個別・具体的なものの場合は、「は」で表すことが圧倒的に多く(68.5%)、一般・総称的なものの場合は、「は」(41.7%)のほか「というのは」類(「ということは」「ってところは」なども含む、29.2%)など

で示すことが多い。丹羽（2006：251）では、述部が属性を表すと言える例では「って」と「というのは」はほぼ同じであるとしているが、本研究で「形容詞＋名詞」述語文と形容詞述語文とを比較した結果では、＜表 7＞に示したように、主語が一般・総称的なものの場合、「って」は形容詞述語文に多く現れ（34.8%）、「というのは」類は「形容詞＋名詞」述語文によく現れる（29.2%）傾向があるということを確認した。これは両形式の述語構造の違いによるものと考えられる。つまり、文脈の中での二つの構文の機能が異なるとも言えそうである。

- (38) 「才能のことはよくわからない。でも私の作品はけっこうここでよく売れているの。たいしたお金になるわけではないけれど、自分の作ったものが、ほかの人たちに何らかのかたちで必要とされているというのは、なかなか素敵なことよ」「それはわかるよ」とつくるは言った。（色彩を持たない多崎つくると巡礼の年：301）
- (39) 「一字も読まずに焼いてしまうとナカタはサエキさんに約束いたしました。約束をまもるのはナカタの役目であります」「うん、そうだ。約束を守るってのは大事なことだ」（海辺のカフカ(下)：388）
- (40) 「銀行ってところは、つくづく理不尽な組織だな」半沢は嘆息した。「いまごろ気づいたか。それじゃあ、もう一つ教えてやろう。銀行ってところはな、情け容赦も血も涙もない組織なんだよ。」（オレたちバブル入行組：166）

このように、一般・総称的なものが主語名詞になる場合、「形容詞＋名詞」述語文では「というのは」と共起しやすいようである。それは次の例からも確認することができる。例(41)の場合、文脈上「支店長」は竹中支店長という個別主体を指しており、述語名詞に「人」が置かれている。すなわち、「竹中支店長は謙虚な人ですね」と言っているのである。一方、この文の述語名詞「人」を「もの」に置き換えると、主語名詞を一般・総称的なものとして捉えることができる。この場合、主語の標識のほうも「というのは」に置き換えて示すほうが自然に感じられる。

- (41) 山本は、工藤の電話の内容を聞いて、いきり立った。「工藤って、本物の莫迦^{ばか}じゃないですか。竹中支店長に助けてもらったことを忘れて、焼き餅をやくなんで、どうかしてますよ。ジェラシーも分からなくはありませんが、そこはぐっと堪えて、褒めるぐらいの余裕がなければおかしいんです」（中略）「冷汗三斗とか穴があったら入りたいとか、支店長は謙虚な人ですねえ」（消失(上)：565）
- (41)? 「支店長は謙虚なものですねえ」

(41)「支店長というのは謙虚なものですねえ」

4.4 第4章のまとめ

以上、本章では述語構造と主語の示し方とのかかわりという点に注目し、「形容詞＋名詞」述語文と形容詞述語文を比較考察した。最後に、二つの構文の主語の示し方について形式面と機能面からまとめてみる。

<形式の面>

まず、形式の面からみると、「形容詞＋名詞」述語文と形容詞述語文は主語が「は」で示されることが他の形式に比べて相対的に多い。但し、「形容詞＋名詞」述語文は4分の3（71.0%）が「は」で示されるものの3種、すなわち「は」「というのは」類「とは」に偏っているのに対し、形容詞述語文のほうはそれが半数以下（47.2%）である。形容詞述語文はそのかわり、無助詞が約4分の1（25.4%）、「って」が14.2%を占めるなど、全体として「形容詞＋名詞」述語文よりも主語の示し方のバリエーションが豊かだと言える。

表8：文中における主語の示し方のまとめ

示し方	「形容詞＋名詞」述語文		形容詞述語文	
	主語表示	割合(%)	主語表示	割合(%)
「は」で示されるもの	は	<u>62.4</u>	は	45.2
	というのは類・とは	<u>8.6</u>	というのは類	2.0
	小計	71.0	小計	47.2
「は」で示されないもの	無助詞	13.8	<u>無助詞</u>	<u>25.4</u>
	も	7.1	って（て）	<u>14.2</u>
	って（て）	5.2	なんて	<u>5.3</u>
	なんて	1.9	も	5.3
	その他	1.0	その他	2.6
	小計	29.0	小計	52.8
合計	100.0		100.0	

また、4.3.2 節で指摘したように、二つの構文は主語名詞が個別・具体的なものか、あるいは一般・総称的なものかという性質によっても、主語の示し方に違いがみられた。＜表

9>に示したように、個別・具体的なものの場合、「形容詞＋名詞」述語文は4分の3近くが「は」で提示しているのに対して、形容詞述語文は「は」のほかに無助詞で提示する割合が高い。一方、一般・総称的なものの場合には、「形容詞＋名詞」述語文は「は」のほかに「というのは」類と「とは」で提示する割合が高いのに対し、形容詞述語文は「は」のほかに「って」で提示する割合が高いことが分かる。

表 9：主語名詞の性質別の主語の示し方のまとめ

主語名詞	「形容詞＋名詞」述語文		形容詞述語文	
	主語表示	割合(%)	主語表示	割合(%)
個別・具体的なもの	は	<u>68.5</u>	は	<u>45.6</u>
			無助詞	<u>32.3</u>
	その他	31.5	その他	22.1
	合計	100.0	合計	100.0
一般・総称的なもの	は	<u>41.7</u>	は	<u>44.2</u>
	というのは類 ・とは	<u>31.3</u>	って (て)	<u>34.8</u>
	その他	27.0	その他	21.0
	合計	100.0	合計	100.0

<機能の面>

上のような主語の示し方は、その構文の意味機能とも関係があるように思われる。文章中の機能面について考えてみると、形容詞述語文の場合は主語を取り出し、それについて恒常的な特性だけでなく、話し手の評価的な態度も表しやすいことを示しているのに対して、「形容詞＋名詞」述語文の場合は主語を主題として取り出し、それについて聞き手に説明をしたり、認識したりする文としてよく用いられることを示しているのではないかとと思われる。これは、「形容詞＋名詞」述語文は形容詞を含んでいるものの、形容詞の意味が述語名詞によって限定されていて、やはり名詞述語文としての性質が生きていることを示しており、その点で形容詞述語文と異なる。

第5章 「形容詞＋名詞」述語文と形容詞述語文 [2]

—主語名詞の表す事物の〈特性〉の恒常性と一時性—

第5章では、第4章に続いて「形容詞＋名詞」述語文の特徴を明らかにすべく、文中の修飾関係に注目した。修飾成分との共起関係を通して、文の意味における「形容詞＋名詞」述語文と形容詞述語文の類似点や相違点をさぐる。

5.1 分析対象と用例数

用例は主として文庫本と単行本の現代小説や随筆から手作業で採集したが、国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)から検索アプリケーション「中納言」を用いて採集した用例も若干含まれている。

手作業によって採集したデータは、第4章と同じく「形容詞＋名詞」述語文が計496例で、形容詞述語文は計943例である。これを構文的な条件に従って分類する。ここでいう構文的な条件とは、基本的に文中の修飾成分などのかかわりをいい、主語、述語以外の文の成分を含んだ文、それぞれ173例と329例が本章の対象となる(＜表10＞の下段)。両者の総用例数には差があるが、〈「主語＋述語」文／主語のない述語文〉と〈主語、述語以外の文の成分を含んだ文〉の比率はいずれも65%対35%と同じになっている。

表 10 : 「形容詞＋名詞」述語文と形容詞述語文の共起成分の現れ方と用例数

用例	「形容詞＋名詞」 述語文の用例数	形容詞述語文の 用例数
〈「主語＋述語」文／主語のない述語文〉 「あの人はやさしい人だよ／いい人だね」 「彼女ってすごいよね／きれいだね」	323 (65%)	614 (65%)
〈主語、述語以外の文の成分を含んだ文〉 「あれは <u>かなり</u> 激しいスポーツだ／ <u>とても</u> いい人だ」 「君は <u>今</u> だって <u>十分</u> 素敵よ／ <u>最高</u> においしい」	173 (35%)	329 (35%)
合計	496 (100%)	943 (100%)

5.2 「形容詞＋名詞」述語文と形容詞述語文の共通の基本的な特徴

「形容詞＋名詞」述語文と形容詞述語文は、意味の面において主語の恒常的な特性を表すこと、構文の面において述語に形容詞を含んでいることで共通しているが、なおそのうえで両者には違いがありそうである。そこで、本節ではまずこの 5.2 節で両者の共通点を確認した上で、5.3 節で両者の相違点において比較を行うことにする（以下、各節で取り上げる文の成分は波線で示す）。

5.2.1 程度副詞による修飾

程度副詞は主として形容詞と組み合わせることを基本とする（工藤 2000 : 178）。そのため、「形容詞＋名詞」述語文と形容詞述語文はいずれも、次のように「とても、かなり、最高に」などの程度副詞による修飾がみられる。次に挙げる例（1）（2）が「形容詞＋名詞」述語文で、例（3）（4）が形容詞述語文である。

- (1) 「佐伯さんっていう女性がここの責任者で、つまり僕のボスだ。彼女は甲村家の親戚筋にもあたるんだけど、その人が案内する。とても素敵な人だよ。君もきっと気に入ると思うな」
(海辺のカフカ(上) : 76)
- (2) 「バドミントン？娘はバドミントン部か」(中略)「おまえもちろん知ってるだろうけど、あれはかなり激しいスポーツだ。中学生とはいえ、クラブの練習をすればくたくたに疲れる」
(容疑者Xの献身 : 142)
- (3) 高橋は言う、「君はとてもきれいだよ。そのことは知ってた？」
(アフターダーク : 281)
- (4) 「師匠さんの作るお菓子は、おいしんでしょうね」「うん、最高においしいよ。『河田屋』っていう小さな店なんだけどね、すごく繊細なお菓子を作るから茶道の家元とかにも評判がいいんだ」
(和菓子のアン : 201)

なお、上の典型的な程度副詞以外にも、極端な程度を表す表現（たとえば「とてつもなく」）もいずれの構文にみられる。

- (5) 「かなめさんとは？普通に、恋愛をすることができたんですか？」(中略)「そうです。彼女はあんなに年が下なのに、とてつもなく強い人です。あんなひとには会ったことがありませんでした」
(アムリタ(下) : 236)
- (6) 「君は変わったな。昔は科学にしか興味がなかったはずなのに、一体いつの間に、

人の心がわかるようになった」湯川は微笑した。「人の心も科学です。とてつもなく奥深い」友永は教え子をじっと見つめ、頷いた。(ガリレオの苦悩：165)

このほかにも「誠に、本当に、実に、ちょっと」などさまざまな程度副詞による修飾がみられる。以上のように、「形容詞＋名詞」述語文と形容詞述語文は基本的に程度副詞によって修飾しうる点で共通している。

5.2.2 比較表現による修飾：比較表現Ⅰ

日本語の比較表現では「より」「ほど」「ほう」「いちばん」などのことばが大切な働きをしている(国立国語研究所〔西尾〕1972：161)。そして、ここにも「形容詞＋名詞」述語文と形容詞述語文の共通性がみられる。たとえば、次の例(7)(8)はそれぞれの文で「いちばん」による修飾がみられる。

- (7) 「自分がやりたいことをやるのではなく、やるべきことをやるのが紳士だ」(中略)
「お前は俺がこれまで会った人間の中でいちばんまともな人間だよ」
(ノルウェイの森(上)：118)
- (8) 「あの人は医者なんですか、それとも患者の方ですか?」と僕はレイコさんに訊いてみた。「どっちだと思う?」(中略)「お医者よ。宮田先生っていうの」と直子が言った。「でもあの人この近所じゃいちばん頭おかしいわよ。賭けてもいいけど」とレイコさんが言った。
(ノルウェイの森(下)：6)

また、次の二種の文(9)(10)も、「～に比べたら」「より」を用いてある比較の対象を取り上げ、「それよりずっと、何倍も～である」ことを表しているという点で類似する。

- (9) 「お父さんのことだけどね」「あの人、悪い人じゃないのよ。(中略)性格もいささか弱いところがあったし、商売の才覚もなかったし、人望もなかったけど、でもうそばかりついて要領よくたちまわってるまわりの小賢しい連中に比べたらずっとまともな人よ。」
(ノルウェイの森(下)：75,76)
- (10) 「人間はさ、いつも自分が一番大変だ、と思うんだ」(中略)「不幸だとか、病気だとか、仕事が忙しいだとか、とにかく、自分が他の誰よりも大変な人生を送っている。そういう顔をしている。それに比べれば、あの鳩のほうが偉い。自分が一番つらいとは思ってもいない」春は小さく笑う。「俺よりも、何倍も偉いよ」
(重力ピエロ：187)

上のような比較表現はある対象（他の事物）との比較であり、このように他の事物が比較対象になる場合を「比較表現Ⅰ」と呼ぶことにすれば、「形容詞＋名詞」述語文と形容詞述語文は比較表現Ⅰにおいて共通している。

以上 5.2 節でみたように、「形容詞＋名詞」述語文と形容詞述語文は基本的に程度副詞による修飾が可能であり、比較を表す副詞による修飾にも共通点がみられる。程度副詞と比較表現は形容詞の程度を表すものであり、この共通性は、両者がいずれも述語に形容詞を含む構文であることの反映である。

5.3 「形容詞＋名詞」述語文と形容詞述語文の異なる特徴

それでは、二つの構文はどのような面において異なっているのだろうか。以下では、状況語、規定語、修飾語との共起関係に着目して両者の違いを明らかにする。

5.3.1 状況語を伴う場合：時を表す成分・条件節

5.3.1.1 時を表す成分

時の状況語による修飾から観察してみよう。前節にも述べたが、二つの構文は恒常的な特性を表すという意味の面において共通している。これは次の例の時を表す成分との結びつきの特徴からも確認できる。「今でも、今だって」のように恒常性とかかわる語と結びついて、いずれも主語の特性が現在まで続いていることを表している。

(11) 「ただ、僕が知っているのはあくまでも、中学生の頃の彼だ。今では彼も、立派な警察官になっている」「あの男は、今だってひどい男ですよ」（中略）「伊藤さんの知っている頃よりも、賢く残酷になっています」（オーデュボンの祈り：113）

(12) 「若い頃のママは、それはもう魅力的だったぞ」パパは笑顔で言った。「今でも十分素敵だけどな」ママは嬉しそうににっこりと笑って（後略）（幸福な生活：232）

一方、次のようにある種の特定の時間幅を設定する語と結びついて、本来そうではなかったのに、一時的にその状態にあるということを表す文においては違いがみられる³⁹。

³⁹ これについては、工藤（2012）に一定の関連性が述べられている。工藤（同）が紹介している〈時間的限定性〉とは、すべての述語を捉えている意味・機能的カテゴリーで、偶発的（accidental）な一時的〈現象〉か、ポテンシャルな恒常的（permanent）な〈本質〉かのスケールの違いである（p.157）。一時的現象と恒常的特性の間の相互移行については、次のような例を挙げている。形容詞述語では「ハ」と「ガ」の違いが恒常的特性か一時的現象かの違いに相関していると述べている（p.152）。

・山田先生はやさしい。 〈(恒常的) 特性〉
・(今日はなんだか) 山田先生がやさしい。 〈(一時的) 現象〉

- (13) 「最近、何だか無口ね」ワイングラスを持ったまま秋葉がいった。その目は僕を軽く睨んでいるようだった。「そうかな」
(夜明けの街で：180)

例(13)は「最近」という時間を設定し、「本来無口ではない人なのに最近無口だ」という本来の特性から一時的に逸脱した状態を話題にしている場面である。このような一時的な現象の表現は「形容詞＋名詞」述語文では表しにくい。

- (13)? 「最近、何だか無口な人ね」

次に挙げる形容詞述語文も同様に、「このごろ」「このところ」⁴⁰という比較的短い時間幅を設定する副詞を伴い、「以前はそうではなかったが、このごろは耳が遠い」「以前はそうではなかったが、このところ癖が悪い」という、一時的に変化した主語の特性を表しているものと考えられ、やはり「形容詞＋名詞」述語文は不自然である。

- (14) 早速バイト先に電話をかけてみたが、もう誰も居残っていないようだった。合鍵があればと、家主でもある不動産屋の自宅にも電話してみたが、こちらも繋がらなかった。「佐野さん、もう休んでるのかな。誰も出ないの」「あの人、このごろちょっと耳が遠いからなあ」
(思い出のとき修理します：314)

- (14)? 「あの人、このごろちょっと耳の遠い人だからなあ」

- (15) 「ヤスダちゃん、ちょっと」おでん屋の店主が男をさえぎろうとした。見たところよりもかなり、若い男の酔いは深いようだった。(中略)「ヤスダちゃん、どうもこのところ癖が悪くって」店主は言いながら、わたしたちに向かって片手おがみをして頭を下げた。
(センセイの鞆：114,115)

- (15)? 「ヤスダちゃん、このところ癖の悪い人で」

また、次の例では「今日」という特定の日を表す時間成分と「一段と」が共起している。

しかし、名詞述語では不可能である (pp.152-153)。

・山田先生はやさしい人だ。

・* (今日はなんだか) 山田先生がやさしい人だ。

⁴⁰ 丹羽 (2000：323) では、現在を表す副詞の中で、その語義に未来や過去との対比関係を含みこんでいるものがあるとし、「今のところ」「今のうちは」は「後にはどうかかわからないが」というような未来との対比を表すもので、「このところ」「今では」は過去の状況との対比を表すと述べている。

・今のうちは大丈夫です。

・以前は大変だったが、今では簡単にできる。

「一段と」は「もともと程度のはなはだしいものが、さらに程度を高めている様子を表す」副詞で（飛田・浅田 1994 : 43 参照）、程度が高まった時点を表す時間成分との共起がみられる（「一段と」の修飾については 5.3.3.2 節で詳述）。従ってこの文では、特性の程度が「今日」という日において一時的にはなはだしくなっていること、すなわち、「今日は普段と比べてよりきれいだ」ということを表しており、「形容詞＋名詞」述語文には置き換えにくい。

- (16) 「今日は一段ときれいよ、ピラー」母は知人か、それとも見知らぬ人と話すように
ぎこちなく言った。 (ブレッシング)

5.3.1.2 条件節⁴¹からなる状況語

次は、主節を制約する条件節の場合である。次の例をみると、「何か月も続けると」という条件節を伴っていて、その条件のもとでは「貧乏旅行は体に悪い」という特性をみせるということを表している。

- (17) 「旅行か……いいなあ、行けるんだけどな。いつでも。」(中略)「昔ほど貧乏旅行しなくてすみそうだしなあ。」「貧乏旅行は何か月も続けると体に悪いからね。」私は
なんとなくうなずいた。 (アムリタ(上) : 30)

このように、条件節を伴ってその条件が加わると、ある状態が実現するということを表す場合には、「形容詞＋名詞」述語文に置き換えにくく、不自然である。なお、条件が加わってその状態が実現するようになるというのは、時間の経過という時間的な面と関連があり、前節で述べた時間成分を伴った場合ともつながるところがあると言える。

- (17)? 「貧乏旅行は何か月も続けると体に悪いことだからね」

次に挙げる例では、ダイエットはもともと楽しくないことかもしれないけど、「二人で組めば」という条件のもとで楽しいことになるということを表している。条件節を伴わない場合には「形容詞＋名詞」述語文が可能なのにもかかわらず、条件節に限定されると不自然である。

⁴¹ 松本 (2005 [2006 : 265]) では、「条件や譲歩をあらわす文の部分もデキゴト、ありさまをとりまくものとして状況語にくわる」と述べており、本研究でも状況語として扱う。

(18) 「じゃあ、やせよう。二人で組めば、ダイエットも楽しいよ。」と言ったら、それが
すごく楽しいことのように感じた。幹子がいいかも、と言った。「やろうか。」「やろ
う。」 (アムリタ(上) : 148,149)

(18)? 「二人で組めば、ダイエットも楽しいことよ」

次の例(19)も「人生はつらいものかもしれないが、終わらない悲しみはないと考えな
がら生きると、案外楽である」ということを表しており、その条件の時に限って、そのよ
うな特性が現れるという意味で、上例と同様に考えられる。このような場合には形容詞述
語文になりやすい傾向がみられる。

(19) 「毎日人の死に接してると、生きてる……いや、生かされているというありがたみ
がわかる。終わらない悲しみはない。そう考えながら生きると、人生も案外楽だよ」
(おくりびと : 173)

(19)? 「そう考えながら生きると、人生も案外楽なことよ」

さて、上の例(17)～(19)では、「形容詞＋名詞」述語文として「こと」を述語とする
文への置き換えをみてきたが、次のように「もの」を述語とする「形容詞＋名詞」述語文
にすることは不可能ではないようである。

(17)" 「貧乏旅行は何か月も続けると体に悪いものだからね」

(18)" 「二人で組めば、ダイエットも楽しいものよ」

(19)" 「そう考えながら生きると、人生も案外楽なものだよ」

但し、ここでの「ものだ」は感嘆・詠嘆のようなモーダルな意味合いが感じられやすく、
この場合には「形容詞＋名詞」述語文の許容度が高まると言えよう。「ものだ」はこのよう
にしてモーダルな形式につながっていくのではないと思われる。次の例は『現代日本語
書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ) から得られた用例であるが、いずれもモーダルな意味
が表れていると言えるだろう。

(20) 「ほら、それこそ酸素の欠乏でめまいを起こしてる証拠だわ。ジョギングのせい
よ」テレサはにやりとした。「つまり、今週、わたしと一緒に走る気はないって
言いたいよね」ディアナは疑わしげな顔をしながら、自分のコーヒー・カップに
手をのばした。「あたりまえでしょう。わたしの運動は、毎週末に家に掃除機を

- かけるだけで充分。ビーチでゼイゼイいってるわたしの姿、想像できる？たぶん心臓発作を起こすわ」「慣れれば、気持ちいいものよ」(メッセージインアボトル)
- (21) 個人的な—(中略)—感情は抑えるべきであり、そうすることで社会全体がなごやかにまとまっていける、と教え込まれてきたのだろう。こんなふうになを支配するのは、今も昔もいたって簡単なことである。いったん民衆への刷り込みが完了してしまえば、国の統治は楽なものだ。洗脳、抑圧、全体主義…そんな言葉が私の脳裏をよぎる。
(素顔を見せたニッポン人)

以上 5.3.1 節でみてきたように、ある種の時間を表す語や条件節によって時間的な限定が表現されている形容詞述語文は「形容詞＋名詞」述語文に置き換えにくい。このような特徴からみると、「形容詞＋名詞」述語文は本来の特性から変わった一時的な現象を表すことが難しく、本質的な特性のみを表しうると言えるだろう。このような特徴は、次節で述べる「主語名詞が特定の時間限定を受ける場合」ともつながるものと考えられる。

5.3.2 時の規定語を伴う場合：主語名詞にかかる場合

規定語についても、時間的な限定を表す語の有無において、「形容詞＋名詞」述語文と形容詞述語文の違いが現れる。たとえば、次のように主語を特定の時間(「最近、今」など)に限定し、その時の主語「最近のアキヒロ」「今のあなた」について特性を述べる場合である⁴²。この場合、形容詞述語文では成立しやすいが、「形容詞＋名詞」述語文にはなりにくい傾向がみられる。

- (22) 「でもアキヒロさんはどうしてここにいないの。ミサのことをきこうと思って、わざわざみんなできたのに」(中略)「きてないのは今夜だけじゃないよ。この四日間ずっとだ」(中略)「最近のアキヒロはおかしいよ」 (夜を守る：201)
- (22)? 「最近のアキヒロはおかしい人だよ」
- (23) 「でも、今のあなたはとても可愛い」可愛い。甘ったるい声で言われて、情けないことに息が詰まって、振り上げた拳から魔法にかかったように力が抜ける。(百億の男)
- (23)? 「今のあなたはとても可愛い人だ」

⁴² しかし、次のような文は対象外である。

・「俺は知っているんだ。今の会長は怖い人だ。反対する人を許せない人だ」と、男の声がいった。
(明日香・幻想の殺人)

この例は、主語名詞を時間的に限定し、以前の自分と比較するものではなく、「今の会長」全体が(前任の会長とは別人である)特定の人を指しており、その人について特性を述べる文である。

次の例も主語をある時点に限定し、その時点における主語の特性を述べる文であり、形容詞述語文では成立しやすいが、「形容詞＋名詞」述語文にはなりにくい。なお、これらの文は時間的に限定するという面において、前節で述べた時間成分による特徴ともつながるものと考えられる。

(24) 「仕事をしているときの陽子さんはね、きびきびしていてほんとうに素敵よ」

(東京タワー：131)

(24)? 「仕事をしているときの陽子さんは、きびきびしていてほんとうに素敵な人よ」

但し、主語名詞の上位概念を表すものとして用いる述語名詞の性質によっては、「形容詞＋名詞」述語文が用いられることがある。次の例では、主語の「おばちゃん」「あなた」の上位概念の述語名詞として、一般的な「人」ではなく「老婆」や「オヤジ」のように、比喩的な意味や名詞自体に特性形容詞的な意味を帯びる名詞が使われている。「人」を述語とする「気強い人だ」や「見苦しい人だ」は不自然だが、「老婆」「オヤジ」を述語とするこの「形容詞＋名詞」述語文はごく自然な文である。

(25) 「でも、おばちゃんの最近一番関心の強いものは何か知っていますか。お香奠よ。

郷里で誰が亡くなったと聞くと、お香奠をやらなければならぬと言って大騒ぎなの。

ちゃんと送金したということを納得するまではうるさくて堪らないわ」(中略)「香奠のことをいうときのおばあちゃんは完全に気強い老婆ね。死イコール香奠ね。誰

かが死んだというと、いきなり反射的に香奠を返さなければならぬと思うらしいの。まるで借金しているみたいなの」

(わが母の記：39)

(26) 「人生は変えられる」(中略)「だがそれには勇気がいる。いまのあなたはくじけた

サラリーマン根性丸出しの、見苦しいオヤジだ」

(花の鎖：217)

ここまでみた例は、主語が特定の人である場合だったが、次のように主語名詞が一般・総称的なものの場合でも、同じように形容詞述語文になりやすい傾向がみられる。次の例は「子(子供)」「中学生」のような総称的な名詞を、「近頃」「最近」「今どき」と特定の時間に限定して、「近頃の子」「最近の中学生」「今どきの子」についてその特性を述べている文である。この場合、結びつく形容詞も「すごい、恐ろしい」のような評価性の強いものに限られる。

(27) 「さっきの似顔絵は……」「さあ、詳しいことはいわなかったけど、犯人の顔じゃ

ないんですか。まだ若い娘みたいだけど、近頃の子は恐ろしいねえ」「ふうん……
どうもありがとう」じわりと掌に汗が滲んだ。 (あの頃の誰か：113,114)

(28) 「自分専用のパソコンがあるんですか」(中略)「ええ。去年、知り合いから古いの
をもらったんです」「なるほど。最近の中学生はすごいですね」 (赤い指：261)

(29) 今どきの子は恐ろしいですよ、ほんとにもう。何を言っても効き目はないんです。
(プロカウンセラーが明かす子どもの個性を伸ばす魔法の聞き方)

採集した用例では、これらの条件に相当する「形容詞＋名詞」述語文との結びつきがみ
うけられない。だが、例(27)～(29)を「近頃の子は恐ろしいもの(もん)だねえ」「最
近の中学生はすごいもの(もん)ですね」「今どきの子は恐ろしいもの(もん)ですよ」の
ように置き換えられなくもないように見える。但し、この場合の「もの」は述語名詞とし
ての「もの」というより、「もの」が形式化し、「すごい、恐ろしい」という評価性の強い
形容詞と結びついて、いわゆる詠嘆のようなモーダルな意味合いを帯びるものである。次
の例は『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)からの用例で、主語名詞が時間的
な限定を受けていて文末は「～ものだ」となっているが、この「ものだ」はモーダルな意
味合いを帯びている。

(30) 「写真雑誌で見た人が、うちにいるの。新聞にも載ってた人だよ」信子が告げたの
は、一九九六年六月二日未明に発生した荒川区の一家四人殺しの重要参考人とされ
て行方を探されている会社員、石田直澄・四十六歳の名であった。しかし石川巡査
には、信子のこの言葉を、すぐに鵜呑みにすることはできなかった。信子の年頃の
女の子は、それでなくても思いこみが強いものだし、このところずっと、片倉家の
なかがごたごたしていることを、巡査はよく知っていた。 (理由)

5.3.3 修飾語を伴う場合：頻度副詞・比較表現Ⅱ

5.3.3.1 頻度副詞による修飾

修飾語において、上で述べた時間的な特徴と関係するものには頻度副詞がある。頻度を
表す副詞による特徴においては、「たまに」「いつも」などによる修飾が形容詞述語文にみ
られる。まず、「たまには」による修飾についてみてみよう。

(31) 「この店のポテトサラダとハムカツはマジでうまいから。全部手づくりだし。」(中
略)JRの高架線を山手線がとおるとテーブルの小鉢もかたかたと震える。リサが
いう。「たまにはこういうお店もいいね。だってほら、ポテトサラダ、こんなにいけ
てるのにたった百円だもん。」 (夜を守る：178,179)

- (32) 宮崎市内までいってきました。疲労困憊、運転する元気すらなく、ひさしぶりの電車旅。たまには電車もいいですね。1時間ゆっくり眠れた…。 (Yahoo!ブログ)

「たまには」を伴う文を、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』から採集してみると、「たまには～いい（よね）」の形の例がほとんどであり、「たまには」と共起する形容詞も限られていた。名詞を含んだ「形容詞＋名詞」述語文にはほとんどみられないが、次のように「たまには～いいものだ」の形の例がみうけられる。この場合、主語は一般・総称的なもので、文全体の意味は詠嘆や話し手の認識などを表しており、この「ものだ」はモーダルな意味を表す形式へ移行していると言える。

- (33) センセイと並んでわたしは歩きはじめた。二人で駅に向かった。お休みの日は、サトルさんのお店、やってませんよ。わたしが言うと、センセイは前を向いたまま、頷いた。たまには他の店に入るのも、いいものですよ。ツキコさん、今年はずっと一緒に飲むことになりますね。 (センセイの鞄: 101,102)

- (34) あれよあれよという間に、てきぱきと動く長い指が紙相撲の土俵と力士二体を作り上げた。一人遊びが得意な子供だった竜人は手先が器用だ。たちまち相撲盤を作り上げた。「こっちが佐渡島だから、そっちは八尋山だ」「なんだ、紙相撲かよ」「たまにはこういうレトロな遊びもいいもんだぞ」パソコンゲーム世代の少年は、しかし、このハンドメイドのおもちゃが気に入った。 (少年アリスの憂鬱)

次は「いつも」による修飾についてである。仁田（2002：265）によると、「いつもという副詞は事態が継続していることを表しているわけではなく、間隔・インターバルのどれを取っていても、事態が存在することを表している」と述べている。この所説は、「いつも」が形容詞述語文と結びつき、主体の特性の一面が繰り返して現れるということを示唆するものとも言える。

- (35) ほかの母親は、武蔵小杉の駅前でお茶をしながら時間をつぶす。南海子は「買い物があるから」と母親の群れと別れた。少し歩いたところで振り返る。母親の一人はまだ立ち話をしていた。(中略) そのうちの一人と目が合ってしまい、南海子は慌てて微笑み手を振った。「あのひと、いつもつきあい悪いわよね」「あんまりお金がないんじゃない」などと、陰で言いあうにちがいない。 (光：95)

(35)? 「あのひと、いつもつきあいの悪い人だよね」⁴³

上で述べた「たまに」「いつも」の性質を、先に 5.3.1.1 節でみた「今日」の性質とともにまとめてみると、次のようになる。

- ・ 山田先生、今日やさしいね。 ?山田先生、今日やさしい人だね。
- ・ 山田先生はたまにやさしい。 ?山田先生はたまにやさしい人だ。
- ・ 山田先生はいつもやさしい。 △山田先生はいつもやさしい人だ。

つまり、「山田先生はやさしい人だ」のような「形容詞＋名詞」述語文の表す特性というのは、一時的に現れて、数えられる現象のようなものではなく、本質的な特性であるということであろう。

5.3.3.2 比較表現による修飾：比較表現Ⅱ

比較表現については、ある対象（他の事物）との比較「比較表現Ⅰ」の場合には「形容詞＋名詞」述語文と形容詞述語文がいずれも可能であることを 5.2.2 節で述べた。一方、ある条件においては比較表現にも両者の相違点が観察される。次の「一段と」⁴⁴という副詞による修飾をみてみよう。この形容詞述語文を「形容詞＋名詞」述語文にするときわめて不自然である。

(36) 甘党にはたまりません。緩めの生クリームを添えると一段と美味しいですよ。沢山
賞もとっているみたいです。 (Yahoo!知恵袋)

飛田・浅田（1994）の「一段と」の語釈を簡単に紹介すると、「もともと程度のはなはだしいものが、さらに程度を高めている様子を表す。以前あるいは他のものと比較して、程度がより高まったというニュアンスであるので、必ず比較の対象がある。比較の対象はもともと程度のはなはだしいものであることが原則である (p.43)」としており、ある対象と比較してその程度の変化を表すものであると言えるだろう。ここで比較の対象となるのは、他の事物ではなく、他の時点（ここでは「生クリームを添えない」時点）における当該物

⁴³ この文のように「いつも」の修飾をうけた「形容詞＋名詞」述語文が成立するか否かについての判断は、インフォーマントによって少し異なりがみられる。不自然に感じる人が多いが、不自然だとは言えないと答えた人もいた。

⁴⁴ 「一段と」は、工藤（1983）で「他の物事や他の時点の状態と比較する性格のつよい程度副詞」として分類されており、本章では比較表現を表す副詞として取り上げる。

であり、この場合には形容詞述語文が自然であるということだろう。本研究では、例（7）～（10）のように比較の対象が他の事物である場合を「比較表現Ⅰ」にしたのに対して、例（36）のように比較の対象が他の時点である場合を「比較表現Ⅱ」と呼ぶことにする。

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』から確認した結果、「一段と」による修飾は「形容詞＋名詞」述語文にはほとんどみあたらず⁴⁵、形容詞述語文によくみられることが分かった。また、「一段と」という副詞は程度の変化を表すもので、上の例（36）のように「緩めの生クリームを添えると」などのような条件節を伴うことがよくみられる。条件節を伴い、「そういう条件を加えることで、よりその程度が高まる」ということを表している。「一段と」のような副詞による修飾だけでなく、5.3.1.2 節で述べたように、条件節を伴った場合にも形容詞述語文になりやすく、「形容詞＋名詞」述語文にはなりにくい傾向がある。

そして、「一段と」と類似した副詞には「なおさら」がある。「なおさら」には「～はなおさらだ（なおさらのことだ）」のような述語用法と述語にかかる修飾用法がある。修飾用法の場合、次の例のように好ましくない程度（「質が悪い」）が高まる場合によく用いられる表現であり、条件節や原因・理由を表す節などを伴うことが多く、「ある条件が加わったために、後者が前者に比べて程度が段違いに高まる（飛田・浅田 1994：381）」ということを表す。

- (37) 南海子はだれも愛したことのない人間を知っていた。愛さないからだれにも愛されず、愛しかたをいつまでも学べずにいる人間を知っていた。（中略）南海子の父親も、それまでつきあった男たちも、そうだった。なにも考えず、南海子がなにを感じているか想像もせず、形だけ整えておけば満足なんだろうと思いこんで疑いもしない。現実にはそれでやっていけるから、なおさら質が悪い。いつのまにか南海子も、そういう男に合せるのが習い性になった。（光：135）

つまり、ある条件や理由などが加わることで、主語の内部の特性がある時点（ここでは、「現実にはそれではやっていけないとき」と比べて程度が高まる（「比較表現Ⅱ」）という状態変化を表しており、「一段と」の場合と同じように「形容詞＋名詞」述語文にはみられない。

⁴⁵ 検索して得られたのは、次の1例のみであった。

・そして、突然、ハリーは水盆の中の部屋の隅で、ベンチに座っていた。他のベンチより一段と高い場所だ。たったいま覗き込んでいた丸窓が見えるはずだと、ハリーは高い石の天井を見上げた。
（ハリー・ポッターと炎のゴブレット）

但し、この例は他の事物（ここでは、「他のベンチ」）との単純比較（本研究での「比較表現Ⅰ」）であり、このような場合は「形容詞＋名詞」述語文が可能になる。他の時点との比較（本研究での「比較表現Ⅱ」）による内部の程度変化を表す場合には不可能である。

以上 5.3 節で述べた、「形容詞＋名詞」述語文と形容詞述語文における恒常的な特性が一時的な現象かという意味機能の違いは、一方は述語に名詞を含んでいるが、他方は含んでいないという構文的な違いの反映である。

5.4 第 5 章のまとめ

第 5 章では、「形容詞＋名詞」述語文と形容詞述語文がいずれも主語名詞の表す事物の特性を述べるという共通点をまず確認し、そこから出発して、修飾成分との共起関係を通して二つの構文の違いを明らかにした。考察した結果をまとめると、次のようになる。

表 11 : 「形容詞＋名詞」述語文と形容詞述語文の共通の特徴

意味機能（かかわる成分）		「形容詞＋名詞」述語文	形容詞述語文
恒 常 的 な 特 性	修飾語：程度副詞	○	○
	比較表現Ⅰ： 他の事物との比較	○	○

<表 11>に示したように、「形容詞＋名詞」述語文と形容詞述語文は程度副詞、比較表現Ⅰなどによる修飾に共通点がみられる。これは、両者が形容詞を含む構文であるという特徴を反映するものである。しかし、ある構文的な条件においては異なりがみられる。

表 12 : 「形容詞＋名詞」述語文と形容詞述語文の異なる特徴

意味機能（かかわる成分）		「形容詞＋名詞」述語文		形容詞述語文
一 時 的 な 現 象	状況語：時を表す成分	×	「形容詞＋モノ ダ」文は可能 ↓ 「ものだ」はモ ーダルな意味へ 移行	○
	規定語： 主語名詞の時間限定	×		○
	修飾語：頻度副詞	「たまには」類：× 「いつも」類：△		○
状 態 変 化	状況語：条件節	×		○
	比較表現Ⅱ： 他の時点の状態との比較	×		○

このような相違点は、「形容詞＋名詞」述語文と形容詞述語文が名詞を述語として含んで

いるか否かという述語構造の違いによるものであり、二つの構文の意味機能の違いを示しているものと考えられる。つまり、形容詞述語文は恒常的な特性を述べることができるのはもちろん、一時的な事態も述べることができるのに対して、「形容詞＋名詞」述語文は恒常的な特性だけを述べることができ、一時的な事態を述べることはできないという性質である。

なお、通常の「形容詞＋名詞」述語文が許容されない環境で「形容詞＋モノダ」文が許容されるということは、「ものだ」が述語名詞としての性格を失い、モーダルな意味を表す形式へ移行していることの傍証になると言えそうである。これに関連しては、本論Ⅱでさらに考察を加えることにする。

第6章 「動詞句＋形容詞句＋名詞ダ」型の文における連体句の意味関係 —「形容詞句＋動詞句＋名詞ダ」型の文と比較—

第6章では、「形容詞＋名詞」述語文のさらなる考察として、名詞を修飾する連体句内の内部構造に注目した。「動詞句＋形容詞句＋名詞ダ」型の文（「仕事ができる素晴らしい人だ」）を対象に「形容詞句＋動詞句＋名詞ダ」型の文と比較考察を行い、連体句をなす動詞句と形容詞句の結びつきにおける意味的なあり方について述べる。

6.1 研究目的

名詞を修飾する連体句には動詞、形容詞、「名詞＋ノ」などさまざまなものがありうる。複数の連体句（以下、「複合連体句」と記す）で名詞を修飾する場合には、これらをどのように組み合わせるかによってさまざまな形の文が作られる。次の文は、動詞句（波線）と形容詞句（下線）からなる複合連体句が述語名詞にかかっている文である。

- | | |
|---|--------------|
| (1) <u>仕事ができる素晴らしい人</u> だ。 | 【「V+A+N ダ」型】 |
| (2) <u>若い</u> や <u>せた女性</u> だ。 | 【「A+V+N ダ」型】 |
| (3) <u>小学生のころに描いた真っ黒に塗りたい</u> くった <u>絵</u> だ。 | 【「V+V+N ダ」型】 |
| (4) <u>美しい古い歌</u> だ。 | 【「A+A+N ダ」型】 |

例（1）の「動詞句＋形容詞句＋名詞ダ」型の文と例（2）の「形容詞句＋動詞句＋名詞ダ」型の文では、動詞句と形容詞句の順序が入れ替わった形になっているが、その組み合わせによって文の性質も異なっているように思われる。それでは、複合連体句の組み合わせは文の性質にどのようにかかわっているのだろうか。これらの組み合わせには何らかの特徴的な意味関係があり、それによって文の性質も変わってくるのではないだろうか。このような疑問を解決すべく、複合連体句内の意味関係に注目することにする。

本章では、複合連体句の一部をなす「動詞句＋形容詞句＋名詞ダ」型と「形容詞句＋動詞句＋名詞ダ」型の文を対象として、連体句をなす動詞句と形容詞句の結びつきにおける意味的なあり方を事例に基づいて考察し、二つの構文の違いや述語名詞を修飾する連体句の意味機能を明らかにすることを目的とする。

6.2 分析対象と分析方法

用例は、主として国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ) から検索アプリケーション「中納言」を用いて採集した。本文には文庫本と単行本の現代小説や随筆から手作業によって採集したものも若干含まれている。

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ) の検索条件については、すべてのジャンルを検索対象とし、次のように指定した。まず、「動詞句＋形容詞句＋名詞ダ」型の文の検索条件である。以下の検索条件を基準に、動詞と助動詞（動詞に助動詞がついている場合）⁴⁶の位置を「キーから 2」から「キーから 10」まで検索し、対象とする例のみを抽出した。なお、以下の検索条件の「形容詞」（検索条件の網かけで示した部分）を「形状詞一般」「名詞-普通名詞-形状詞可能」「名詞-普通名詞-サ変形状詞可能」と「だ」の連体形に指定して、同じく検索した。

キー: 品詞 LIKE "名詞%"

AND 前方共起: (品詞 LIKE "動詞%" AND 活用形 LIKE "連体形%") ON 2 WORDS FROM キー

AND 前方共起: (品詞 LIKE "形容詞%" AND 活用形 LIKE "連体形%") ON 1 WORDS FROM キー

AND 後方共起: (語彙素="だ" AND 活用形 LIKE "終止形%") ON 1 WORDS FROM キー

キー: 品詞 LIKE "名詞%"

AND 前方共起: 品詞 LIKE "動詞%" ON 3 WORDS FROM キー

AND 前方共起: (品詞 LIKE "助動詞%" AND 活用形 LIKE "連体形%") ON 2 WORDS FROM キー

AND 前方共起: (品詞 LIKE "形容詞%" AND 活用形 LIKE "連体形%") ON 1 WORDS FROM キー

AND 後方共起: (語彙素="だ" AND 活用形 LIKE "終止形%") ON 1 WORDS FROM キー

次に、「形容詞句＋動詞句＋名詞ダ」型の文の検索条件である。

キー: 品詞 LIKE "名詞%"

AND 前方共起: (品詞 LIKE "形容詞%" AND 活用形 LIKE "連体形%") ON 2 WORDS FROM キー

AND 前方共起: (品詞 LIKE "動詞%" AND 活用形 LIKE "連体形%") ON 1 WORDS FROM キー

AND 後方共起: (語彙素="だ" AND 活用形 LIKE "終止形%") ON 1 WORDS FROM キー

⁴⁶ 動詞句においては、これらの検索条件を基本にして「動詞」の連体形、「動詞＋助動詞」の連体形のほかに「動詞＋助動詞＋助動詞」の連体形も採集した。たとえば、次のような例である。() の中がそれぞれの単位であり、「動詞 (建て) ＋助動詞 (られ) ＋助動詞 (た)」のことをいう。

・仁王門は昭和十五年に(建て)(られ)(た)新しいものだが、門内の仁王尊像は、宝永年間（千七百四～十一）の作といわれる。（郷土資料事典）

キー: 品詞 LIKE "名詞%"

AND 前方共起: (品詞 LIKE "形容詞%" AND 活用形 LIKE "連体形%") ON 3WORDS FROM キー

AND 前方共起: 品詞 LIKE "動詞%" ON 2 WORDS FROM キー

AND 前方共起: (品詞 LIKE "助動詞%" AND 活用形 LIKE "連体形%") ON 1 WORDS FROM キー

AND 後方共起: (語彙素="だ" AND 活用形 LIKE "終止形%") ON 1 WORDS FROM キー

検索条件の「形容詞」（網かけの部分）を「形状詞—一般」、「名詞—普通名詞—形状詞可能」「名詞—普通名詞—サ変形状詞可能」と「だ」の連体形に指定して、同じく検索した。なお、この検索条件を基準に、形容詞（「形容詞」を指定した場合）と「だ」の連体形（「形状詞—一般」「名詞—普通名詞—形状詞可能」「名詞—普通名詞—サ変形状詞可能」を指定した場合）の位置を「キーから 2」から「キーから 10」まで検索し、対象とする用例のみを抽出する。

以上の検索条件によって得られた、「動詞句＋形容詞句＋名詞ダ」型の文と「形容詞句＋動詞句＋名詞ダ」型の文の用例を調査してみたところ、用例数の分布は<表 13>のようになっている。

表 13 : 「V+A+Nダ」型と「A+V+Nダ」型の文の総用例数

文型	用例数	割合(%)
「動詞句＋形容詞句＋名詞ダ」型の文	443	95.5
「形容詞句＋動詞句＋名詞ダ」型の文	21	4.5
合計	464	100.0

<表 13>をみると、「動詞句＋形容詞句＋名詞ダ」文は全体の 95.5%を占めて、「形容詞句＋動詞句＋名詞ダ」型の文は 4.5%に過ぎず、両者には大きな違いがある。「動詞句＋形容詞句」のように動詞句が形容詞句の前に来、形容詞句が名詞のすぐ前に来るという連体句の組み合わせには、何らかの理由があるように思われる。動詞句と形容詞句はそれぞれの意味機能によって、一定の意味関係をなしているのではないだろうか。

本章は、そのような意味関係に焦点を当て比較分析を試みた。連体句をなす動詞句と形容詞句の意味関係には、動詞句と形容詞句が特性の同質な側面を述べるものと異質な側面を述べるものがある。同質な側面を述べるというのは、動詞句と形容詞句が主語名詞の表す事物の特性の同じ側面を表すことをいい（例 5）、異質な側面を述べるというのは、両者がそれぞれ主語名詞の表す事物の異なる特性の側面を表すことをいう（例 6）。

- (5) ここは歴史を持った古い街だ。 【同質な側面】
 (6) 女は子供三人を抱えた若い母親だ。 【異質な側面】

例(5)では「歴史を持った」と「古い」が存在の期間が長いという特性の同質な側面を述べており、例(6)では母親の家族関係(「子供三人を抱えた」と年齢(「若い」という異質な側面がそれぞれ述べられている。

以下、6.3節では「動詞句＋形容詞句＋名詞ダ」型の文、6.4節では「形容詞句＋動詞句＋名詞ダ」型の文を取り上げ、この二つの意味関係についてそれぞれ観察していくことにする。

6.3 「動詞句＋形容詞句＋名詞ダ」型の文について

上で述べた「動詞句＋形容詞句」の意味関係(同質な側面を述べるか異質な側面を述べるか)とそれぞれの用例数を示すと、<表14>のようになる。

表 14 : 「動詞句＋形容詞句」の意味関係と用例数

動詞句と形容詞句の意味関係	用例数	割合(%)
同質な側面を述べるもの	355	80.1
異質な側面を述べるもの	88	19.9
合計	443	100.0

これらには動詞句と形容詞句が何を述べるかによって、さらにいくつかのタイプがみられる。以下では、複合連体句「動詞句＋形容詞句」の意味関係を観察しつつ「動詞句＋形容詞句＋名詞ダ」型の文の特徴をさぐる。

6.3.1 同質な側面を述べるもの

まず、動詞句と形容詞句が主語の特性の同質な側面を述べる場合である。次の例(7)をみると、動詞句「直感で人を見抜く」と形容詞句「勘の鋭い」が示している内容は、主語「ジェローム・ハワード」というマネージャーの有する特性のうち、同じ直観力という側面である。

- (7) ジェローム・ハワードは、直感で人を見抜く、勘の鋭いマネージャーだ。彼ははじめから文鮮明の下で働いている人間を疑っていた。(マイケル・ジャクソンの真実)

次の例（8）でも、動詞句「それに外れるものは、何もかも許せない」と形容詞句「頑固で偏狭な」は「ウォルト・コワルスキー」という男の性格の同じ側面、すなわち考えが偏っていて度量が狭いことを表現している。つまり、同じ側面の特性を、動詞句は個別かつ具体的に描写しており、それを形容詞が一般化した性質に言い換えて表現している。

- (8) ウォルト・コワルスキーには、自分だけの正義があった。それに外れるものは、何もかも許せない頑固で偏狭な男だ。 (Yahoo!ブログ)

次の例でも、生物や植物の特性について「四センチくらいもある」という大きさの側面と「汗を流してきれいに草取りをしてもすぐまた生えてくる」という生命力の強さの側面が、まず動詞句によって表され、次に形容詞によって「大きい」「強い」というふうに一般化した性質に言い換えられている。

- (9) 見ると、血を吸って太くふくれあがったヒルがあちこちにぶらさがっているではないか。四センチくらいもある大きいやつだ。 (秘境の民の暮らしとこころ)
- (10) 道端や庭にはいたるところにカタバミが生える。汗を流してきれいに草取りをしてもすぐまた生えてくる強い草だ。 (信州の蝶)

次に挙げる例では、場所名詞が主題となっており、動詞句がその場所の状況的な描写をして、動詞句の次に来る形容詞句がそれを受けて類似した意味でその場所の性格を表している。すなわち、まず動詞句の「庶民の活発な息吹が充滿している」「多くの宿泊施設や土産物屋が軒を連ね、一日中巡礼が行き交う」が大坂とパラニの活気のある側面を述べ、次に「明るい」「賑やかな」という形容詞でそれを一般化して表現している。

- (11) 晋作が堀といっしょに京都を出て大坂に着くと、船は翌三十日に出航ということがわかる。おっとりすました京都にくらべて、大坂は庶民の活発な息吹が充滿する明るい町だ。 (高杉晋作)
- (12) 町の名前はパラニ。小さな町だが、ムルガン信仰の本拠地として知られている。多くの宿泊施設や土産物屋が軒を連ね、一日中巡礼が行き交う賑やかな町だ。 (ムー)

例（13）では、ダナンの活気のある様子に対して、形容詞でマイナス評価的な側面から一般化して述べている。

- (13) 中心をちょっと外れると、小さな町工場が機械の騒音を響かせている。たしかにダナンはベトナムには珍しく活気に満ちた、ちょっと猥雑な町だが、港通りの角に瀟洒な美術館がある。(もっと知りたいベトナム)

このように、形容詞の示す特性は動詞句の個別・具体的な特性を一般化したものであり、動詞句の示す内容はその一般化された特性のひとつの具体的な側面である。次の例でも、「すきま風の吹き抜ける」と「古い」が特性の同質な側面を示しているが、「すきま風が吹き抜ける」という特性は、「古い家」のもつさまざまな特徴のうち、老朽化にかかわる個別の側面でもある。

- (14) 両腕を投げ出して眠っているティムを、立ったまま長いこと見つめていた。すきま風の吹き抜ける古い家だから、冷えないようにとミトンをはめさせている。(レッド・ライト)

そのため、一般的な性質が同じ形容詞によって表現されていても、動詞句によって述べられる個別の特性は特性の持ち主によってさまざまなのである。

- (15) 騎馬像の初めは古代ローマ帝国時代にさかのぼる古いものだそうだ。政治上軍事上の功労者の肖像彫刻を公共的に設置する習慣があり、拡大した領土内各地に皇帝像を置くことがローマの政策にもなった。(銅像に見る日本の歴史)

- (16) それが、大名というエリアである。大名というのは、天神と隣接しており、方角としては西南西、南西にある。かつては紺屋町と呼ばれ、江戸時代から続いている歴史の古い町だから、昔の雰囲気を彷彿とさせる町並みが多少だが、いまでも残っている。(博多学)

- (17) 太古、垂仁天皇の時帰化した新羅の王子・天日槍は、但馬に永住した、と『日本書紀』はしるしている。出石に天日槍を祀る出石神社があつて、但馬国一ノ宮とあがめられる。半ば神話時代に開かれた古い土地だ。(図説日本の伝統工芸)

- (18) 「ホテル・ヴィクトリア」と呼ばれた時代の「ロイヤル・ヴィクトリア・ホテル」のラベル。千八百九十七年以前に製作された古いデザインだが、千九百三十年代まで使われていた。(高松宮同妃両殿下のグランド・ハネムーン)

この四つの例では、「古い」という一般的な性質が、歴史の長さという側面から「古代ローマ帝国時代にさかのぼる」「江戸時代から続いている」「半ば神話時代に開かれた」「千八

百九十七年以前に製作された」と個別に述べられている。つまり、どのように「古い」かは主語によって異なっていて、それが動詞句によって表現されているのである。

次の例では、動詞句が島と公園の空間的な特徴を表している。例(19)では自然に溢れた島の様子を「緑に被われた」と「自然豊かな」が表しており、例(20)では続く形容詞句「細長い」が動詞句の示す「一本の小川に沿うようにして存在している」という空間的な側面を形状の面から言い換えて表している。

(19) 西海国立公園にある九十九島のひとつ高島は、佐世保郊外の相浦から海上タクシーで約十分。緑に被われた自然豊かな島だ。(船の旅)

(20) やすらぎ公園、多分安直に決められたんだろうと想像できる名前のこの公園は、一本の小川に沿うようにして存在している、ものすごく細長い公園だ。(先輩とぼく)

形容詞句には「いい」「悪い」のような評価性の強い形容詞が来る場合もよくみられる。

(21) 思いやりのあるいい人だと思いますよ (Yahoo!知恵袋)

(22) 「三成はまだ幼い秀頼公を利用している悪い奴だ、自分(家康)こそ秀頼公に最も忠節な家臣である」 (Yahoo!知恵袋)

ここでは、動詞句によって個別の具体的な性格が述べられており、それは「いい」「悪い」という評価の対象になっている。次のように、「立派な」「貴重な」「重要な」のような価値判断を表す形容詞が用いられることも多い。

(23) そう考えると、第三者から見れば、その男優は物の道理や人の気持ちのよくわかっている立派な人物だ、ということになるかもしれない。(楽土)

(24) ホテル前からタクシーに乗り、フェズ・エル・バリの入りロビー・ジュールド門前で降りる。白を基調にして、紫色のような、青色のようなタイルで美しく飾られた、立派な門だ。このメディナは9世紀に建設され、モロッコの古都で世界最大の迷路をもつという。(シュ克蘭!)

(25) このモノクロの写真は、当時の日本の状況を次世代に伝える貴重な遺産だと思います。(サライ)

(26) ところでこのところクロマグロは絶滅の危機に瀕し、国際取引禁止にすべきだ、との声も大きい。これによって寿司屋から水産業者にまでマグロパニックを巻き起こした。問題のクロマグロはホンマグロともいう。三崎にはほとんど水揚げされない

貴重なマグロだ。

(一枚の絵葉書)

- (27) イチョウは植物の進化を解く鍵となる重要な植物だと思う。そのイチョウでは、胚珠は受精した卵と一体となって種子という構造をつくる。(植物学のたのしみ)

「立派な人物だ」「立派な門だ」「貴重な遺産だ」「貴重なマグロだ」「重要な植物だ」という評価に対して、どのような特徴や意義をもっているのかが動詞句によって具体的に述べられている。

また、動詞句で提示される個別・具体的な特性に対して、形容詞が感情的な側面から述べる場合がある。次の例では動詞句が述べている「単に独裁者に騙されている」という気の毒な側面と「悪魔が住む」という物騒な側面が、それぞれ「可哀想な」という同情の感情と「恐ろしい」という恐怖の感情の対象になっている。

- (28) あなたたちは単に独裁者に騙されている可哀想な国民だから救ってあげる—この傲慢な態度は許せない、と静かな口調で言う。(悪者見参)

- (29) ここは、悪魔の住む恐ろしい国だ。正義など存在しない。(P.I.P.)

動詞の形は、以上で述べてきたようなスル形、シテイル形以外に、シタ形になる場合もある。

- (30) 「お渡しできる資料はここにコピーいたしました。川奈さんについての資料です。青豆さんについても少し入っています」(中略)「何度かお会いしましたが、確かな才能を持った前途有為な青年です」(1Q84(3)前:249)

- (31) 「先生。先生はご自分を買いかぶりすぎていらっしゃる。確かに、〇大学を出られた優秀な方でしょう。私たちには足下にも及びません」(完全版昏睡:408)

- (32) はじめはなかなか思い出せなかった顔、忘れていた顔も、だんだん思い出せるようになり、深い関わりはなくても、道で会った人、ほとんど忘れていたような人までが次々と頭に浮かんでくるようになったのです。そして、その誰もが自分を大事に育ててくれた素晴らしい母親だと思うと、青年の心に暖かいものが一気にこみ上げてくるようになります。(「こころの目」で見る)

- (33) 本書は、ぼくのこの長年の疑問に正面きって答えてくれた爽快な本だ。(朝日新聞)

例(30)では「確かな才能を持った」という主語の素質の側面、例(31)では「〇大学を出た」という過去の履歴からの能力の側面、また例(32)(33)では、「自分を大事に育

ててくれた」「ぼくのこの長年の疑問に正面きって答えてくれた」という過去の経験からの母親の立派さと本のすばらしさという側面を、後続の形容詞句が一般化し評価的な性質（「前途有為な」「優秀な」「素晴らしい」「爽快な」）で表している。次の例も同様に考えられるが、但しここでは、過去の個別の記録に対してマイナス的な側面から述べている。

(34) 「理々子は俺と違って、意志も才能もあるからな。俺なんか、完全に挫折組だ。夢を諦めた臆病な人間だ」 (恋せども、愛せども:294)

(35) 「あんたは最高機密文書を盗んだり、写真に撮ったりするという誤りを犯した情けない人間だ。扱った機密文書は何百通にもなっている」 (影の帝国を撃て)

例(34)では「夢を諦めた」という弱気な性格の側面が、例(35)では「誤りを犯した」という過去の過ちの嘆かわしい側面が、後続の形容詞「臆病な」「情けない」によって表されている。

次の例では、動詞句が主語「メルセの日の舞台」の内容的な側面を表し、それについて「楽しいものだ」と述べている。主語の個別・具体的な特性を述べる連体句は多くの情報を盛り込んでいるため、必然的に長くなる。このように情報を広げ、豊かに表現できるのは、動詞句の特徴である。

(36) 市庁舎と州庁舎が対面する旧市街のサンジャウメ広場には舞台が造られ、民族舞踊や民族音楽の披露のあと、高さ三メートルもの巨大なハリボテの人形が登場する。王様、女王、古代ローマの戦士、半月刀を持ったムーア人、エプロン姿で手に魚をさげた主婦、鳥籠を持ったシルクハットの紳士まで登場する楽しいものだ。(バルセロナ賛歌)

以上で述べたような、動詞句と形容詞句が特性の同質な側面を述べる例は、＜表 14＞に示したように全体の 80%を占めている。これは「動詞句＋形容詞句」という複合連体句の意味的なあり方を示しているのではないだろうか。

つまり、動詞句の表す個別・具体的な特性に対して、形容詞句がそれを一般的、評価的な性質に言い換えて示すという表現のし方は、複合連体句「動詞句＋形容詞句」の意味的なあり方を示しているように思われる。6.3.1 節で述べた内容をまとめると、＜表 15＞のようになる。

表 15 : 「動詞句＋形容詞句」の意味関係のあり方〔同質関係〕

複合連体句「動詞句＋形容詞句」の意味関係のあり方		
同質な側面を述べる場合	動詞句	形容詞句
	【属性づけ】 (直感で人を見抜く) (思いやりのある)	【属性づけ】 (勘の鋭い人だ) (いい人だ)
	【内容づけ】 (シルクハットの紳士まで登場する)	【属性づけ】 (楽しいものだ)
	【関係づけ】 (○大学を出られた)	【属性づけ】 (優秀な方だ)
動詞句と形容詞句の意味関係	個別・具体的な特性 ⇨ 一般化・評価づけ	

6.3.2 異質な側面を述べるもの

本節では動詞句と形容詞句が異質な側面を述べるものについて観察する。

(37) 「ミチコの森」。いい名前だった。もっとも私たちはその花の正確な名前を、いまだに知らない。よくよく調べてみると、母の言った「夜の女王」は深い森の中に咲く巨大な花だ。(花響)

(38) 上野戦争で廃墟と化したその聖域には、博物館が建ち、植物園が設けられ、勸業博覧会の会場が設置された。文明開化を象徴する広大な公園だが、そこには江戸がたわめられている。(東京異聞)

例(37)では動詞句が花の生態的性質を、形容詞句は花の外見の大きさの側面をそれぞれ表しており、例(38)では動詞句が公園の歴史的な価値という側面を、形容詞句は公園の広さの側面をそれぞれ表している。

次の例では、歴史の側面(「由緒のある」)と美的な側面(「美しい」)がそれぞれ述べられている。なお、この「由緒のある」のように動詞句であっても動詞らしさを失って形容詞的な意味になるものがある。

(39) フランクフォートは由緒のある美しい町だ。風光明媚な溪谷に抱かれ、周りにはケンタッキーの名高いブルーグラスが生える丘が連なっていた。(氷の淑女)

次に挙げる例では、動詞句が主語「物語」の内容的な側面を、形容詞句はその物語の特徴を述べている。

- (40) ポップで娯楽性豊かな演劇を目指す彼らが、'01年初演の自信作をリニューアルして再演する。とあるレストランを舞台に展開するスリリングな物語だ。

(weeklyぴあ)

また、動詞句が存在の場所などの空間＝状況的な関係を、形容詞句はその場所の特徴を述べることもある。

- (41) 「慶応大学の近くのよ、三田豊岡町にあるモダンなアパートだよ。詳しい住所は分からないけど、郵便局の並びだからすぐに分かるさ」 (モダン東京物語)

- (42) ニコラが不在だったので、ジェイクは電話をくれるようメッセージを残してから、ラリサの家へ車を走らせた。リバーサイドは、サバナの郊外にあるすてきな町だ。 (眠れぬ花嫁)

次のように、動詞句が主語の一時的な状態や動作を示す場合もみられる。

- (43) となりの席のお父さんは、ヘッドホンで音楽をききながら本を読んでいる。ゼンジローから借りた分厚い本だ。 (カチーナの石)

- (44) 「うん。先々週の月曜日、『女性気分』の編集部はこの手紙が届いた。その新聞記事は、同封されていた古い切り抜きだ。」 (ふたたび赤い悪夢)

- (45) 山盛りのバックパッカーを乗せ、そろりそろりとボートは動き出した。東洋人はオレ以外一人しか見当たらなかった。強烈な陽射しもおかまいなしでデッキの手すりにつかまり、気持ち良さそうに風と遊んでいる真っ黒な女のコだ。

(大麻所持逮捕の全記録)

例(43)(44)では動詞句が一時的な状態を、例(45)では一時的な動作を表しており、形容詞句は本の形、新聞記事の時間の経過、女の子の肌の色の側面をそれぞれ述べている。このような一時的な状態や動作は、6.3.1 節で述べた同質な側面を述べる場合にはほとんどみられない。

また、動詞句が一時的な動作ではなく、反復動作を表す場合もある。ここの形容詞句「陽気な」は歌の性質を表している。

- (46) ぼくは座って弾いた。有名な曲じゃなくて、フローラがよく鼻歌で歌う曲を奏でる。
フローラがよく歌っている陽気な歌だ。 (クレイジー・ジャック)

以上で述べたように、両者が異質な側面を述べる場合では、動詞句が示す内容は恒常的な特性や空間＝状況的な関係、一時的な状態・動作などさまざまであり、形容詞句は一般的な性質を表している。例(41)(42)の存在場所という空間的な描写や、例(43)～(45)の一時的な状態・動作を表す動詞句は、文における状況語が文頭に置かれやすいのと同じく他の連体句より前に来る傾向がある。このように動詞句の意味的な性質によって形容詞に先行することもありそうである。6.3.2 節の内容をまとめると、<表 16>のようになる。

表 16 : 「動詞句＋形容詞句」の意味関係のあり方〔異質関係〕

複合連体句「動詞句＋形容詞句」の意味関係のあり方		
	動詞句	形容詞句
異質な側面を述べる場合	【属性づけ】 (深い森の中に咲く) (サバナの郊外にある)	【属性づけ】 (巨大な花だ) (すてきな町だ)
	【内容づけ】 (とあるレストランを舞台に展開する)	【属性づけ】 (スリリングな物語だ)
	【関係づけ】 (同封されていた) (気持ち良さそうに風と遊んでいる)	【属性づけ】 (古い切り抜きだ) (真っ黒な女のコード)
動詞句と形容詞句の意味関係	異なる観点からの特性	

以上 6.3 節で述べた内容から動詞句と形容詞句の意味関係をまとめると、特性の同質な側面を述べる場合には、個別・具体的な特性から一般化・評価づけという関係であり（表 15）、特性の異質な側面を述べる場合には、異なる観点からの特性をそれぞれ述べている（表 16）。全体として「動詞句＋形容詞句」は、主語の特性を個別・具体的に述べる動詞句と一般的な性質を述べる形容詞句との組み合わせだと言えそうである。それができるのは、動詞が他の品詞（名詞や形容詞）と違って、アスペクト、ボイス、やりもらいなどのような動詞固有の形態論的カテゴリーをもっているためであろう（例(10)(16)(17)(18)(22)(28)(32)(33)(44)(45)など参照）。複合連体句「動詞句＋形容詞句」は、動詞

句のそのような文法的な性質と、事物の性質を述べるという形容詞の語彙的な性質の反映を示していると言えそうである。

6.4 「形容詞句＋動詞句＋名詞ダ」型の文について

「形容詞句＋動詞句＋名詞ダ」型の文は全体の 4.5%（表 13）と多くないが、みうけられる。本節では「形容詞句＋動詞句」の意味関係を観察し、「動詞句＋形容詞句＋名詞ダ」型の文と比較することにする。まず、「形容詞句＋動詞句」の意味関係とそれぞれの用例数を<表 17>に示した。

表 17：「形容詞句＋動詞句」の意味関係と用例数

形容詞句と動詞句の意味関係	用例数	割合(%)
同質な側面を述べるもの	16	76.2
異質な側面を述べるもの	5	23.8
合計	21	100.0

<表 17>にうかがえるように、「形容詞句＋動詞句」の意味関係は、「動詞句＋形容詞句」の場合と同じく同質な側面を述べるもののほうが多い。

6.4.1 同質な側面を述べるもの

形容詞句と動詞句が主語の特性の同質な側面を述べる文には、次のような例がある。

- (47) ジアンビもまったく遜色がない優れた選手だけど、我々は今年百十六勝というすごい成績をあげたからね。こんなことはメジャーの歴史でもこれまで1度しかなかった。
(イチローレポート)

「遜色がない」と「優れた」が選手としての能力という側面を同じような意味で表している。また、次の例も同じである。例(48)では「とても素敵な」と「心を惹かれる」が人としての魅力という側面を、例(49)では「美しい」と「光輝く」が美しさという側面を、同じように表している。「形容詞句＋動詞句＋名詞ダ」型の文における動詞句は、これらの動詞句（「優れた」「心を惹かれる」「光輝く」）のように、動作ではなく性質を表す形容詞的な意味になることが多い。

- (48) 「(前略) 僕はいつも自分を空っぽの容器みたいに感じてきた。」(中略) 「たとえ君が空っぽの容器だったとしても、それでいいじゃない」とエリは言った。「もしそうだとすると、君はとても素敵な、心を惹かれる容器だよ。」

(色彩を持たない多崎つくると彼の巡礼の年:322,323)

- (49) 次の“二禅”にも三天がある。美しい光輝く世界だ。そして、上層に行くほどに光の質と量が上等になっていく、とされている。(仏教の知識百科)

次の例では、通常動詞句が表す特性の具体的な説明を形容詞句が担当している。例(50)では形容詞句と動詞句が仕事の価値の高さという側面を、例(51)ではコースの特徴という側面を類似した意味で表している。

- (50) 「皆さんの中には刑事弁護士も大勢いらっしゃるはずです。正直に告白しますと、わたし自身、弁護士の中でも刑事弁護士が一番カッコいい仕事だと思ってきました。刑事弁護士は他人の生死を扱います。だからこそ我々の情熱を傾けるにふさわしい名誉ある仕事だと思うのです。」(天使の自立)

- (51) ヤシの木と青空など、真夏の雰囲気を感じさせてくれるハイスピードなダートコースだ。(中略) ドリフト走行の練習に最適な、初心者にもオススメできるコースだ。

(グランツーリスモ 3 A-spec 公式ガイドブック)

しかし、これらの文では、6.3.1 節で述べた個別・具体的に表現する連体句が前に来て、その後の連体句がそれを一般化して表現する(たとえば「すきま風の吹き抜ける古い家だ」という意味的なむすびつきは感じられにくい。

また、次の例では後の動詞句のほうが長さも長く、第2章先行研究で概観した佐伯(1960)の構文的な条件に反している。

- (52) 「聞いたかね、おばば、そこにいる若者が、そなたの娘をまんまと話させたというのを？ 賢い、知恵のはたらくやつだ。そなたの娘をなんとか怒らせ、口をきかせようと、こういう手を考え出したのだ。」(世界の民話)

ここでは、「賢い」と「知恵のはたらく」が同じく利口さという側面を表しているが、この形容詞「賢い」は、話し手の評価的な感情表出を表しているようにも思われる。

以上をまとめると、「形容詞句+動詞句+名詞ダ」型の文は、複合連体句が特性の同質な側面を述べる場合が多いという点で「動詞句+形容詞句+名詞ダ」型の文と共通しているものの、複合連体句内の意味的なあり方においては異なっていると言える。

6.4.2 異質な側面を述べるもの

形容詞句と動詞句が特性の異質な側面を述べる文には、次のような例がみられる。この例では先行する形容詞句が主語の「ウェルドン」の空間＝状況的な関係を担っており、6.3.2 節でみた例（41）（42）で状況的な関係を動詞句が表現している場合と異なっている。

(53) 私たちはさっそくウェルドンという町の中心部にあるパットの家に向かった。ウェルドンは私が生まれ育ったリッチスクエアに近い、古い歴史を誇る町だ。（告白）

以上 6.4.1 節と 6.4.2 節では、「形容詞句＋動詞句」の意味関係について述べた。複合連体句のなかで、形容詞句が語彙的な意味、二格などをとるという構文的な性質などによって、主語の特性を個別・具体的に述べたり（例 50、51）、状況的な関係を述べたり（例 53）することもある。また、動詞句も動詞らしさを失って形容詞のように主語の特性を一般的・抽象的に述べたりすることもある（例 47～50）。しかし、そのような組み合わせは、実例を観察すると用例数が少ない。

「形容詞句＋動詞句＋名詞ダ」型の文は、先行の形容詞句は一部の形容詞に限られること（「ふさわしい、最適な、近い」など）、後続の動詞句は形容詞的な特性・評価の意味合いを表す時に限られること（「光輝く」「名誉ある」など）が多いと言えそうである。これは動詞固有の形態論的カテゴリーが生きている「動詞句＋形容詞句＋名詞ダ」型の文とは対照的である。この「形容詞句＋動詞句＋名詞ダ」型の文は、「形容詞句＋形容詞句＋名詞ダ」型の文（「美しい古い歌だ」）など他の複合連体句と比較調査することで共通点がみいだせるかもしれない。

6.5 おわりに

以上、本章では「動詞句＋形容詞句＋名詞ダ」型の文（「仕事ができる素晴らしい人だ」）と「形容詞句＋動詞句＋名詞ダ」型の文（「若いやせた女性だ」）の複合連体句内の動詞句と形容詞句の結びつきにおける意味的なあり方の分析を通じて、二つの文の違いを次のように明らかにした。

<用例数の面>

- ・「動詞句＋形容詞句＋名詞ダ」型の文が圧倒的に多い（95.5%）のに対して、「形容詞句＋動詞句＋名詞ダ」型の文は極めて少ない（4.5%）。

＜動詞句の特徴の面＞

- ・「動詞句＋形容詞句＋名詞ダ」型の文における動詞句では動詞固有の形態論的カテゴリーを生かした述べ方ができるのに対して、「形容詞句＋動詞句＋名詞ダ」型の文では動詞句が性質を表す形容詞的な意味になることが多い。
- ・全体的に言えば、述語名詞を修飾する直前の連体句には形容詞的なものが来やすい。

＜複合連体句内の動詞句と形容詞句の意味関係の面＞

- ・特性の同質な側面を述べる文のほうが、異質な側面を述べる文より多い。
- ・特性の同質な側面を述べる場合、「動詞句＋形容詞句＋名詞ダ」型の文では動詞句が個別かつ具体的な特性の側面を述べ、それを形容詞句によって一般化・評価づけしてあらためて示す（「すきま風の吹き抜ける古い家だ」）ことが多いのに対して、「形容詞句＋動詞句＋名詞ダ」型の文ではこのような「個別・具体的な特性から一般化・評価づけ」というむすびつきがほとんどみられない。
- ・主語の特性を具体的に述べる連体句（多くは動詞句）は多様な情報を含んでいるため、必然的に長くなる。これは長さの長い連体句が前に置かれるという構文的な要因とも関係することではあるが、単に長さによるものというより、複合連体句を結びつける意味関係の現れ方を示しているように思われる。
- ・「動詞句＋形容詞句＋名詞ダ」型の文というのは、動詞句の文法的な性質と形容詞の語彙的な性質が反映された、動詞句の表現の豊かさや情報の豊富さと形容詞句の表す特性の一般的・評価的な性質の組み合わせである。

本章では、以上のようにこれまであまり目を向けてこなかった複合連体句内の意味関係に注目した。しかし、6.1 節にも挙げたように「動詞句＋動詞句＋名詞ダ」型や「形容詞＋形容詞＋名詞ダ」型の文など、複合連体句にはさまざまなタイプがあり、これらも含めて調査することによって、複合連体句内の意味関係のあり方がより明らかになると思われる。今後複合連体句について総合的な比較考察を行い、一般化することが必要であると思われる。

◆第Ⅱ部（本論Ⅰ）のまとめ：「形容詞＋名詞」述語文の性質

以上、第Ⅱ部（本論Ⅰ）では「形容詞＋名詞」述語文の性質について考察を行った。

第4章と第5章は、「形容詞＋名詞」述語文と形容詞述語文を比較考察することによって、「形容詞＋名詞」述語文の性質を明らかにしようとしたものである。「形容詞＋名詞」述語文は述語に形容詞を含んでいるという点において形容詞述語文と共通しているものの、主語の示し方や修飾成分との共起関係においては形容詞述語文と異なる特徴をみせた。二つの構文は程度副詞や比較表現Ⅰ（他の事物との比較）においては共通点がみられるのに対して、特性の一時性にかかわる共起成分（状況語、頻度副詞など）や比較表現Ⅱ（他の時点の当該物との比較）においては違いがみられる。

一方、第6章では「形容詞＋名詞」述語文の内部構造に焦点を当てている。述語に名詞を含んでいるという名詞述語文の性質を手がかりに、述語名詞を修飾する動詞句と形容詞句の意味的なあり方を通して、「形容詞＋名詞」述語文の性質を明らかにしようとした。その結果、主語名詞の表す事物の特性をそれぞれの連体句の意味機能によって、具体的に（動詞句）かつ一般的・評価的な性質（形容詞句）として表していることを確認した（「騎馬像の初めは古代ローマ帝国時代にさかのぼる古いものだ」）。

「形容詞＋名詞」述語文のこのような性質は、述語に形容詞と名詞を含んでいるからであり、形容詞の有する程度性という性質と名詞述語文の性質をあわせもっていることによるものと考えられる。

第Ⅲ部 本論Ⅱ

—述語名詞からモーダルな形式へ—

第Ⅲ部（本論Ⅱ）では、「形容詞＋名詞」述語文の次の考察として「形容詞＋モノダ」文と「形容詞＋コトダ」文を取り上げる。それに先立ち、第Ⅲ部（本論Ⅱ）と第Ⅱ部（本論Ⅰ）との関係を簡単に述べておく。

第Ⅱ部（第４章と第５章）では、「形容詞＋名詞」述語文と形容詞述語文とを比較考察し、両者には構文的・意味的な共通点と相違点があることを確認した。まず、第４章では主語の示し方における二つの相違点について述べた。「形容詞＋名詞」述語文と形容詞述語文は、主語が「は」で示される割合が他の形式に比べて相対的に高い点で共通しているものの、「は」で提示されないものにおいては相違がみられる。形容詞述語文では主語が「って」「なんて」で提示されたり無助詞である例の割合が高く、「形容詞＋名詞」述語文では「というのは（「ってのは／っていうのは」などを含む）」で提示される例の割合が高いという違いがあり、形容詞述語文には「形容詞＋名詞」述語文に現れにくい無表示形式（「と」「たら」「けど」などによる節をもって特性の持ち主を提示する例「目が見えないと不便だ」）もみられる。

次に、第５章では主語名詞の表す事物の〈特性〉の恒常性と一時性における両者の違いについて述べた。形容詞述語文は恒常的な特性（「山田先生はやさしい」）を述べることができるのはもちろん、一時的な事態（「最近、なんだか無口ね」）も述べることに對して、「形容詞＋名詞」述語文は恒常的な特性だけを述べることができる（「山田先生はやさしい人だ」／？「最近、無口な人ね」）という違いがある。

以上の第４章と第５章の考察にうかがえるように、「形容詞＋名詞」述語文は恒常的な特性を述べることを基本とし、構文的な環境には「形容詞＋名詞」述語文が現れやすい環境と形容詞述語文が現れやすい環境があると言える。但し、通常の「形容詞＋名詞」述語文が許容されない環境、すなわち文の意味が「恒常的な特性」ではなく「一時的な現象」を表す場合には、「形容詞＋モノダ」文が許容されることがあり、ここでの「ものだ」はいわゆる詠嘆のようなモーダルな意味合いを帯びる。

第Ⅲ部（本論Ⅱ）では、以上の本論Ⅰ（第４章と第５章）の結果を踏まえ、述語名詞とモーダルな意味を表す形式との連続性に注目し、「ものだ」及び、「もの」と同じく形式名詞である「こと」による「ことだ」のモーダルな意味が実現する構文的な環境をさぐる。

第7章 「形容詞＋モノダ」文と「形容詞＋コトダ」文

「もの」「こと」という名詞は、いわゆる形式名詞で、実質的な意味が希薄な名詞と言われ、その意味の抽象性によって、モーダルな意味を表す形式への移行がみられる。本章では、述語名詞としての「もの」「こと」とモーダルな意味を表す「ものだ」「ことだ」の違いを構文的な形として示すことができるのではないかと考え、「形容詞＋モノダ」文と「形容詞＋コトダ」文における特性の持ち主の示し方に注目した。また、主語名詞の表す事物の〈特性〉の恒常性と一時性についても必要に応じて考えあわせることにする。

7.1 節では「形容詞＋モノダ」文と「形容詞＋コトダ」文の用例収集と用例数の分布について述べ、7.2 節と 7.3 節では、述語名詞としての「もの」「こと」からモーダルな形式「ものだ」「ことだ」までの構文的な環境をさぐる。

7.1 分析対象と用例数

第Ⅲ部（本論Ⅱ）で扱う「形容詞＋モノダ」文と「形容詞＋コトダ」文の用例は、主として国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（BCCWJ）から、すべてのジャンルを検索対象とし、検索アプリケーション「中納言」を用いて採集した。「形容詞」については 1.2.2.3 節で述べたように、短単位の品詞分類から「形容詞」（「形容詞—一般」「形容詞—非自立可能」）、「形状詞—一般」、「名詞—普通名詞—形状詞可能」、「名詞—普通名詞—サ変形状詞可能」（検索条件の網かけで示した部分）の四つを指定し⁴⁷、文末の形式としては、「だ」「です」「である」「でございます」を指定して検索した。それぞれの詳しい検索条件については、7.1.1 節と 7.1.2 節で述べることにする。

7.1.1 「形容詞＋モノダ」文の用例

「形容詞＋モノダ⁴⁸」文の用例については、たとえば、文末形式が「だ」の場合の検索条件は次のようになり、「形容詞」が 1,191 例、「形状詞—一般」が 466 例、「名詞—普通名詞—

⁴⁷ 短単位の品詞分類について詳しくは注4と注5を参照されたい。本研究で指定した四つの分類の簡単な例を挙げると、「形容詞」には「高い」「大きい」「いい」などのいわゆるイ形容詞、「形状詞—一般」には「大切な」「好きな」など、「名詞—普通名詞—形状詞可能」には「不思議な」「楽な」など、「名詞—普通名詞—サ変形状詞可能」には「贅沢な」「失礼な」などの形容詞が分類されている。

⁴⁸ 実際の使用では「もの」ではなく「もん」の形もみられるが、本研究ではこれらを代表して「もの」と記す。なお、「形容詞＋モノダ」文には、「形容詞＋ものです」「形容詞＋ものである」「形容詞＋ものでございます」も含まれている。但し、次の例のようないわゆる終助詞的用法の「もの」（下線）は分析の対象外とする。

・「入口と出口のない道というのは考えてみれば変なものだものな。道とか川とかの根本原理は流れるということだからね。塞げば淀む」（ねじまき鳥クロニクル）

形状詞可能」が 261 例、「名詞-普通名詞-サ変形状詞可能」が 28 例の計 1,946 例が得られた。

キー: (品詞 LIKE "形容詞%" AND 活用形 LIKE "連体形%")

AND 後方共起: 語彙素="物" ON 1 WORDS FROM キー

AND 後方共起: (語彙素="だ" AND 活用形 LIKE "終止形%") ON 2 WORDS FROM キー

キー: 品詞 LIKE "形状詞-一般%"

AND 後方共起: (語彙素="だ" AND 活用形 LIKE "連体形%") ON 1 WORDS FROM キー

AND 後方共起: 語彙素="物" ON 2 WORDS FROM キー

AND 後方共起: (語彙素="だ" AND 活用形 LIKE "終止形%") ON 3 WORDS FROM キー

キー: 品詞="名詞-普通名詞-形状詞可能"

AND 後方共起: (語彙素="だ" AND 活用形 LIKE "連体形%") ON 1 WORDS FROM キー

AND 後方共起: 語彙素="物" ON 2 WORDS FROM キー

AND 後方共起: (語彙素="だ" AND 活用形 LIKE "終止形%") ON 3 WORDS FROM キー

キー: 品詞="名詞-普通名詞-サ変形状詞可能"

AND 後方共起: (語彙素="だ" AND 活用形 LIKE "連体形%") ON 1 WORDS FROM キー

AND 後方共起: 語彙素="物" ON 2 WORDS FROM キー

AND 後方共起: (語彙素="だ" AND 活用形 LIKE "終止形%") ON 3 WORDS FROM キー

なお、文末形式が「です」「である」「でございます」の用例もこのような方法で採集し、それぞれ 2,226 例、1,065 例、58 例得られた。以上の検索条件によって採集した「形容詞+モノダ」文の総用例数を<表 18>に示した。

表 18 : 「形容詞+モノダ」文の総用例数

「形容詞+モノダ」文	用例数	割合(%)
「形容詞+ものだ」文	1,946	36.8
「形容詞+ものです」文	2,226	42.0
「形容詞+ものである」文	1,065	20.1
「形容詞+ものでございます」文	58	1.1
合計	5,295	100.0

7.1.2 「形容詞+コトダ」文の用例

「形容詞+コトダ⁴⁹」文の用例も「形容詞+モノダ」文と同じように採集した。まず文末形式が「だ」の場合の検索条件は次のようになり、「形容詞」が 1,699 例、「形状詞-一般」が 813 例、「名詞-普通名詞-形状詞可能」が 306 例、「名詞-普通名詞-サ変形状詞可能」が 21 例の計 2,839 例が得られた。

キー: (品詞 LIKE "形容詞%" AND 活用形 LIKE "連体形%")

AND 後方共起: 語彙素="事" ON 1 WORDS FROM キー

AND 後方共起: (語彙素="だ" AND 活用形 LIKE "終止形%") ON 2 WORDS FROM キー

キー: 品詞 LIKE "形状詞-一般%"

AND 後方共起: (語彙素="だ" AND 活用形 LIKE "連体形%") ON 1 WORDS FROM キー

AND 後方共起: 語彙素="事" ON 2 WORDS FROM キー

AND 後方共起: (語彙素="だ" AND 活用形 LIKE "終止形%") ON 3 WORDS FROM キー

キー: 品詞="名詞-普通名詞-形状詞可能"

AND 後方共起: (語彙素="だ" AND 活用形 LIKE "連体形%") ON 1 WORDS FROM キー

AND 後方共起: 語彙素="事" ON 2 WORDS FROM キー

AND 後方共起: (語彙素="だ" AND 活用形 LIKE "終止形%") ON 3 WORDS FROM キー

キー: 品詞="名詞-普通名詞-サ変形状詞可能"

AND 後方共起: (語彙素="だ" AND 活用形 LIKE "連体形%") ON 1 WORDS FROM キー

AND 後方共起: 語彙素="事" ON 2 WORDS FROM キー

AND 後方共起: (語彙素="だ" AND 活用形 LIKE "終止形%") ON 3 WORDS FROM キー

なお、文末形式が「です」「である」「でございます」の用例も、このような方法によって採集した。以上の検索条件によって採集した「形容詞+コトダ」文の総用例数は、<表 19>のようになる。

⁴⁹ 実際の使用では「ことだ」ではなく「こった」の形もみられるが、本研究ではこれらを代表して「コトダ」で示す。なお、「形容詞+ことだ」「形容詞+ことです」「形容詞+ことである」「形容詞+ことでございます」を含めて「形容詞+コトダ」文と記す。

表 19 : 「形容詞＋コトダ」文の総用例数

「形容詞＋コトダ」文	用例数	割合(%)
「形容詞＋ことだ」文	2,839	48.8
「形容詞＋ことです」文	1,996	34.3
「形容詞＋ことである」文	860	14.8
「形容詞＋ことでございます」文	123	2.1
合計	5,818	100.0

7.2 「形容詞＋モノダ」文

本節では、「形容詞＋モノダ」文において特性の持ち主がどう提示されるかに着目し、述語名詞としての「もの」からモーダルな意味を表す形式までの分布について述べる。

7.2.1 「形容詞＋モノダ」文の主語の示し方

まず、「形容詞＋モノダ」文の主語の現れ方と用例数を次の表に示した⁵⁰。

表 20 : 「形容詞＋モノダ」文の主語の現れ方と用例数

「形容詞＋モノダ」文	用例数	割合(%)
主語が文中に現れる場合 ⁵¹	3,850	73.4
主語が文中に現れない場合	1,395	26.6
合計	5,245	100.0

＜表 20＞の総用例数をみると、“主語が文中に現れる場合”が 73.4%を占めているのに対して、“主語が文中に現れない場合”は 26.6%である。＜表 20＞の上段の“主語が文中に現れる場合”を対象に主語がどう示されるかをさらに調査し、その結果を＜表 21＞に示した（「その他」の示し方を除いて、用例数と割合の高い順に示した）。

⁵⁰ 採集した用例5,295例には、重複している例、「ものだ」が主節ではなく、従属節に現れている例（「安いものだと数千円で購入出来ます」）、動詞の活用形として「ない」が含まれている例（「元来格式ばらないものですから、あまり書式にこだわる必要はない」）、「～ふうなものだ」の例（「もしそういうようなことで生態系そのものにも大きな影響を与えているというふうなものであるならば、（後略）」）などの50例が含まれており、分析の対象から除外した。「形容詞＋コトダ」文の用例も同様である。

⁵¹ 当該の文において主語が現れていなくても、前後の文脈に主語相応のものが現れていて特定できる例はここに含まれている。次の例では「ビン詰めコレラ菌」が主語に相応するものと判断される。

・「これは生菌です。これは実際に生きている病原菌の培養です」と、ためらいながら「いわゆる、ビン詰めコレラ菌です」青白い男の顔に、かすかな満足の色がちらりと浮かんだ。「あなたの所有物の中で、手を触れると一番恐ろしいものですね」と、（後略）（タイムマシン）

表 21 : 「形容詞＋モノダ」文の主語が文中に現れる場合の示し方

示し方	「形容詞＋モノダ」文	
	用例数	割合(%)
は	<u>2,548</u>	<u>66.2</u>
も	330	8.6
というのは類（「ということは」「というものは」など含む）	301	7.8
が（「ということが」などを含む）	252	6.5
とは	105	2.7
無表示（条件節／～ガ節など）	88	2.3
って（て）	87	2.3
なんて（「なんか」4例／「なんぞ」1例含む）	33	0.9
φ（無助詞）	30	0.8
というのも類（「ということも」「というものも」など含む）	17	0.4
だって	11	0.3
その他（「といえは」など）	48	1.2
合計	3,850	100.0

＜表 21＞の主語が文中に現れる場合の示し方をみると、その具体的なタイプはさまざまである。まず、主語を「は」で提示する場合は約 66.2%を占めており⁵²、「形容詞＋モノダ」文は基本的に「主題・解説」という提題構文の形式を取って、主語の恒常的な特性を述べると言えよう。

その次は、「も」（8.6%）、「というのは」類（7.8%）、「とは」（2.7%）である。その他、「って」（2.3%）、「なんて」（0.9%）、無助詞（0.8%）、そして無表示形式（2.3%）もみられる。また、「が」で示される場合が 6.5%あるが、この場合のほとんどは「ものだ」が引用節のような従属節に含まれる場合である（「彼の全著作の中でこの本が最もすばらしいものだ」と称えた。（神は老獺にして…）」）。

⁵² 次のように前の文脈に主語相当の名詞が現れていて（点線）、主語として特定できる例（471例）は「は」の用例数の中に含まれている。これについては本文で後述する。

・ 燈明台の下には、石の板があった。（中略）黒い大理石のぶ厚いものだ。（ステュクスの一族）
 ・ おさしみ、てんぷら、からあげ、茶碗蒸し、野菜炒めに卵焼き、それに具だくさんのまぜご飯、和洋中華が入りまじって、テーブルいっぱいならんでいる。みんな杉田の好きなものだ。
 （七日間のウォーキング・ラリー）

上の結果をさらに文のタイプに示しなおし、＜表 20＞の“主語が文中に現れない場合”も含めて全体の割合をみると、次のようになる。

表 22 : 「形容詞＋モノダ」文のタイプ

「形容詞＋モノダ」文のタイプ		用例数	割合(%)
主語が文中 に現れる 場合	「N ハ …… Adj モノダ」	<u>2,548</u>	<u>48.6</u>
	「N ガ …… Adj モノダ」(「というのが」類も含む)	252	4.8
	「N/節トイウノハ …… Adj モノダ」	301	5.7
	「N トハ …… Adj モノダ」	100	2.0
	「節トハ …… Adj モノダ」 ⁵³	5	
	「N/節ッテ …… Adj モノダ」	87	1.7
	「N φ …… Adj モノダ」	30	0.6
	「N モ …… Adj モノダ」 (「というのも」類「だって」も含む)	358	6.8
	「N ナンテ …… Adj モノダ」	30	0.6
	「節ナンテ …… Adj モノダ」	3	
	「節＋Adj モノダ」(無表示形式)	88	1.7
	その他の示し方	48	0.9
文中に現れ ない場合	「Adj モノダ」	<u>1,395</u>	<u>26.6</u>
	「節＋モノダ」		
合計		5,245	100.0

＜表 22＞の用例数をみると、主語を「は」で示す「N ハ Adj モノダ」タイプが 48.6%を占めていて、“主語が文中に現れない場合”の「Adj モノダ」「節＋モノダ」タイプが 26.6%であり、「形容詞＋モノダ」文は大きくこの二つのタイプに偏っている。

まず、「N ハ Adj モノダ」タイプの例 (1) をみると、ここでの「もの」は主語名詞の「蘭」のかわりに用いられたもので、典型的な述語名詞としてふるまっている。

- (1) エランギス・ブラキカルパ、エランギス・コンフューザ、エランギス・トムソニイ
は、アフリカの蘭のなかでも私が最も好きなものである。(世界蘭紀行)

⁵³ 「とは」「なんて」で示される例については、「Nトハ/ナンテAdjモノダ」と「節トハ/ナンテAdjモノダ」に分けて示した。これについては本文で詳述する。

一方、次の例をみると、主語は文中に現れておらず、前後文脈の何らかの事柄や状況を指して述べていて、＜表 22＞で「Adj モノダ」タイプとしたものである。ここでの「もの」は述語名詞性を失い、典型的なモーダルな意味を表す形式になっている。

- (2) 広田先生は三四郎にいった。「英国は利己利他両主義がうまく平衡している。だから進歩しない。イブセンもニイチェも出ない。気の毒なものだ。自分だけでは得意のようだが傍から見れば堅くなって化石しかかっている。」 (和辻哲郎全集)

このように、述語名詞としての「もの」かモーダルな意味を表す「ものだ」かは、主語が文中に存在するか否か、また文中に存在するとしたら主語をどのように示すかとかかわっているようで、それによって文の形も異なってくるのではないと思われる。つまり、「形容詞+モノダ」文には「もの」が典型的に述語名詞としてふるまう文のタイプと典型的にモーダルな形式と言える文のタイプがあり、その中間にはさらにさまざまな文のタイプが存在すると言えそうである。

以下では、＜表 22＞の文のタイプをもとに、「もの」が典型的に述語名詞として機能する文のタイプからモーダルな意味を表す典型的な文のタイプまで、詳しく説明する。

7.2.2 「形容詞+モノダ」文のタイプ

7.2.2.1 「N ハ Adj モノダ」タイプ (「N ガ Adj モノダ」)

主語を「は」で示す「N ハ Adj モノダ」タイプは、「もの」が述語名詞として働く場合の典型的なタイプと言える。「もの」は主語名詞の表す事物の上位概念の名詞として用いられ、形容詞とあいまってその特性を述べる。例 (3) ～ (5) の主語名詞は個別・具体的なものを指していて、例 (6) (7) の主語名詞は一般・総称的なものを指している。

- (3) 風に吹きさらされた木々、折れて転がっている木の幹、大きくわき立つ雲の動きなどを描き込んだこの絵は、ホッペマの作品の中で最も劇的なものである。

(メトロポリタン美術館ガイド)

- (4) 白石(千六百五十七～千七百二十五)が、クリシタンのとりしらべに使ったもので、現在、完全な形でのこっているブラウの「新世界全図」は、世界中でこれ一枚だけという貴重なものです。

(地図で見る世界の形の移りかわり)

- (5) 井戸で見つかった鏡は、とても古いものらしかったが、水垢が厚くこびりついていた。よく気をつけて磨かしてみると、鏡は手のこんだ細工の、とても珍しいものだ

とわかった。

(雪女;夏の日の夢)

- (6) 世の中で、値打ちのわりに値段の安いものとして、たとえば書籍があります。**書籍は非常に安いものです**。一冊千円や二千円で、非常に価値のある内容が書かれています。
(常勝の法)
- (7) 農家にとって「**水**」は、大切な農作物を育てる重要なものです。(市報かみのやま)

なお、前後の文脈に主語相応のものが現れていて、当該の文においては主語が省略されている場合がある。たとえば、次の例では「形容詞+モノダ」文(「…簡単なものだ」「…古いものだ」)に主語が省略されているが、前の文脈に現れている「腰巻き」「日本橋」がそれに相応すると判断される。つまり、「腰巻きは簡単なものだ」「日本橋は橋の文物のなかでは一番古いものだ」という関係であるため、「N ハ Adj モノダ」タイプに入れることができる。

- (8) アブディラーヒは背が高く、細長い顔に山羊髭を生やしていた。白いシャツを着て、マーアウェイスと呼ばれる伝統的な腰巻きをつけている。柄ものの四角い布を腰に巻きつけ、端をウェストにたくし込んだ簡単なものだ。(ディリー、砂漠に帰る)
- (9) かつて日本人町と中国人町をつないだ橋で、俗名を日本橋という。(中略)土地の歴史家の話では年代は不明だが、橋の文物のなかでは一番古いものだ。

(もっと知りたいベトナム)

また、上にも述べたように、「N ハ」ではなく、「N ガ」である「N ガ Adj モノダ」文もみられるが、そのほとんどは引用節や理由節など従属節で現れるか(例 10)、比較構文の中に現れている(例 11)。このタイプも「もの」が述語名詞として機能しており、「時間は貴重なものだ」「千三百三十四年に手で書かれたタルムードは現存している最も古いものである」のように言い換えられるため、文のタイプとしてはここに入れられる。＜表 22＞に示したように、「N ハ Adj モノダ」文は 2,548 例(48.6%)で、「N ガ Adj モノダ」文の 252 例(4.8%)を含めると、2,800 例(53.4%)で全体の半数以上を占めることになる。

- (10) 目標を意識し、計画を立てることで、**時間が貴重なものだ**とわかってくる。
(がんばる力とたしかな学力)
- (11) タルムードはバビロニアで紀元後五百年に編纂が始まった。**千三百三十四年に手で書かれたタルムードが**、現存している最も古いものである。(ユダヤ 5000 年の知恵)

以上で述べたように、「形容詞+モノダ」文は主語名詞の表す事物の恒常的な特性を述べ

ることを基本としており、主語を示す代表的な形式は「は」である。すなわち、「N ハ Adj モノダ」タイプは、述語名詞としての「もの」の典型的な形式である。

7.2.2.2 「N/節トイウノハ Adj モノダ」「N トハ Adj モノダ」「N/節ッテ Adj モノダ」 「N ϕ Adj モノダ」タイプ

「N/節トイウノハ Adj モノダ」「N トハ Adj モノダ」「N/節ッテ Adj モノダ」「N ϕ Adj モノダ」タイプは、主語を「は」ではなく、「というのは」「とは」「って」「無助詞」で示すタイプである。このうち、「というのは」⁵⁴「とは」⁵⁵「って」⁵⁶は本来引用形式とかかわる標識で、「ものだ」のモーダルな意味と何らかのかかわりがありそうである。

まず、「N/節トイウノハ Adj モノダ」タイプについてみると、第4章では次の例をあげ、一般・総称的なものが主語になる場合と「というのは」の標識との関係について述べた。

- (12) 山本は、工藤の電話の内容を聞いて、いきり立った。「工藤って、本物の莫迦^{ばか}じゃないですか。竹中支店長に助けてもらったことを忘れて、焼き餅をやくなんて、どうかしてますよ。ジェラシーも分からなくはありませんが、そこはぐっと堪えて、褒めるぐらいの余裕がなければおかしいんです」(中略)「冷汗三斗とか穴があつたら入りたいとか、支店長は謙虚な人ですねえ」(消失(上): 565)

(12)? 「支店長は謙虚なものですねえ」

(12)" 「支店長というのは謙虚なものですねえ」 (=4.3 節例(41) (41)“(41)”)

この例では、文脈上「支店長」は竹中支店長という個別主体を指しているが、この文の述語名詞「人」を「もの」に置き換えると、主語名詞を一般・総称的なものとして捉えることができる。この場合、主語の標識のほうも「というのは」に置き換えて示すほうが自然に感じられるということを4.3 節で指摘したが、これは「というのは」が「ものだ」文の表す本質の意味と深く関係があることを示唆しているものと思われる⁵⁷。実際に「というのは」類で示された主語の性質を調査してみても、主語が一般・総称的なものの場合が301 例のうち264 例(87.7%)であり、個別・具体的なものより多いことがわかる。この

⁵⁴ 「というのは」は「というのは」のほか、「ということは」「というものは」なども含む。

⁵⁵ 「とは」は「格助詞「と」に係助詞「は」がついたもの(『日本国語大辞典』第二版第九巻、p.1299)」である。

⁵⁶ 「って」は「と言う(といふ)」が「てふ」などを経て変化したもの(『日本国語大辞典』第二版第九巻、p.382)」である。

⁵⁷ 2.4.1.2節にも述べたが、寺村(1981)では「「…モノダ」は、本来はある対象を大きくモノに属するものと類別し、修飾部「……」でそれを特定するという形であるが、その修飾部が単なる特定・限定という範囲を越えて、「一般に(主題となっているあの特定の対象が)こういう性格、本性をもっている」という主張の、その性格、本性を表わすように使われることが多い」(p.756)と述べている。

ように「N/節トイウノハ Adj モノダ」は、一般・総称的なものを主語として取り上げ、その一般的な特性を述べるのに用いられる。さらにこの文のタイプでは、主語名詞の表すモノの一般的な特性を述べるだけでなく、それに対する認識や詠嘆のようなモーダルな意味へ発展していくことが多い。

《「というのは」》

- (13) 「一昨日の夜は、何処にいらっしゃいましたか？」十津川がきいた。「私のアリバイですか。ここのところ忙しくて、ここに泊まり込みです」「それを証明してくれる人がいますか？」と、十津川がきくと、須崎はからかうように、「社長というのは、孤独なものですよ」いった。(西伊豆美しき殺意)

- (14) 「いやあ、さすがに警察というのは凄いいですねえ。もう何から何までお見通しなんだから…いや、恐れ入りました」(富士六湖まぼろしの柩)

- (15) 初めのボールがグリーン手前のバンカーに入るとクラブを取り換えて二度打った。二つともグリーンをボールがとらえ、その内の一つは、ピンのすぐそばに寄っていたようだった。やはりプロというのはすごいものだ、と感嘆して二十五歳の自分より数歳だけ上らしい若い選手の横顔を見つめていた。(オンザティ)

- (16) 「大変だな」といって、先生はうなずいた—⁵⁸人生ってのはつらいもんだが、それはなにもきみだけじゃないよ、というように。(ラスト・ダンス)

《「というものは」》

- (17) 「なんだ、わたしども夫婦のアリバイ調べですかあ」「いや、どうも失礼しました。じつはご令息もあなたのように、素直に答えてくださるとよろしいんですが、それがなかなか…」「いや、あの年頃の男の子というものは、取り扱いがむづかしいものです。とくに受験に失敗してからは、ちょっとした被害妄想狂みたいになってるんじゃないですか。(後略)」(病院坂の首縊りの家)

なお、次のように出来事や事柄を取り上げ、その特性を述べる場合も同じである⁵⁹。単に特性を述べるだけではなく、それを認識し、感心する気持ちや詠嘆の意味合いが感じられる。

⁵⁸ 本論文の例文中の中線(一)、「…」は原文のままである。

⁵⁹ 高橋(1998b: 184-186)にも主語名詞がコトを表す場合における「モノダ」文、すなわち「～ことは～ものだ」に注目した言及がある。このパターンは「もの」が形式名詞である「するものだ」と実質名詞である「するものだ」のつなぎめとしてのパターンである(p.184)とし、「コトはモノである」は構文パターンとして「モノはモノである」の一種で、「コトはモノである」一般化のはたらきをもつ構文パターンであり、ここに「するものだ」が一般法則をあらわすことの基礎が存在しているのである(p.185)と述べている。

«「というのは」»

(18) 年を取るというのは、とつても一不便なものだ。なんてやっかいなんだろう。何もかも時間がかかってしょうがない。 (13ヵ月と13週と13日と満月の夜)

(19) 水が飲めないというのは、苦しいものだ。あれほどつらいとは思ってもみなかった。
(弟を地に埋めて)

(20) やがて船長がピリピリと笛を鳴らすと、気笛のひもがひっぱられ、ボーボーと鳴った。船内にエンジンの震動がつたわって、やがて船尾が頭になり、背進して埠頭を離れた。港を出るというのは、気分がいいものである。

(甲賀と伊賀のみち、砂鉄のみち)

«「ということは」»

(21) 動かないから樹木は尊い。そう思ってきたのに、逆の発想で俳句ができた。書くってことは面白いものだと思った。 (ルーガ)

(22) 歯切れがよいということは、長い間聞いていても気持がよいものです。声に響きが出ますから、生き生きとしてつい耳を傾けてしまいます。「ことば上手」は仕事上手)

「N トハ Adj モノダ」も主語名詞の表す事物について定義したり、特性を述べたりする場合に用いられる形式である。たとえば、次のように一般・総称的なものを主語として取り上げ、その特性を述べるが、文全体に詠嘆のようなモーダルな意味を帯びることが多い。

(23) いかに味方をあざむくためとはいえ、いたずらにしたって、あの楚々たる千姫さまが、よくも、まあ。女とは恐ろしいものだ。天性のうそつきの化けものだ、と平太郎は痛嘆した。 (魔天忍法帖)

(24) ウマが合わない、ソリが合わない、生理的に受けつけない、どうも虫が好かない…感じ方はさまざまあろうが、とにかく相性がしっくりといかないのだ。そんな相手が身近にいるだけでストレスを受けてしまうのだから、人間とは厄介なものである。

(1分間でやる気を出す200のヒント)

(25) 永禄十二年に義継が義昭の妹を妻にし、翌年に信長と三人で放鷹を行ったりするのは、両者を和解させるための信長の方策であつたと思われる。しかし、義昭と親密になることが、結果的に義継の首をしめることになるのだから、運命とはなんとも皮肉なものである。 (戦乱の日本史)

(26) あれから十年近い歳月が流れ、再び羽生市を訪れ、羽生の街を読むことになるとは、人生とはやはり何があるかわからず、おもしろいものである。 (自然を読む)

「N/節ッテ Adj+モノダ」も「N/節トイウノハ Adj モノダ」「N トハ Adj モノダ」と同じように主語名詞の表す事物の特性を述べる形式であるが、主語表示「って」は「Nがどういものであるか改めて捉え直すという場合に用いられる（丹羽 2006 : 273）」ことが多い標識で、捉えなおした主語に対してそれがどういうものかを再認識するという意味合いが感じられる。

- (27) 「ただ何となく、一人じゃ寂しくて」（中略）「人間って、はかないものね」「ああ、
そうだな」（一千年の陰謀）
- (28) 人間は土壇場になったら強くなる。本当に人間って強いもんですよ。（中略）諦め
ないで頑張っていたら、人間には底力ってあるもんです。（蹴球神髓）
- (29) やっぱり、仕事って、甘くはないですね。そんなところへ実にタイミングよくお手
紙をいただいたので、不覚にもほろりとしてしまいました。お恥ずかしい。でも、
手紙って本当にいいものですね。実感しました。（象と耳鳴り）
- (30) 「料理って、案外難しいものだわ」（Yahoo!ブログ）

これらのタイプの文では、次のように主語が後置されることもある。「形容詞+モノダ」が先に述べられることによって「ものだ」のモーダルな意味がより感じられやすい。

- (31) 「ああ、確かに…。今となっては、自分の体に流れる血がそうさせたのかもしれない。実に不思議なものだ、運命というのは…」（Yahoo!ブログ）
- (32) 「そう。ぼくはね、失礼ながら、フォークソングがこんなに生き残って、今でもリ
クエストアワーでナンバーワンになるとは思わなかった。というのはフォークソ
ングは自分たちの世代の歌だっていう、そういう思い込みがあったからじゃないかな。
不思議なもんですね、歌ってね。」（風と話そう）

無助詞形式の「N ϕ Adj モノダ」は「形容詞+モノダ」文にとりわけ多くみられるわけではないが（0.6%）、次のように一般・総称的なもの（「世の中」「人間」）を主語として取り上げ、それに対する認識や詠嘆のようなモーダルな意味が表現されることがある⁶⁰。

⁶⁰ 丹羽（2006 : 299）では、無助詞は眼前の描写や経験に基づいた叙述に現れ得るとし、無助詞の現場的性格について指摘している（例74、75）。

・（宇宙船から見て）地球 { ϕ /は} きれいだよ。
・京都 { ϕ /は} よかったね。

- (33) まあよくできた噺で、今でも名人上手といわれる噺家さんが時々演りますが…。こういう出来過ぎた話は現実にはないだろう…と思ってたら、あったあった、世の中 実に面白いもんだ。(脳のことなど話してみよう)
- (34) 人間だから、上手いかなかった時だってある筈だ。それでも、何とかやって来たのは、トクになることしかやらない。それに徹底してきたことだ。人間弱いもんだ。義理人情で、動いてしまうことがある。(熱海・湯河原殺人事件)

この節で述べた、「N/節トイウノハ Adj モノダ」「N トハ Adj モノダ」「N/節ッテ Adj モノダ」「N ϕ Adj モノダ」タイプでは、主語の示し方(「というのは」「とは」「って」)のもつ引用して捉えなおすという性質、無助詞の現場的な性格と形容詞の評価的な側面があいまって、評価・認識や詠嘆の意味を運びやすい。

7.2.2.3 「N モ Adj モノダ」「N ナンテ Adj モノダ」タイプ

「N モ Adj モノダ」と「N ナンテ Adj モノダ」タイプは、主語が「も」「なんて」で示される場合である。「も」と「なんて」は上に述べた形式のように主語を提示する際に用いられる標識であるが、ほかの形式と違って、それ自体に何らかのモーダルな意味を含んでいるものである。

まず、「も」の意味用法についてみると、寺村(1991)は、寺村(同:73)で「X モ P」の基本的な意味は、XについてPを、Pと結びつくものとしてX以外のもの(～X)があるという影と対比しながらいうことである(森さんの奥さんも小児科医です。p.73)と述べたうえで、寺村(同:91)において「X モ P」には「単なる基本的な意味、つまり「X以外のものについて同様にP」という影との対比において生ずる意味でなく、特別の表現効果を生じるもう一つの場合がある⁶¹⁾とする。そして、それは「「XがPすることなどありえない、そのXがPするほど……」というような、意外さを背景とする強調効果でもなく、昔から使われてきた「詠嘆」という言葉以外には適当な言い表わしかたがないような情緒的な効果である。(p.91)」と述べている⁶²⁾。「形容詞+モノダ」文は、このような

⁶¹⁾ 寺村(1991)では、「「X モ P」のXが特別の意味特性をもたず、Pもとくに否定的にかぎらないのに、単なる基本的な意味、つまり「X以外のものについて同様にP」という影との対比において生ずる意味でなく、特別の表現効果を生じる」場合について、「特別の対比的、強調的表現効果を持つ場合(弘法も筆のあやまりp.89)」とこの「詠嘆」の表現機能を挙げている。「詠嘆」の意味として使われる例として、次の文を挙げている(p.92、例248、250、251、252)。

- ・「おまえも因果な人だねえ。なにも他人の女房に眼をつけることはあるまいにね」
- ・夜も更けてまいりました。
- ・おれもトシだな。
- ・おまえもアホやな。

⁶²⁾ 『日本国語大辞典』第二版第十二巻では「も」について、「文中の種々の連用語を受ける」とし、「同類

詠嘆を表す「も」とよく結びつく傾向がみられる。

- (35) 窓の外に、海が見える。「いや…降ろして…」海が怖い。にもかかわらず、バスのドアを開ける。下は甲板だ。いつか見た甲板。鼠に食い荒らされた穴。檻樓檻樓の網。マストには、龍の翼手のように羽ばたく帆。これは、あの画の…俊之の画に描かれた…。「そうですよ」車掌が後ろから言った。「なかなか、快適でしょう？ひさしぶりに、上から海を眺めるのもいいものだ」(秘神)
- (36) このジャスミンティーは改めて中国茶の良さを再確認させてくれた。取り皿まで、わざわざ温かく温めてくれている、心遣いがうれしい。たまには静かなレストランでの食事もいいものだ。(Yahoo!ブログ)
- (37) 手挽きのミルを使ってゆったりとコーヒーを楽しむという、のどかな風情が人気を呼び、一時、手動のミルはまたたく間にコーヒー器具屋さんから姿を消してしまった。人数がたくさんだと手挽きは大変だけど、休日に家でゆっくりコーヒーを楽しみたいときは、ゴリゴリと自分の手で豆を挽くのもよいものだ。
(休みの日には、コーヒーを淹れよう。)
- (38) 日本人が昔から培ってきた自然との調和の精神を感じさせてくれます。家族みんなで森にでかけ、新鮮な空気の中、お弁当を広げるのもなかなか楽しいものです。美味いお弁当がさらに美味しく感じられることでしょう。(森からの伝言)

特に「…もいいものだ」の形で用いられることが多く(例 35～37)、「も」で示された328例のうち、81例(24.7%)を占めている。その他、感情形容詞や評価性の強い形容詞(「楽しい」「素晴らしい」など)が多くみられ、文全体が詠嘆の意味を帯びやすい。また、次の例のように主語名詞が抽象名詞や現象名詞で、その程度のはなはだしさに焦点が置かれている場合には、感心や詠嘆の意味がより感じられやすいと思われる。

- (39) 翌日、蓮香が来て、李がまたやって来たことを知ると、「あなたはどうかあつても死にたいんですか」と怒った。桑が、「君の焼き餅も相当なものだなあ」と笑うと、蓮香はますます怒った。(聊斎志異)
- (40) 三十八度五分。和緒先生が私の部屋に到着した時点では、その目もりは既に三十九度をさしていた。三十九度ともなると、さすがに寒気も相当なものである。ベッド

のものが他にあることを前提として包括的に主題を提示する。従って多くの場合、類例が暗示されたり、同類暗示のもとに一例が提示されたりする。類例が明示されれば並列となる。(p.1208)、「主題を詠嘆的に提示する。(p.1209)」、「願望の対象を感動的に提示する。(p.1209)」の三つの用法を提示している。

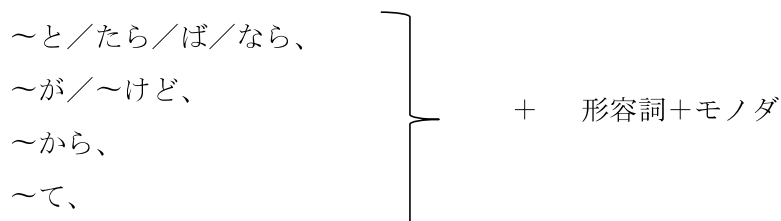
- の中でいくら布団をかぶっても、私の震えはちっとも止まらない。(1DKクッキン)
- (41) 「この支部長や婦人部長は、この遠く離れた奄美から、毎月、船と列車を乗り継いで、東京の本部幹部会に来ているんだ。それだけでも一週間はかかってしまう。その間、仕事もできないし、送り出す家族の苦労も大変なものだ。(新・人間革命)

次は「なんて」で提示する例であるが、「なんて」には「話し手の評価を暗示する用法(山田 1995 : 339-340) ⁶³」があり、主語を「なんて」で提示することによって、主語に対する評価・認識的な意味が感じられる。

- (42) だってジャイ子は、とても綺麗で気だてもよくて、そのうえ聡明という、夢のような女なのよ。そんな彼女を世の男どもが放っておくはずがないわ。いつかきっと、顔も頭も性格も趣味も良くて、適度にワイルドで、金をうなるほど持つてる男に熱烈に求愛されて結婚してしまうにちがいない。くっそー、友情なんてもろいものだぜ。(妄想炸裂)
- (43) 「もうしばらく、ここで養生させてください」「いやあよ」姉はかぶりを振った。「あんたたちがここにいたら、わたしまで捕まっちゃうわ」こうなると女なんて薄情なものである。我が身可愛さに、負傷者をぜんぶ家の外へ叩き出してしまった。(アルファルファ作戦)
- (44) 「おまえも案外、センチメンタルなんだなあ。見直したよ」すると、新次は良吉に肩をぶっつけてきた。「いいかい？これは秘密だぞ」「わかった」(中略)「あのにわか雨のときのおれと同じさ」「男なんて弱いものさ」(二年二組の勇者たち)

7.2.2.4 「節+Adj モノダ」「節ナンテ Adj モノダ」「節トハ Adj モノダ」タイプ

「節+Adj モノダ」「節トハ Adj モノダ」「節ナンテ Adj モノダ」タイプには、次のような下位のタイプがある。



⁶³ 山田 (1995 : 337-340) では、ナド、ナンカ、ナンテの意味的特徴として、「例示・同類を表す用法(ナンテにはこの用法がないp.338)」「叙述の弱め／和らげを表す用法」「話し手の評価を暗示する用法」「いづれにも分類しがたい用法(提題的用法)」の四つを挙げている。「話し手の評価を暗示する用法」には低い評価を表す場合と高い評価を表す用法がある (pp.339-340) と述べている。

～トハ、
 ～ナンテ、

} + 形容詞＋モノダ

句や節を提示する形式（条件節（「～と」など）、理由節（「～から」）、～ガ節（「～が／けど」）、～テ節など）は、本研究では「無表示」形式として扱ったものである。「無表示」形式は、第4章で述べたように従属節をもって特性の持ち主を提示している例であり、このような場合は、「目が見えないと、それは結構、不便だぞ」「こんなところにいたら、それは危ないわ」「石油を使ってない石鹼を作ってみたかったんだけど、それはけっこう難しいなあ」のように、「それは」（波線）が省略されている。これは「と」「たら」「けど」などによる節で提示することで、その特性の持ち主が何かということが把握できるため、特に主語が必要ではないものであった。この形式は特に形容詞述語文（「ものだ」のついていない形容詞述語）によくみられる形式であるが、文末が「～ものだ」になると、それ以上の意味が感じられるようになると思われる。すなわち、従属節で述べられた事柄に対して、形容詞の表す評価的な側面だけでなく、それを認識する話し手の態度が表現されるのである。

≪「条件節」≫

(45) この**makePath**のような関数を作っていると、まるでパズルを解いているようで楽しいものです。

（ゼロからはじめるVisual Basic）

(46) 人間であってもそこにいるかぎり規則に従わなければならない。華美な装飾品を身に帯びないこと、整髪しないこと、歌舞音曲を慎むこと、娯楽（例えば闘鶏）に打ち興じないことがその根幹である。現在ではラジオをロングハウスでつけてはならないことにもなっている。これらの禁忌は大したものではないようにみえるが、**現実にロングハウスで暮らしてみると意外に不便なものである。**

（死の人類学）

≪「～ガ節」≫

(47) またこのあと、ハイフォンに行ったときには残留日本兵のグループにも会うことができた。十数人のグループの頭株が「井出」と名乗る人物で部屋には軽機と小銃が銃架に掛けてあった。**国民党軍の大尉だと自称していたが怪しいものだ。**自分が口を利けば将校待遇であなたを迎えると誘われたが話がうま過ぎる。

（南洋学院）

≪「理由節」≫

(48) 「人間は生きていかなければならない。そのためにはどんなことをしたって大抵のことは許されると俺は思っている。だから、豊の体も心も汚れてなんぞはいない」

「そうかなあ」豊はふわりと天井を見つめて呟いた。長い睫の先が小刻みに震えていた。「第一、豊は誰にも迷惑なんかかけてないじゃないか。自分の力だけでちゃんと生きてるんだから立派なもんだ」
(殴られ屋の女神)

- (49) 「というより、おれの釣り好きはジイサマからの隔世遺伝かもしれないな。川釣り専門で、年に何回か休みをとっては、世界中の川を釣り歩いていたというから優雅なもんだ。その土地その土地で買い集めたものが、いつのまにかこんなに溜まってしまったというわけさ」
(満月の夜、モビイ・ディックが)

《「動詞＋テ形」》

- (50) 「おうちの方おられますか」と聞くと、おばあちゃんが出てこられました。(中略)
用件をお話ししてから、三人の子どもたちの、両親のことをたずねると、お父さんもお母さんも、とてもよい職に就いていて、立派なもんだとさんざん自慢話をされました。
(ADHDの恭平くん)

次のように、事柄の内容を「これは」で再提示する例もあるが、これと比べると上の例では、従属節の事柄の内容を指示詞などで主語として再提示しないことによって、「ものだ」の認識、詠嘆の意味が際立っているように思われる。

- (51) 陳腐というので思い出したが、今時もし次のような取扱いを受けるのが養子であるとし、押しかけ婿（むこ）を気取るものがあるとすればこれは相当なものである。
即ち養家先へ行ったが十年経っても二十年経っても殆ど入籍して貰えない。

(舞楽而留ラプソディー)

また、条件節、理由節、～ガ節、～テ節のほかに、「～とは」「～なんて」によって句や節を提示する場合にも同じような特徴がみられる。「形容詞＋モノダ」文では、「とは」で示された 105 例のうち、名詞が 100 例 (95.2%)、句や節が 5 例 (4.8%) で、「なんて」で示された 33 例のうち、30 例が名詞 (89.7%)、3 例 (10.3%) が句や節であり、このうち名詞に接続している例については前節で述べた。「～とは」「～なんて」で句や節を取り上げる例をみると、用例数は少ないが、上の無表示形式のように、提示された出来事や事柄の内容に対する詠嘆や認識態度が感じられる。

《「～とは」》

- (52) 今度この青年が訪れるとき、自分の偽の生命は終わるのだろう。それが待ち遠しいのか…それとも、恐れているのか。このような生でも、失うのが惜しいとは奇妙なものだ。
(そして、世界が終わる物語)

- (53) 「しかし、どんなもんかな。いくら襲ってこないとはいえ、すぐ外を死霊が徘徊しているとは気持ち悪いものだ」芹也が座っているのも布団の上だ。 (攻撃天使)
- (54) 同じ十五歳なのに住む環境に寄ってここまで性格の違いが出るとは恐ろしいものだ。 (Yahoo!ブログ)
- (55) また、少し動くだけでも痛い。手術後の痛み止めのための処置なのに、現在、痛み原因になっているとは皮肉なものだ。 (ガンを生きる)
- « 「～なんて」 »
- (56) 菅平のペンションに泊まって、気持ちの良い秋の一日を歩き通しました。四阿山の山頂では、その土地のグループがにぎやかに宴会の最中。山頂で浮かれられるなんて、ぜいたくなもんです。根子岳の山容は美しく、十分堪能しながら一步一步近づいていける、このコースは素晴らしいと気に入りました。 (明日のおもいで)
- (57) 庭の落ち葉をためているゴミ袋に入っていた。その頃2、3日は庭に出没してうろうろしている姿が見受けられた。タヌキが民家をうろうろするなんて不思議なものだ。背中に何か怪我をしているような傷が見られた。 (Yahoo!ブログ)

『日本国語大辞典』第二版の「とは」と「なんて」についての定義をみると、第九巻では「とは」について、一つ目には「説明・思考・知覚などの対象やその内容を取り立てていうのに用いる。(p.1299)」とし、二つ目には「意外・不満・感謝などの感情を引き起こした事柄を取り立てていうのに用いる。(p.1299)」と記述している。また、第十巻では「なんて」について、副助詞「など」に格助詞「と」のついた「などと」の変化したものとし、「問題になっている事物・事態が基準を逸脱しているという評価を表し、また、引用を修辭的にぼやかすのに用いられる。(p.341)」と述べている。このように、「とは」「なんて」には話し手の評価を暗示する性質があり、それとあいまってモーダルな意味が表されやすい。

以上で述べたように、「節+Adj モノダ」「節トハ Adj モノダ」「節ナンテ Adj モノダ」では、特性の持ち主が句や節の形で提示され、それに対する話し手の認識態度が表現されている。「ものだ」はこのように事柄の内容が名詞ではなく句や節の形で提示される環境において、よりモーダルな意味に解釈されやすいと言えそうである。

7.2.2.5 「Adj モノダ」タイプ

「Adj モノダ」タイプと次節で述べる「節+モノダ」タイプは、7.2.2.1 節～ 7.2.2.4 節に挙げた文とは違って特性の持ち主が文中に現れていないタイプである。この二つのタイプでは主語と「形容詞+もの」の間の主述関係が不明確であり、ここでの「ものだ」は典

型的なモデルな意味を表す形式になっている。また、＜表 22＞の用例数をみると、1,395例で全体の 26.6%を占めていて、「NハAdjモノダ」タイプの次に多くみられる。

まず、「Adj モノダ」タイプをみると、このタイプは主語が文中に明示されず、「Adj モノダ」の形で述べる文である。この場合、先行する文脈に述べられている何らかの事柄や外的状況を指して述べる場合が多く、その事柄の内容に対する詠嘆の意味が表現されている。たとえば、次の例では先述のある空間の風景（「啄かれた黒い土から春の陽炎だけがゆらゆらと立ち昇っている」という風景）に対して、「のどかなものだ」と感心する気持ちを述べている。

- (58) 覗いて見ても別に何も珍しいものもない。啄かれた黒い土から、ゆらゆらと立ち昇っているのは、春の陽炎だけである。「—のどかなものだ」と思わず呟いて、ぼんやりと眺めていると、「おい、おい、長閑なのは君だぜ、そら—ここへびしゃりと、王手！」と、いきなり膝をどやされた。（達磨峠の事件）

次の例では、「今は歩いてものぞいても時計がない」という現在の外的状況、「よいところは忘れてしまって不満のあるところだけ覚えている」ということに対する話し手の評価・認識によって、文全体が詠嘆の意味を帯びている。

- (59) 「通り」から「時計」が見えなくなって、久しい。「今何時だろう？」と思ってから、2～3歩も歩けば、通りからのぞき見ができる位置に「時計」が掛けてあるのが「店」のジョーシキ、街のジョーシキであった。それが今は、歩いて歩いても、のぞいてもものぞいても、時計は、なし。味気ないモンである。
（思春期・生きて在る日日）

- (60) でも逆に、引用されているのが、いやな、気に入らない文章だったりすると、「あ、これは俺の書いた文章だ」と必ず一目で見分けられる。どうしてかはわからないのだが、いつもそうだ。よいところはだいたい忘れてしまって、不満のあるところだけよく覚えている。なんとなく不思議なものだ。（翻訳と日本文化）

また、次の例ではある事件に対して、「ひどいものだ」と評価しており、その場でのマイナス評価による話し手の詠嘆が感じられる。

- (61) 《知事の秘書、公園で意識不明で見つかる。警察は不審な通報者を捜査中。（中略）》オリバーが執務室でこの記事を読んでいると、ピーターが新聞を手に、急ぎ足で入

ってきた。「これを見ましたか?」「ああ。実に…ひどいもんだ。朝からずっと、各新聞から電話が入ってきている」
(氷)

このようなタイプでは、事柄の内容だけでなく、人の様子や態度が詠嘆の対象になる場合もある。次の例では、「サンディー・ブルーが誘いかけるように腰を振っている様子」「志木子ちゃんがよく頑張ってひとりでここまで匠くんを育てて来たこと」に対して、それぞれ「うまいものだ」「立派なものだ」と評価を述べており、話し手の詠嘆が感じられる。

(62) 「でも、あれ見て。サンディーよ」わたしたちからは離れた場所にあるお立ち台で、サンディー・ブルーが誘いかけるように腰を振っていた。紫煙の向こうに、かなりの数の男たちが彼女に見とれているのが見えた。体になにを塗ってるの? ショートニング? 肌が輝いている。エルヴィスのそっくりさんの恋人直伝の技? もしそうなら、うまいものだ。
(クッキング・ママの鎮魂歌)

(63) 「いや、ほんとに、大変だったんだね。その若さで五歳の子供だから、それなりの事情はあると思っていただけれど、うん、ちょっとびっくりした。でも、ほんとえらいよ、志木子ちゃん、よく頑張ってひとりでここまで匠くんを育てて来たね。いや、まったくりっぱなもんだよ」まさかそんな褒め言葉を掛けられるとは思ってもいなくて、志木子は思わず涙ぐみそうになった。
(小説新潮)

次の例では、人の様子や態度（ここでは「学校に行かないでゆっくりしている様子」「警察を呼ぶという態度」）に対して、「のんきなものだ」「冷たいものだ」とマイナスイメージの評価を述べている。

(64) 「ああ、おじさま」彼女もすぐ声でわかったらしい。「まだ学校へ行かないのか」「今日は午後からでいいんです」「のんきなものだな。それじゃあ、今何してるの?」「今? シャワーで髪を洗ったところ」
(雲から贈る死)

(65) 「会いたくて、ちょっと寄ってただけですよ」「じゃ、帰って下さい。警察を呼びますよ」「おやおや」と、佐原は肩をすくめた。「冷たいもんだな」「自業自得でしょう」
(二階の沈黙)

以上で述べたように、「Adj モノダ」タイプでは前後の文脈に現れている事柄の内容に対して、その場での評価や感心する気持ちを述べる事が多く、「もの」は述語名詞性を失い、モーダルな意味を表す形式へ移行している。本来モーダルな意味というのは、事柄に対す

る話し手の認識態度を示すものであり、それがこの構文的な形として反映されていると言えそうである。

7.2.2.6 「節＋モノダ」タイプ

「節＋モノダ」タイプは、前節で述べたように主述関係が不明な文である。本来述語名詞としての「もの」は主語名詞の表す事物の上位概念の名詞として用いられるものであるが、それに当たる主語名詞を特定できない場合である。つまり、このような文の中では、主語と「形容詞＋もの」の間の特性の持ち主と特性という関係が崩れ、事柄の内容を表す節全体に「ものだ」が接続している形になっているのである。このような文において「もの」は、前節で述べた「Adj モノダ」タイプと同様に、述語名詞性を失い、モーダルな形式へ移行していると言えそうである。

このタイプに属するのは、たとえば次のような文である。次の例では、「落ち込みがはげしいもの」「眠いもの」「多いもの」に当たる主語名詞が見つからず、「「できる人」ほど失敗すると落ち込みがはげしい」「小学校から中学にかけての男の子というものは最初は体力がなく学校通いで精一杯で成長期には信じられないほど眠い」「目標が遠くにあると案外うまくいかなることが多い」という事柄全体（囲み線）に「ものだ」が接続している形になっている。

- (66) 「できる人」ほど、失敗すると、落ち込みがはげしいものです。仕事や人間関係をバツグンのセンスでこなすのだけれど、一度落ち込むとなかなか立ち直れない人ですね。 （営業のトッププロが教える「その一言」で相手の気持ちを動かす技術）
- (67) けれど、小学校から中学にかけての男の子というものは、最初は体力がなく、学校通いで精一杯で、成長期には信じられないほど眠いものだ。両親としては、起こしても起きないほどぐっすり息子が寝入ってしまったら、しかたがない、自分で散歩に行くしかなかったのだろう。 （犬と山暮らし）
- (68) ゴールから逆算して日にちやスケジュールを調整していたとしても、目標が遠くにあると、案外うまくいかなることが多いものだ。そういうときは、手をつけはじめる前に、仕事をできるだけ細切れにしてみるといい。

（仕事ができる人のちょっとしたコツ400）

また、次の例では特定の時間に限って起こる事柄の内容に「ものだ」が接続している。このタイプでは、例（71）（72）のように「節＋モノダカラ」の形で、原因・理由として用いられることもよくみられる。

- (69) 文書を印刷するためのプリンターも、ずいぶん安くなって普及した。しかし、なかには、買ったのはよいが、実際にはほとんど使っていないという場合もあるだろう。年賀状を作ろうとして思い返すと、このまえ使ったのは去年の年賀状作りだった、などということも。そんなときはとくに、プリンターの調子が悪いものだ。

(パソコン力を高める)

- (70) 子どもが小さい頃には、休みになるとどこかへ連れて行けとうるさいものです。家族で遊園地に行ったり、キャンプに行ったり、そういったお金が、子どもが小学校の高学年から中学以上になると、ほとんど出なくなってしまいます。

(「勝ち組」に成る！ライフプラン)

- (71) 「田園調布のお邸を出られたのは何時ごろ」「七時ちょっと前でした。わたしはあまりいらいらするのが嫌いだし、ちかごろは交通渋滞がはげしいものですから」

(病院坂の首縊りの家)

- (72) 海外の人々がどんな気持ちでニュー・イヤーを迎えるのかをこの目で確かめたいのです。本当はクリスマスにも行きたいのですが、年末にかけては仕事が忙しいものですから…。

(上流社会のマナー入門)

以上のように、主述関係が崩れ、「もの」に当たる主語名詞を特定できない場合には、「もの」は述語名詞としての機能を失い、モーダルな意味を表す形式へ移行する。

7.2.3 7.2節のまとめ


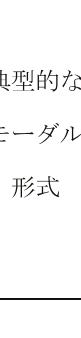
7.2 節では、「形容詞＋モノダ」文の文中での特性の持ち主の示し方を調査し、「ものだ」のモーダルな意味とのかかわりを具体的な構文的な形として示した。

「形容詞＋モノダ」文には「もの」が述語名詞として機能する典型的な文のタイプとモーダルな意味を表す形式と言える典型的な文のタイプがあり、その間にはさまざまなタイプが存在する。中間領域にはより述語名詞的な「もの」とよりモーダルな形式的な「もの」が混在しており、述語名詞としての「もの」なのか、モーダルな意味を表す形式なのか、二つの境界線をひくのが難しい場合もある。

全体として、述語名詞としての「もの」の場合には特性の持ち主が名詞（「こと」や「の」で名詞化されたものも含む）で示される傾向があるのに対して、典型的なモーダルな形式に近くなると、特性の持ち主が名詞ではなく句や節で示されることが多く、句や節で述べられる事柄の内容に対する認識態度や詠嘆が感じられる。文中で特性の持ち主をどのような形で取り上げるか（名詞か句や節かなど）、その示し方はどのような性質をもつのかなどさまざまな要因がかかわって、「もの」はモーダルな形式へ移行すると思われる。以上で

述べた内容をまとめると、＜表 23＞のようになる。

表 23 : 「形容詞＋モノダ」文のタイプ別のまとめ

「形容詞＋モノダ」文のタイプ		具体例	意味
名詞	「N ハ …… Adj モノダ」 (「N ガ …… Adj モノダ」)	「この絵はホッペマの作品の中で最も劇的なものである」 (「時間が貴重なものだとかわかってくる」)	典型的な 述語名詞 
	「N/節 トイウノハ …… Adj モノダ」	「やはりプロというのはすごいものだ」	
	「N トハ …… Adj モノダ」	「女とは恐ろしいものだ」	
	「N/節 ッテ …… Adj モノダ」	「人間って、はかないものね」	
	「N ϕ …… Adj モノダ」	「世の中実に面白いもんだ」	
節	「N モ …… Adj モノダ」 「N ナンテ …… Adj モノダ」	「たまには静かなレストランでの食事もいいものだ」「男なんて弱いものさ」	典型的な モーダル 形式 
	「節＋Adj モノダ」 「節 トハ …… Adj モノダ」 「節 ナンテ …… Adj モノダ」	「この makePath のような関数を作っていると、まるでパズルを解いているようで楽しいものだ」「このような生でも失うのが惜しいとは奇妙なものだ」「山頂で浮かれられるなんてぜいたくなもんだ」	
	「Adj モノダ」タイプ	「実にひどいもんだ」「立派なものだ」	
	「節＋モノダ」タイプ	「目標が遠くにあると、案外うまくいかなくなることが多いものだ」	

7.3 「形容詞＋コトダ」文

この節では、「形容詞＋コトダ」文において特性の持ち主がどう提示されるかに注目し、述語名詞としての「コト」からモーダルな意味を表す形式までの分布をさぐる。

7.3.1 「形容詞＋コトダ」文の主語の示し方

「形容詞＋コトダ」文の主語の現れ方と用例数を示すと、次のようになる⁶⁴。

⁶⁴ 「形容詞＋コトダ」文の用例5,818例のうち、重複している例や「～ふうなことだ」の例（「ああいうふうに陰しい山であるかの如き幻想を起こされることも文字の魔力というふうなことだ~~な~~あと、(Yahoo!ブログ)」）、前置きの文（「残念なことですが、これも運命です（多元宇宙バトル・フィールド）」202例）の計249例を分析の対象から除外した。

表 24 : 「形容詞＋コトダ」文の主語の現れ方と用例数

「形容詞＋コトダ」文	用例数	割合(%)
主語が文中に現れる場合 ⁶⁵	5,155	92.6
主語が文中に現れない場合	414	7.4
合計	5,569	100.0

＜表24＞の総用例数をみると、“主語が文中に現れる場合”が92.6%を占めているのに対して、“主語が文中に現れない場合”は7.4%である。「形容詞＋モノダ」文ではその割合が73.4%（“主語が文中に現れる場合”）対26.6%（“主語が文中に現れない場合”）であり、用例数の分布において異なった特徴をみせている。

上段の“主語が文中に現れる場合”の例を対象にさらに「形容詞＋コトダ」文の主語の示し方を調査してみると、その分布は＜表 25＞のようになる（「その他」の示し方を除いて、用例数と割合の高い順に示した）。

表 25 : 「形容詞＋コトダ」文の主語が文中に現れる場合の示し方

示し方	「形容詞＋コトダ」文	
	用例数	割合(%)
は	<u>3,789</u>	<u>73.5</u>
というのは類（「ということは」「というものは」など含む）	366	7.1
が（「というのが」類を含む）	320	6.2
も（「だって」1例も含む）	205	4.0
無表示（条件節／が節など）	167	3.2
って	69	1.4
なんて（「なんか」2例／「なんぞ」1例含む）	65	1.3
φ（無助詞）	48	0.9
とは	46	0.9
というのも類（「ということも」「というものも」など含む）	37	0.7
その他（「といえは」など）	43	0.8
合計	5,155	100.0

⁶⁵ 「形容詞＋モノダ」文と同じく、当該の文に主語が省略されていても、前後の文脈に主語相応の内容が現れている場合はここに含まれている。

・四十年もシガレットを吸い続けて、肺ガンで死んだってことは、自殺ってことじゃないかね。恐ろしく罪深いことだよ。（ニコチアナ）

＜表 25＞にうかがえるように、「形容詞＋コトダ」文は「形容詞＋モノダ」文と同じく、主語を「は」で提示する場合は“主語が文中に現れる場合”について言えば、約 73.5%で高い割合をみせた。「というのは」類（「ということは」「というものは」など）、「とは」まで含めると、「は」で示される「形容詞＋コトダ」文の用例は、約 81.5%で極めて高い。この結果からみると、「形容詞＋コトダ」文も基本的に「主題・解説」という提題構文の形式を取って、主語の恒常的な特性を述べると言えよう。「は」で示されないものの場合には、「も」（「というのも」類も含む）で示される例（4.7%）や「って」（1.4%）「なんて」（1.3%）無助詞（0.9%）、そして無表示形式（3.2%）もみられる。これをもとに、＜表 24＞の“主語が文中に現れない場合”を含めて文のタイプに示しなおすと、次のようになる。

表 26：「形容詞＋コトダ」文のタイプ

「形容詞＋コトダ」文のタイプ		用例数	割合(%)
主語が文中 に現れる 場合	「N ハ …… Adj コトダ」	<u>3,789</u>	<u>68.0</u>
	「N ガ …… Adj コトダ」（「というのが」類も含む）	320	5.7
	「N/節トイウノハ …… Adj コトダ」	366	6.6
	「N モ …… Adj コトダ」 （「というのも」類「だって」も含む）	242	4.3
	「N/節ッテ …… Adj コトダ」	69	1.2
	「N/節 φ …… Adj コトダ」	48	0.9
	「N トハ …… Adj コトダ」	18	0.9
	「節トハ …… Adj コトダ」	28	
	「N ナンテ …… Adj コトダ」	10	1.2
	「節ナンテ …… Adj コトダ」	55	
	「節＋Adj コトダ」（無表示形式）	167	3.0
	その他の示し方	43	0.8
文中に現れ ない場合	「Adj コトダ」	<u>414</u>	<u>7.4</u>
	「節＋コトダ」		
合計		5,569	100.0

＜表 26＞の用例数をみると、主語を「は」で示す「N ハ Adj コトダ」タイプが全体の 68%を占めていて、「形容詞＋コトダ」文はこのタイプに偏っている。

「N ハ Adj コトダ」タイプは次のような例であるが、ここでの「こと」は主語である「こ

のような行動」の上位概念の名詞として述語に用いられており、典型的な述語名詞として機能している。

(73) ストックの面で国民がまず充実しようとしているのは、子供の教育資金や老後のための貯えとしての貯蓄である。このような行動はしごく自然なことである。

(経済白書)

これに対して、「Adj コトダ」タイプの例 (74) では主語が文中に現れておらず、「ことだ」には何らかのモーダルな意味合いが感じられる。また、この二つの間にはより述語名詞的な「こと」とよりモーダルな形式に近いものなどさまざまなタイプが混在していると思われる。

(74) 警視庁では秘密にしていたが、深川に発生したペストが、ゴリラ男爵のしわざであるということは、いつか世間に知れわたり、日本じゅうは恐怖のどん底にたたきこまれた。ゴリラ男爵がペスト菌をバラまいている！おお、なんという恐ろしいことだ。いまに日本じゅうペスト患者で埋まってしまうのだ。

(怪獣男爵)

以下では、「こと」が典型的に述語名詞として機能するタイプからモーダルな意味を表す典型的なタイプまで、文のタイプ別に説明する。

7.3.2 「形容詞+コトダ」文のタイプ

7.3.2.1 「N ハ Adj コトダ」タイプ (「N ガ Adj コトダ」)

「N ハ Adj コトダ」タイプは、主語名詞の表す事柄の特性を述べる文で、「こと」は述語名詞としてふるまっている。次の例をみると、「こと」は「今のジョージの指摘」を指して、その特性を述べている。

(75) 「最善をしたは誤りで、最善を尽した、が正しい」賢治はそう訂正し、「だが、今の、ジョージの指摘は非常に大切なことだ、日本兵は捕虜になることを、死に値する恥辱と叩き込まれているから、決して不名誉でないことをよく話してやることだ」と云い、尋問前の捕虜の気持を落ちつかせることの大事さを教えた。(二つの祖国)

次の例 (76) は「今の日本の不幸」の具体的な内容を示す同定文⁶⁶で、文末の「こと」

⁶⁶ 「同定文」について、佐藤 (1998 : 3) では「主語にさしだされる《ことがら》の範囲と述語にさしだされる《ことがら》の範囲との一致を確認して述べている」文を「同定文」と名づけている (正造と残留

は述語で差し出される事柄の内容を名詞化する機能を果たしている。

- (76) 「今の日本の不幸は、民衆を幸福にし、恒久平和を建設していくための、確固とした理念、哲学がないことです。生命の尊厳を裏付ける哲学もなければ、慈悲の思想もない」
(新・人間革命)

次のように、一般的な出来事名詞や抽象名詞を指して特性を述べたり、句や節を名詞化して、その表す内容の特性を述べたりする場合もある。

- (77) 陶芸することは自己の発見であり、奥が深く、広い知識が要求される。(中略) 思想や哲学は、制作の上で大変大事なことである。(中国新聞)
- (78) 「君の云うように医学者にとって、学問と研究はかけがえのない大切なことだ、しかし、その学問よりさらに大切なものは、患者の生命だ、(後略)」(白い巨塔)
- (79) そのなかでも、着ることよりも、まず食うことが一日片時でも欠ければ、これで死んでしまうのではないかと思われる。衣食は、人生において最も大切なことであるから、よくよく考えるべきことだ。(蓮如)
- (80) 小川の辺、水鳥もいる、赤や黄色に色付いたモミジ、ブナ、ウルシの葉…。水も流れている…先程まで見えていなかったものが目に入る…。美しい。生きていることはすばらしいことだ。(飛行機カモメ)
- (81) 「地上には再び平和が戻る。だのに⁶⁷私はここを去らねばならない。悲しいことだ。死ぬのは辛いことだ」(世紀末の肖像)

次のように当該の文においては主語が省略されているが、主語相応のものが前の文脈に述べられていて想定できる場合もこのタイプに入れられる。この例は、「形容詞+コトダ」文(「…難しいことだ」)では省略されているが、「自分を持つこと」が主語に相応すると判断され、「自分を持つことは難しいことだ」と言い換えることができる。

- (82) 確かに、自分を持つことは大切です、しかもいちばん難しいことだといってすらいいでしょう。(鎖国してはならない)

民の何よりの目標は、訴訟で県に勝つことであった。p.2例①、下線と囲み線は原文のもの)。また、新屋(2009: 33)では「主語の指示対象と述語の指示対象とが一致することを表す」ことを「同定」と呼んでいる(「アノ子ハ息子ノ太郎ダ」p.33、表1)。

⁶⁷ 例文中の「だのに」は用例の本文のままである。

また、「Nハ」ではなく、「Nガ」である「NガAdjコトダ」の形式もあるが、7.2.2.1節にも述べたように「NハAdjコトダ」に言い換えられるため、文のタイプとしてはここに入れられる。たとえば、次の例では「自由であることは人がよりよく生きるために大切なことである」「西洋的な和声を導入することによって日本音楽を「近代化」することはそれを国際的に通用するものにするために必要なことだ」のように言い換えられる。

(83) 人がよりよく生きるためには、自由であることが大切なことである。

(統合的ショート・プログラムの展開)

(84) 吉田も杉浦も、日本音楽に和声が欠けていることを欠陥と考え、西洋的な和声を導入することによって日本音楽を「近代化」することが、それを国際的に通用するものにするために必要なことだと考えていた。(日本文化モダン・ラブソディ)

以上で述べたように、「形容詞+コトダ」文は主語名詞の表す事物の恒常的な特性を述べることを基本としており、「NハAdjコトダ」は述語名詞としての「こと」の典型的な形式である。「形容詞+コトダ」文では「NハAdjコトダ」が3,789例(68%)で、「NガAdjコトダ」の320例(5.7%)を含めると、全体の73.7%を占めており、「NハAdjモノダ」より述語名詞としての「こと」の割合が極めて高い。

7.3.2.2 「N/節トイウノハ Adj コトダ」「N トハ Adj コトダ」「N モ Adj コトダ」タイプ

「N/節トイウノハ Adj コトダ」「N トハ Adj コトダ」「N モ Adj コトダ」タイプも主語名詞の表す事物の特性を述べるのによく用いられるタイプである。次の例は「N/節トイウノハ Adj コトダ」「N トハ Adj コトダ」タイプの文であるが、ここでの「こと」は主語の表す事柄を指していて、述語名詞としてふるまっている。

« 「ということは」 »

(85) たぶん大きな夢のキッチンを実現することで、生き生きとすることができたのです。

夢があるということはすばらしいことです。(山の中の幸福なキッチン)

« 「っていうのは」 »

(86) 「死ぬっていうのは本当に虚しいことですよね。たとえば今こうして喋っているけど、何時間かあとには車に轢かれて死んじゃうかもしれない」(アヤツジ・ユキト)

(87) 「若い頃はお茶やみそ汁の味なんて、どうでもよかった。それがこの頃、みそ汁いっぱい、お茶いっぱいになりはじめてね。年をとるっていうのは、往生際の悪

くなることかもしれない、あぶないことだ」と。(老いの万華鏡)

«「というものは」»

- (88) 知識を広げ、世の中のことがよく分かるようになる学習というものは、本来、人間にとって楽しいことである。(「読書算」はなぜ基礎学力か)

«「とは」»

- (89) 愚痴とは愚かなことである。真理を知らず盲目になっていることである。心が愚痴におおわれると、心の目が見えなくなる。(仏教の来た道)

「N モ Adj コトダ」タイプをみると、7.2.2.3 節では「N モ Adj モノダ」は「も」のもつ詠嘆の意味によって文全体が詠嘆の意味を帯びやすいと述べたが、「N モ Adj コトダ」ではそのようなモーダルな意味よりも事柄を表す「こと」の意味のほうが強い。「も」は「同類のものが他にあることを前提として包括的に主題を提示する。従って多くの場合、類例が暗示されたり、同類暗示のもとに一例が提示されたりする。類例が明示されれば並列となる(『日本国語大辞典』第二版第十二巻、p.1208)」形式である。「形容詞+コトダ」文はこのような主題を提示する用法の「も」が多くみられ、主語の特性を述べる文であると言えそうである。

- (90) 人生を豊かに生きるには、自分を大切にすることが何より大事なことであろう。それは、時間を大切にすることである。仕事だけに時間を使うのではなく、自分自身が満足できるものを見いだしていくことも必要なことだ。

(いま家族しか子供を守れない)

- (91) 具体的にはいろいろありますが、ウォーキングが一番始め易いと思います。毎日、いつもより早めに一時間ほど続けて歩きます。これで立派な有酸素運動です。自転車に四十分以上乗るのもいいことです。(Yahoo!知恵袋)

- (92) 大事な人や物が、知らないうちに自分の手から離れていかないように、心の優しさを大切にしましょう。なんでも自分の手柄にしようとするのはやめて、たまには人をほめるのも大事なことです。(CanCam)

7.3.2.3 「N/節ッテ Adj コトダ」「N/節 φ Adj コトダ」タイプ

「N/節ッテ Adj コトダ」と「N/節 φ Adj コトダ」タイプは、事柄の内容を表す句や節を「って」で直接取り上げたり、前後文脈の事柄の内容を指示詞で捉えなおしたりするタイプである。

まず、「N/節ッテ Adj コトダ」をみると、次の例では「生きている」をそのまま引用し、

その特性を述べているが、「素敵な」という形容詞の評価的な側面によって事柄に対する評価的な態度が感じられる。

- (93) 坂道を下ろうとするとエルモが「ワン」と一つ吠えた。ふと空を見上げると一番星が光っていた。一生きているってステキなことだなあ。まだ死にたくはないなあ。ゆっくり坂を下りていくと、遠くの景色が見えてきた。(神様がくれたプレゼント)

上の例のように事柄を句や節で取り上げるのではなく、前の文脈に述べられた事柄の内容を指示詞であらためて捉えなおすこともよくある。

- (94) 「生まれて初めて見る桃の花でしょう」そうかもしれない。おれがこの眼で桃の花を見たのは、確かにこれが初めてだ。「これから、ナオはたくさんのことを体験していくはず。それって、素晴らしいことだと思う。たとえ実体はなくても、あなたはあなた。ドームにこもりっぱなしになんてならないで」(網にかかった悪夢)
- (95) 先生はユニークな文章を好んだ。「書き出しで、読む人のところをつかみなさい」それが先生の教えで、会話文で始めたり、気を引くような書き出しで始める作文をホメた。たったひと言だけれど、そのひと言が私の文章を書く時のベースになっている。これってスゴイことだ。小学生の時に言われたことが、そのまま何十年もここに残っていて私の書くものに影響を与えているのだから。(Yahoo!ブログ)

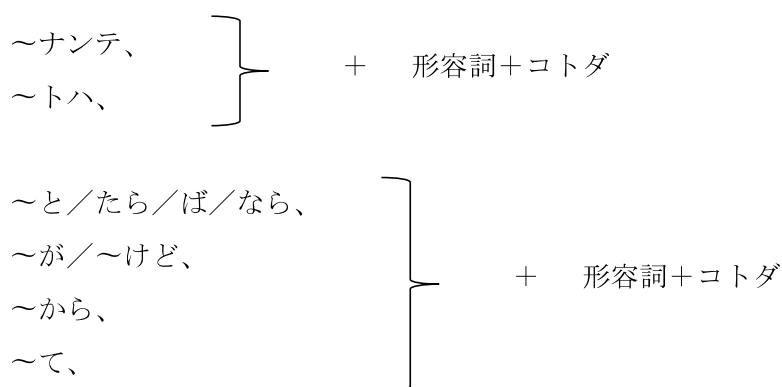
このように前後の文脈の事柄を指示詞で捉えなおす場合、「って」ではなく、無助詞で提示する例もみられる。これはその場で述べたことを捉えなおすという「って」や無助詞の現場的性格を示すものであり、それによって「N/節ッテ Adj コトダ」と「N/節 φAdj コトダ」には話し手の評価的な態度が表されやすい。

- (96) 「とにかく、そのへん起こっちゃったんだから仕方ないだろ、あとは向こうへいつてからだ」「でも、でもでもお」根回しくんの台詞をリフレインして、アーノルド。
「なんか、それ、すっごくむちゃくちゃなことですよ。浮遊ツールならともかく、ちゃんと管理されているツールがきれいすっぱり消えちゃうなんてエ。ちょっと信じられないってことですよ」(消えた十二支の謎)
- (97) 息子は責任感のある子だし、息子を運転の練習のために車で送り迎えしなくてよくなれば、大いに楽になる。それ自体皮肉なことだ。息子に車で走らせるために、車に乗せて練習場に連れていくなんて。(木曜日の朝、いつものカフェで)

以上の「N/節ッテ Adj コトダ」と「N/節 φAdj コトダ」タイプでは、文全体に話し手の感情や評価を帯びることがある。しかし、それは「って」と無助詞の性質と形容詞の評価的な側面によるものであり、「こと」が主語の表す事柄の内容を受けるという面では、述語名詞性が生きていると言えそうである。

7.3.2.4 「節/N ナンテ Adj コトダ」「節/N トハ Adj コトダ」「節+Adj コトダ」タイプ

「節/N ナンテ Adj コトダ」「節/N トハ Adj コトダ」「節+Adj コトダ」タイプは、7.2.2.4 節で述べたように、次のような下位のタイプがある。



このタイプには、「～なんて」「～とは」で示す場合と従属節で提示する場合がある。まず「～なんて」「～とは」で示される主語をみると、「～なんて」では 65 例のうち、10 例が名詞（「こと」や「の」で名詞化されたものも含む）で、55 例が句や節であり、「～とは」では 46 例のうち、18 例が名詞で 28 例が句や節である。特に「～なんて」の場合、その割合が 15.4%（名詞）対 84.6%（句や節）で、句や節を取り上げる例の方が圧倒的に多い。事柄の内容を表す句や節を「～なんて」「～とは」で提示することによって、述部ではその事柄に対する評価的な態度が感じられやすい。

《「～なんて」》

(98) 五十年前の小説の現場を歩けるなんて、考えてみたらすごいことだ。（中略）路地を進んですぐのところに、立派な新しいポールが三つ、取りつけてあって、マダム・マーダーは感慨深げに言った。 （英国ミステリ道中ひざくりげ）

(99) クラシックをポロンと弾き始めたのです。それを聞いていた別の友人と一緒に弾き始めました。すばらしい連弾となり、拍手喝采。我々仲間だけでなく、他のお客様

まで喜んでくださいました。ふだん、東京で一緒にいる時にはそんな場面がなかった
ので、驚きと共にある種の感動をおぼえました。こんな感動を与えられるなんて
すばらしいことです。 (国際線スチュワーデスの自分を磨く「美女」講座)

(100) ジェニファーは衝動的に逃げ出そうかと思った。アダムがこの大会に来ていよう
とは夢にも思わなかった。この場で対面する勇氣など、自分にはとてもない。**ア
ダムと息子が同じ街にいるなんて**考えただけでも空恐ろしいことだ。 (天使の自立)

(101) 「とにかく、この世界とまったく同じ世界が存在し、そこに、もう一人のおれも、
もう一人のお前も、ちゃんと存在してるなんて、不思議なこったなあ…」と警部は
ブランディをちびちびーと見せかけて、実はがぶがぶのみながら、長嘆息する。

(男を探せ)

《「～とは」》

(102) 「何と口の悪い女だこと！あれはランスロット卿ですよ。あんなふうにおいでに
なることからすると、馬は殺されてしまったに違いない。どうぞ、あの方が縛り首
にされるような惨めなことにならないよう、神さまがお救いくださいますように。
あのような高貴な騎士が、私たちのためにこんなにも辱められるとは情けないこと
です。」 (アーサー王物語日誌)

(103) そうしてツクヨミは、また思ってしまうのである。いくらスサノオ自身が特別だ
と言おうとも、この体はスサノオの抱く数多の肉体のひとつに違いなく、また、自
分以外の存在に怯え、激しい嫉妬に苛まれながらあれこれと妄想をめぐらせて身悶
えするとは、なんとみじめなことだ一。 (月を読む君)

(104) それにしても、きらわれてもいいや一、と思ったとたんに友だちがふえたとは、
なんだか不思議なことである。 (がんばらなくても大丈夫)

7.2.2.4 節にも述べたが、「なんて」「とは」のもつ話し手の評価を暗示する性質が「形容
詞＋コトダ」文の意味に影響していると思われる。なお、「～なんて」「～とは」が事柄の
内容を名詞化するのではなく、句や節で述べることによって、それに対する話し手の感情
や評価が表しやすくなっている。次のように名詞がコト名詞か、現象名詞の場合にも同じ
ように話し手の感情や評価が感じられることがある。

(105) それは初耳だった。代診として来るようになってから、すでに四ヶ月になるが、
いままで一度も、久子の口から、院長の家族のことを聞かされたことはなかった。
奥さんの姿が見えないことは、気になっていたが、**結核で長期療養とは、気の毒な
ことだ。** (女医彩子の事件カルテ)

- (106) 「若い男女が愛を遂げる障害がない世の中」とは、何とも幸せなことだ。だが、あまりにも幸せ過ぎて、かえって世の中に深みがなくなるような感じがしないでもない。(先見後顧)

藤田(2002)では、「～トハ」で取り上げられる事柄について、意外なものでなければならぬとし、「～トハ」構文はこうした意外さの印象に基づく表現といい(p.466)と述べている。このような「トハ」の性格と「素晴らしい」「すごい」「ひどい」「情けない」「悲しい」「気の毒な」「不思議な」など、評価や感情を表す形容詞とが結びついて、話し手の評価的な態度が感じられやすくなっているのではないかと思われる⁶⁸。

次に、「節+Adjコトダ」タイプについてみると、このタイプは事柄の内容を条件節、理由節、～ガ節、～テ節で取り上げる場合であり、従属節で述べられた事柄の内容に対する話し手の感情や評価が感じられる。

《「条件節」》

- (107) 彼女は愛について誰よりも知っている。彼女に逢うとき彼女は私の心に何かを感じさせ私を幸せにしてくれる。それが彼女の神秘的な力だとすればすばらしいことだ。(愛しのマレーネ・ディートリッヒ)

- (108) TVドラマやコマーシャルに彼らの曲が使われたことも“クイーン・ルネッサンス”の一因かもしれないけれど、クイーンの曲によって世代間のギャップが埋まり、いろんな人と音楽の話がはずむのなら実に素敵なことだ。(PLAYBOY日本版)

- (109) 「ぼくたち、間違っていないよね。間違っていたらひどいことだよ。マックスの相手をしていたあの夜、電話してきた彼女にぼくはとんでもなく無礼にあたったんだ」(もっとハッピー・エンディング)

《「理由節」》

- (110) いろいろネットでサーフィンして見たけど、私には堆肥、ぼかし肥料、腐葉土の違いがあんまり分らない。(中略) まあ、分からなくても自然の力を利用して生ゴミがごみで無く良い土が出来ていくのだからいいことだ。(Yahoo!ブログ)

⁶⁸ 森田・松木(1989:49)では、「とは」には「定義」を示す用法と「主題化」を示す用法があり、「定義」を示す用法とは、取り上げた事物・用語の内容する意味内容を説明するものであるから、純粹にその事物内部で完結する知的記述にとどまり、そこから派生される感情的側面には無縁の立場をとる。それに対して、「主題化」を示す用法は取り上げた事物から当然引き起こされる感情的側面に言及することができるため、事物に対する感想・疑問・想像・評価などが述部に現れることになる」と述べている(原文の例b、c)。

・年休とはうらやましい。
・年休とは、どこかにご旅行ですか。

- (111) 民間資金にはすべて金利が掛かるのだから、政府資金よりもはるかに厳しい条件下にある。もともとこうした制約下にある民間資金ではできない長期大規模事業こそ政府の行うべき仕事であったはずだ。それを逆に政府が財源難でできない長期大規模事業に金利のかかる民間資金を導入しようというのだから奇妙なことだ。

(千日の変革)

≪「～ガ節」≫

- (112) 花と水と詩の宴といえ、何といっても中国の曲水の宴はまことに優艶な趣ぎをもっています。(中略) 近頃、日本の各地でも曲水の宴が行われているという噂を聞きますが、嬉しいことです。

(花のある暮らし)

≪「動詞＋テ形」≫

- (113) ある春雨の降るゆうがたでした。頼光は一人脇息（ひじかけ）によって、雨の音をききながら、『世の中がおだやかになってありがたいことだ。こんなに春雨の降りつづく日などは、さびしすぎるくらいだ。』

(力が出るもの出せるもの)

次のように従属節で述べられた内容が「それは」「それも」で再提示される例もみられる。ここでは、「それは」「それも」が条件表現で表された事柄（点線）の内容を指して主語として再提示している。この場合、上に挙げた例より感情・評価的な意味合いが薄まるように思われる。

- (114) 私は何もあなたの期待に応えるために、この世に生きているわけじゃない。そして、あなたも私の期待に応えるために、この世にいるわけじゃない。私は私。あなたはあなた。でも、偶然が私たちを出会わせるなら、それは素敵なことだ。たとえ出会えなくても、それもまた同じように素晴らしいことだ。

(Yahoo! ブログ)

- (115) 「私ね、本当は、自分があまり仕合せで、何もかも信じられないんです。私はもうこれで十分すぎるんです。ただ、こんな仕合せを与えて下さった…先生に、何かご迷惑がかかったら、それはとても辛いことです。私が申しあげる意味は、それだけのことです」

(時の扉)

以上で述べた「節/N ナンテ Adj コトダ」「節/N トハ Adj コトダ」「節+Adj コトダ」タイプでは、事柄の内容に対する感情・評価的な意味合いが感じられる。このタイプでは、「こと」が「～なんて」「～とは」や従属節で提示された事柄の内容を受けるという点では述語名詞性を完全に失っているとは言い難く、「なんて」「とは」の性質と形容詞の評価的側面によるところが強いと言えそうだが、事柄の内容に対して評価的な態度を示すという

面ではよりモーダルな形式に近づいているように思われる。

7.3.2.5 「Adj コトダ」タイプ

「Adj コトダ」タイプと次節で述べる「節＋コトダ」タイプは、7.3.2.1 節～7.3.2.4 節に挙げた例とは違って、特性の持ち主が文中に明示されないタイプで、「ことだ」がモーダルな形式になっていると言えるタイプである。用例数からみると、414 例で全体の 7.4%にすぎず、このタイプが全体の 26.6%を占める「形容詞＋モノダ」文とは異なる結果をみせている。

まず、「Adj コトダ」タイプをみてみると、このタイプは前後の文脈に述べられた事柄や叙述内容に対して評価や感情を述べる文である。次の例では、ある出来事や事柄に対して、「素晴らしいことだ」「恐ろしいことだ」「悲しいことだ」と評価や感情を表出している。

(116) 「先週わたしと子供たちの写真が『プラウダ』に出たのをご覧になったと思いますが」「うん、素晴らしいことだ！」スタントン・ロジャースは嬉しそうに声を張り上げた。 (神の吹かす風)

(117) わたしの耳に、あのなつかしい調べがまたしてもよみがえってくる。(中略) この唄はいまでも日本のミッションスクールなどで教えられているのだろうか。おそろしいことだ。イギリスの子供たちはいくつごろからこんな童謡に親しんでしまうのだろう。 (わたしのメルヘン散歩)

(118) 「ギャレスなら死んだよ」ベンはこたえた。(中略)「今朝みつかったんだよ。ゆうべ飲みすぎて馬から落ちたんだ。ふびんでならねえよ、あんないいやつが」遠藤がそれを和訳した。薄気味悪い東洋人がふたり、耳慣れぬ言葉でギャレスの死について話し合うのを、店の全員が固唾をのんでききいった。「お通夜に出なきゃ」と、加藤がいった。(中略)「とんだことだ、じつに悲しいことだ。彼をさがしに日本からやってきたというのに」 (白河馬物語)

このタイプは、「なんと (も) / なんとという + Adj コトダ」⁶⁹のような形式で表現される

⁶⁹ 高橋 (1998b) は、感心・感動を表す「するものだ」形式と「することだ」形式の違いのひとつは陳述副詞の使用傾向であるとし、「するものだ」のほうは「よく (も)」が、「することだ」のほうは「なんと」「どんなに」が使われる傾向が強い (p.179) と述べている。また、「なんと」はたずね文にあらわれるというムード副詞としての特徴をもっているが、ここではそれが量・程度の側面における感動で、その現象の現象としてのすごさにおどろいているのだ (p.180) と指摘している。

なお、飛田・浅田 (1994) では、「なんと」について「状態や程度がはなはだしいことに特に言及する様子を表す (p.416)」もので、「なんとという」は「なんと」を強調した表現であると述べている。「なんとも」については「自分の気持ちが表現しきれないほど程度がはなはだしい様子を表す (p.423)」と説明している。

ことがよくあり、事柄の内容に対する話し手の評価的な態度を帯びやすい。

- (119) とうとう国連の司令官が、セルビア勢力と被害者のイスラムとの間に割って入った！国連軍が紛争に本格的に介入する！それは信じられない事態だった。なんとも素晴らしいことだ！ (手術の前に死んでくれたら)

- (120) 「もし最後が心中でなければ、紙屋治兵衛とか小春のことを覚えている人は、一人もいないはずです。しかし、ああいうことがありましたから、ロミオとジュリエットと同じように、すべての人が覚えている。何といううらやましいことだと…。」
(世界のなかの日本)

また、事柄に対して述べたり、状況を描写したりするのではなく、人の性質や性格について感心する気持ちを述べる場合もある。次の例では、「ルイがお詫びしても許さない態度」「加賀屋の伊右衛門さんが千石船を買ったこと」から、「気が強い」「豪気な」という人の性質や性格を取り出して感心している。

- (121) 「いいわ。でも、私からは頼まないわよ」自分を騙していたルイを、彼女は、まだ許す気になれなかった。「ルイが、私へのお詫びとしてそうするんなら、それでいいわ」カーテンの向こうで、アドリアン・モーリスのかすかな笑いが響いた。「相変わらず気が強いことだ」マリエールは、それを聞き咎め、不愉快に思いながら手早く着替えを終えた。
(ブルボンの封印)

- (122) 「そろそどうすけど、あの加賀屋はんは別みたいどすえ。わし、加賀屋に出入りしている奴からきいたんどす。加賀屋の伊右衛門はんは、なんでも今年の夏すぎ、若狭の小浜で身代の傾いた北前船の回漕問屋から、千石船を安く買い叩かかったんやて。自分とこの物にして、加賀屋丸と名付けはった。それで松前から船ごと昆布を大坂に運び、大きな商いをしはるそどうすわ」「へえっ、豪気なこっちゃなあ。その千石船、いったいなんぼで買うたんやろ。」
(狐官女)

さらに、このタイプは特定の時や期間における一時的な状況、状態（「あわただしい」「忙しい」）を表すこともある。普段と違ってその程度がはなはだしい状況に用いられることの多い表現であり、話し手の感心や詠嘆などの意味合いを帯びやすい。

- (123) 「これなる修験者は、昨日、筑紫を出て、都におりましたが、また東に使いに行くついで、ここへ土産を持って参ったそうです」「まだどこへ行くのだ？昨日今日と、あわただしいことだな」「されば、都の某殿が鎌倉の君と心を合わせての謀。近

いうちに戦を起こすつもりなれば、告げに参るもようです。ここに、油で煮た鹿の肉と、出雲の松江の新鮮な鱸の膾を持参しております」 (百物語)

- (124) のんびりと見物する彼を非難するように、弾薬箱を担いだ兵士たちが、険しい一瞥をくれつつ行き来する。(中略)「こんな時刻から、お忙しいことですね」ダニエルが声をかけると、マーカンドは無表情に、「なに、事態が進行しているに過ぎんよ。この土地では常に、数日、数時間、いや、数分後に何が起きるかわからんのだ」と答えた。 (小説すばる)

「Adjコトダ」タイプでは、前後の文脈の事柄の内容や状況に対して固定した形で用いられることもある。たとえば「いいことだ」「いやなこった」「えらいこっちゃ」の形で評価や感情を述べたり、「ご(お)＋形容詞＋ことだ」のような形で慣用的な表現になったりするのがみられるが、限られている。

《「いいことだ」》

- (125) 「えり子さん。並木さんと結婚するのオ？おめでとう」冬子がいうと、えり子は、あわてて顔をまっ赤にした。「そんな…。まだ、きまってないんです。私のようなものには、もったいなくて」「いいことだわ。えりさんは、家庭的だし、きっといい奥さんになれるわ」「有難うございます」 (宮崎旅行の殺人)

- (126) 「リストを作ってるの」「それはいい」ジュリアは夫が聞いていないのではないかと思った。それでも彼女は続けた。「今年は自分を啓発したいの」「いいことだよ、スイートハート」 (木曜日の朝、いつものカフェで)

《「嫌なことだ」》

- (127) 若者は返事をせずに、建物の上の空を見ていた。手に入らなかったパスポートのことではなく、この一か月、この一週間を、今夜を、どこでどう過ごすか、それだけを考えている顔だった。「ぼくのアパートに隠れるか？」とイスマイルは思わず言った。言ってから、自分がそんな大胆なことを言ったのに驚いた。「嫌なこった」「電話をしてくれ、家の方に。パスポートが見つかるかもしれないから」ほとんど懇願する口調でイスマイルは言った。 (バビロンに行きて歌え)

《「えらいことだ」》

- (128) 逃げようとピョンピョン飛んでいるが高くて跳び越えられない。どうしてこんな所に…？どうして捕まえよう？娘に大声で「えらいこっちゃ！鼠がいる！」娘も飛んできて「小さくてかわいいな」 (Yahoo!ブログ)

「ご（お）＋形容詞＋ことだ」には、「ご苦労なことだ」がよくみられるが、文脈上皮肉な意味に感じ取れることが多い。その他、「ご立派なことだ」「ご丁寧なことだ」もみられる。なお、このタイプでは「ことだ」の形が崩れ、「こった」になることもよくみられ、ここでの「ことだ」はもうすでに形式化していると言えそうである。

《「ご苦労なことだ」》

(129) 「清水さんの方が忙しいでしょう。絵の方は順調なの？」鷹野は清水が持っていたスケッチブックに目をやる。この炎天下に、本当にご苦労なことだ。鷹野の問いかけに、清水は唇の端を少しだけひいて笑った。 （冷たい校舎の時は止まる）

(130) 「誰からともなく『千草さんが亡くなったことにしよう』と言い出し、それにみんなが賛成したんです。（中略）村の人たちにとっても、倉田家が潰れたら、後がどうなるのか、とても恐ろしいことだったんです」「みんなで僕一人を騙すために？ご苦労なことですね！」 （三毛猫ホームズの四捨五入）

(131) 「十年もかかった仕込みが水の泡たあ⁷⁰、ご苦労なこった。これで一族の魂の解放とやらも、当分先になっちまったな？」 （月と貴女に花束を）

《「ご立派なことだ」》

(132) 「そうよ。でもそれは、ナオミを信じているからとか、愛しているからとかじゃないの。ただ、ナオミには自分と同じ日本人の血が流れている、というだけの理由にすぎないわ」シャピロは、食べたメヒジョネスの殻を床に投げ捨て、薄笑いを浮かべた。「ごりっぱなことだな」 （IN POCKET（月刊〔文庫情報誌〕））

《「ご丁寧なことだ」》

(133) 「おまえはボスを怒らせた」「ボス？誰だい、そりゃ？」「黄ボスさ」（あの野郎っ！）復讐は迅速に。ご丁寧なことだ。歯噛みしながら、レイは目まぐるしく思考を回転させた。このままでは、穴だらけの死体になってしまう。 （掟）

以上で述べた「Adj コトダ」タイプは、従来「ことだ」のモーダルな意味用法では「感心・感嘆⁷¹」として扱われているものであると思われるが、これはモーダルな意味というのが具体的な文の形として反映されて表現されることを示唆していると思われる。

⁷⁰ 「水の泡たあ」の「た」は原文のままである。

⁷¹ 「ことだ」のモーダルな意味用法については2.4.2.2節で述べた。寺村（2000）では「感心・感嘆」、日本語記述文法研究会（2003）では「感心・あきれ」の用法として挙げている。

7.3.2.6 「節+コトダ」タイプ

「節+コトダ」タイプは、主述関係が不明な文である。7.2.2.6 節にも述べたように、本来述語名詞としての「こと」は主語名詞の表す事物の上位概念の名詞として用いられるものであるが、それに当たる主語名詞を特定できない文である。つまり、この文の中では主語と「形容詞+こと」の間の特性の持ち主と特性という関係が崩れ、事柄の内容を表す節全体に「ことだ」が接続している形になっている。たとえば、次のような文である。

- (134) なんとか本屋で売れる他の手はないものかと、あれやこれや頭をひねったあげく、
年末も近いことだし写真をふんだんに盛りこんだ手帳をつくってみようということになった。(おかしな本の奮戦記)
- (135) つづいてバス課題を仕上げたのを見てくれたうえで、池内さんは言った。試験まであまり日もないことだし、あなたはもう来なくてよろしい。(私の戦後音楽史)
- (136) 「…私がもう、そんなに長くないことは分かってるの。…だから主人には、『子どももまだ小さいことだし、私が死んだら、早くきれいな優しい人にお嫁さんに来てもらいなさいね』って言うてるのよ」(看護婦は家族の代わりになれない)
- (137) けだし九州には土著の久しい山村も多いことだから、同じ話は尚色々の変化を以て、阿蘇や山国谷以外にも行われて居るに違いない、それを比べて見れば必ず新たに心付くことがあろうと思うが、其仕事はまだ是からである。(全集日本野鳥記)

上の例では、「こと」に当たる主語名詞を特定しにくく、「節+コトダ」の形を取っているが、実際の例では「節+コトダシ」「節+コトダカラ」の形で用いられることが多い。このようなタイプは「ことだ」の「原因・理由を表す用法⁷²」として扱われている例であり、

⁷² 坪根(1996)は「ことだ」の各用法についてその主題の復元のしやすさの程度の差を手掛かりにモダリティ度の違いを調査し、言い換え・要約の用法→伝聞の用法→感嘆・感動を表す用法→「～することが大切/必要だ」の意味を表す用法、理由・根拠を表す用法の順で助動詞化が進むと述べている。

「ことだ」の「理由や根拠を表す用法」について、坪根(同:53)では主題部分は復元可能であるが、かなり漠然としたものとなり、過去形・疑問形・否定形にすることはできず、「ことだ」という形のみで使われることから、モダリティ度は高いものだと指摘している。また、理由や根拠を表す文は「こと」を省略しても内容的な意味の違いはなく、「こと」それ自身が後に続く部分の理由や根拠になるという意味をもつわけではないとし、「こと」をつけることによってより客観性を加えて述べようとしていると説明している。たとえば、次のように主語が「私」で「好きだ」「びっくりした」等の話者の感情を表す述語が来た場合、「ことだ」は付きにくいと述べている(p.54、例12a、a'、例13)。

・ a. 私はケーキが好きだし/??好きなことだし、ダイエットはできないだろう。

・ a'. 彼はケーキが好きだし/好きなことだし、ダイエットはできないだろう。

しかし、「私」が主語の場合でも次の例のように話者の感情を表すのではなく、事実を述べた文では「ことだ」は使われる。つまり、「こと」が「これは私が主観で言っていることではない」という「主観回避」的なニュアンスを付け加えている(p.54)と述べている。


・ (私は) 論文で忙しいし/忙しいことだし、パーティーへ行くのはやめておくれ。

「形容詞＋コトダ」文ではほとんどみあたらないが、従来「助言・忠告の用法⁷³」と言われる文もやはり「節＋コトダ」の形式を取ると思われる⁷⁴。つまり、従来の研究で言われてきたモーダルな意味用法というのは、それぞれの構文的な形に支えられて表現されているのだと言えそうである。

7.3.3 7.3節のまとめ

7.3 節では、「形容詞＋コトダ」文の文中での特性の持ち主の示し方を調査し、そのさまざまな形が「ことだ」の意味とかかわっていることを示そうとした。それをまとめると、次のようになる。

表 27 : 「形容詞＋コトダ」文のタイプ別のまとめ

「形容詞＋コトダ」文のタイプ		具体例	意味
名 詞	「N ハ …… Adj コトダ」 (「N ガ …… Adj コトダ」)	「学問と研究はかけがえのない大切なことだ」 (「自由であることが大切なことである」)	典型的な 述語名詞 
	「N/節トイウノハ …… Adj コトダ」	「夢があるということはすばらしいことです」	
	「N トハ …… Adj コトダ」	「愚痴とは愚かなことである」	
	「N モ Adj コトダ」	「自転車に四十分以上乗るのもいいことです」	
	「N/節ッテ …… Adj コトダ」 「N/節 φ …… Adj コトダ」	「それって、すばらしいことだ」 「生きているってステキなことだ」 「それ、すごいことだ」	
節	「節/N ナンテ …… Adj コトダ」 「節/N トハ …… Adj コトダ」 「節＋Adj コトダ」	「五十年前の小説の現場を歩けるなんてすごいことだ」「あのような高貴な騎士が、私たちのためにこんなにも辱められるとは情けないことです」「間違っていたらひどいことだ」	典型的な モーダル 形式
	「Adj コトダ」	「なんと素晴らしいことだ」「ご苦労なことだ」	
	「節＋コトダ」	「年末も近いことだし」	

⁷³ 木坂 (1978[1988 : 424]) では、文末の「ことだ」について、「のだ」と比較しながら、次のように述べている (例 (i) (j)、下線は原文のもの)。

- ・早く行くのだ。
- ・早く行くことだ。

「のだ」の表現は前件の動作概念を話者の側にひきこんで一方的に行動を指示することで、主観的な押しつけの響きをもつが、「こと」表現は前件を抽象化普遍化して一度距離をおくことによって確かな真理として印象づけて行動を実現させようとする」と説明している。

⁷⁴ たとえば、次のような例が挙げられる (下線と囲み線は筆者による)。

- ・「復帰した以上、日本人になり切ることです」(2.4.2.2節の寺村 (1980 : 116) の例)

このように、「形容詞＋コトダ」文にも「こと」が述語名詞として機能する典型的な文のタイプとモーダルな意味を表す形式と言える典型的な文のタイプがあり、その間にはさまざまな形式が混在する。文中で特性の持ち主をどのような形で取り上げるか（名詞か句や節かなど）、その示し方はどのような性質をもつのかなどが、「ことだ」の意味に関係していると思われる。但し、中間的な段階においては、「こと」本来の意味、すなわちコト性がまだ生きている場合が多く、「もの」より述語名詞としての「こと」の領域が広いと言える。

◆第Ⅲ部（本論Ⅱ）のまとめ：「形容詞＋モノダ」文と「形容詞＋コトダ」文

以上、第Ⅲ部（本論Ⅱ）では「形容詞＋モノダ」文と「形容詞＋コトダ」文を取り上げ、特性の持ち主がどう提示されるかに着目し、「もの」「こと」が述語名詞としてふるまう典型的な文のタイプからモーダルな意味を表す典型的な文のタイプまで、その分布を示した。

「形容詞＋モノダ」文と「形容詞＋コトダ」文は主語名詞の表す事物の恒常的な特性を述べる文であり、述語名詞としての「もの」「こと」の典型的なタイプは「N ハ Adj モノダ／コトダ」である。また、「もの」「こと」がモーダルな形式と言える典型的なタイプというのは、「Adj モノダ／コトダ」「節＋モノダ／コトダ」のように、特性の持ち主が文中に現れず、前後の文脈の事柄や先行の叙述内容に対して述べる文である。その中間的なタイプにおいては、いずれも特性の持ち主を名詞ではなく句や節で表す文のタイプであるほど、「ものだ」「ことだ」がモーダルな形式に近くなる。本来モーダルな意味というのは事柄に対する話し手の態度を示すものであり、それが文のタイプとして具現化しているように思われる。以上で述べた「形容詞＋モノダ」文と「形容詞＋コトダ」文をタイプ別にまとめると、次のようになる。

表 28：「形容詞＋モノダ」文と「形容詞＋コトダ」文のタイプ別のまとめ

「形容詞＋モノダ」文のタイプ	「形容詞＋コトダ」文のタイプ	特性の持ち主	意味
「N ハ …… Adj モノダ」 （「N ガ …… Adj モノダ」）	「N ハ …… Adj コトダ」 （「N ガ …… Adj コトダ」）	名詞	典型的な述語名詞 
「N/節トイウノハ …… Adj モノダ」 「N トハ …… Adj モノダ」 「N/節ッテ …… Adj モノダ」 「N φ …… Adj モノダ」	「N/節トイウノハ …… Adj コトダ」 「N トハ …… Adj コトダ」 「N モ …… Adj コトダ」		
「N モ …… Adj モノダ」 「N ナンテ …… Adj モノダ」	「N/節ッテ …… Adj コトダ」 「N/節 φ …… Adj コトダ」		
「節＋Adj モノダ」 「節トハ …… Adj モノダ」 「節ナンテ …… Adj モノダ」	「節/N ナンテ …… Adj コトダ」 「節/N トハ …… Adj コトダ」 「節＋Adj コトダ」	節	典型的なモーダルな形式
「Adj モノダ」	「Adj コトダ」		
「節＋モノダ」	「節＋コトダ」		

しかし、両形式は全体の分布においては類似しているものの、中間的な領域においては「形容詞＋モノダ」文と「形容詞＋コトダ」文の違いがみうけられる。「もの」はその意味の抽象性によって、述語名詞性を失い、モーダルな意味を表す形式へ容易に移行するのに対して、「こと」にはコト性が生きてるように思われる。つまり、モダリティ度において大きく違いが感じられる。これは、次の高橋（1997a）にも述べられているような「もの」と「こと」の性質の違いが反映されていることによるものではないかと思われる。

高橋（同）は「もの」と「こと」について、高橋（同：44）で「モノとコトの関係は＜モノの運動や性質＞がコトであり、さらに＜モノが運動したり、性質をもったりする＞のがコトであるから、モノはコンスタントであり、コトは変化することになる。このことから、モノは本質とかかわり、コトは現象とかかわることになる」と述べている⁷⁵。また、高橋（同：44）には「モノとコトが認識とかかわるとき、モノは認識の対象となり、コトが認識の内容となる」という指摘がある。このような性質は、「モノダ」文と「コトダ」文を貫いて観察される特徴であり、特にそれが事柄の内容に対する捉え方の違いとして現れてくる。

《「形容詞＋モノダ」文》

- ・司令の目も赤く濡れている。そばに立っている私たちに、「別れるということは、実に辛いものですね」「五十のおやじに泣かれるのには実際参る。本当に嘘がないですからね」と、言われた。（堀内海軍大佐の生涯）
- ・九竜城跡のアジト周辺以外は警戒して過ごさねばならなくなったのである。そこへ、將軍からのまた新しい殺しを依頼する連絡があった一。延べにすると四、五年、私は將軍専属の殺し屋稼業を続けた。思えば不思議なものである。まさか、外国でこんな暮らしをするなどとは想像もしなかったが、いろんな運命の糸がかからんで現実には、こういうことになってしまった。（アジア無頼）

《「形容詞＋コトダ」文》

- ・「この年齢ですので、このまま生きていてもそれほど長くは生きられないでしょう。だから、気持ちは楽ですね。また担当医の先生も、“気晴らしになりますから、もし

⁷⁵ 船田（1969）では、コトという概念は時間性と過程性を特徴としている（p.85）とし、コトの特性を、時間に沿って進行し、発展する性質、即ち過程性と見なし、そのような性質に欠ける「非過程的」概念をモノと見なすという観点から、モノとコトの対立は「静」と「動」の対立ともいえる（p.87）と指摘している。

また、『大辞林』第二版新装版では「こと」について「もの」が何らかの作用・機能・状態・関係などとして実現するありさまをいう語」とし、「もの」が時間的に不変な実体のようにとらえられているのに対して、「こと」は生起・消滅する現象としてとらえられている。哲学的には、「もの」が主語的存在者を指すのに対して、「こと」は述語的存在様態を指し、後者は時間性の契機を含む（p.924）と記述している。

働けるのなら働きなさい” というものですから、無理をすることなく、会社に昼頃出勤して、体調に合わせて働いております。どんな逆境に立たされても、**仕事など目的を持つということは楽しいことですね**」（私はこうして「がん」を克服した）

- ・行政文書が千九百九十三年からA4化されたし、パーソナル・コンピュータのプリンターもA4用紙使用が一般的になった。このような「A4時代」の到来にもかかわらず、手帳はこれに対応していない。考えてみると、不思議なことである。A4の紙を不自然な形に折って手帳に差し込んでいる人をよく見掛ける。（続「超」整理法・時間編）

つまり、「ものだ」は事柄を認識の対象として捉え、それに対する話し手の認識態度が示されているのに対して、「ことだ」は主語の表す事柄をどういう内容として捉えて述べるかに注目している。そのため、同じような構文であっても、両者の意味には違いが生じるのである。

また、第5章の5.3.1.2節で指摘したように、「形容詞＋コトダ」文が許されない環境で（?「貧乏旅行は何か月も続けると体に悪いことだ」）、「形容詞＋モノダ」文が許容される（「貧乏旅行は何か月も続けると体に悪いものだ」）という、特性の恒常性と一時性における両者の許容度の違いも上に述べた「もの」「こと」の性質と関係があるように思われる。

以上のように、「ものだ」と「ことだ」のモーダルな意味や構文的な形は、「もの」「こと」が本来有している意味と密接なかかわりがありそうである。但し、これは大きな問題であり、今後「モノダ」文と「コトダ」文全体を対象にさらに検証することが必要であると思われる。

第Ⅳ部 結論

第8章 おわりに

ここでは、本研究で明らかになったことについてまとめ、本研究の意義、さらに今後の展望と課題について述べる。

8.1 本研究であきらかになったこと

本研究の結論として、明らかになったことをまとめる。

本研究は、名詞述語文、その中でも形容詞の修飾を受けた「形容詞＋名詞」述語文の構文的・意味的・機能的な性質について論じたものである。

本論では、第Ⅱ部（本論Ⅰ）と第Ⅲ部（本論Ⅱ）に大きく分けて考察を行なった。第Ⅱ部（本論Ⅰ）の議論を進めるにあたっては、「形容詞＋名詞」述語文と形容詞述語文の共通点と相違点に着目し、かつ、「形容詞＋名詞」述語文の述語構造の特徴にも注目し、実例に基づいて「形容詞＋名詞」述語文の性質を考察した。第Ⅲ部では、第Ⅱ部の考察結果を踏まえ、述語名詞とモーダルな形式の連続性に着目して考察を行った。

以下では、本論の各章で論じた内容や明らかにした概略を示す。

（Ⅰ）「形容詞＋名詞」述語文の構文的・意味的・機能的な性質

《第Ⅱ部（本論Ⅰ）：「形容詞＋名詞」述語文の性質》

第3章では、「形容詞＋名詞」述語文の主語名詞と述語名詞との関係や「形容詞＋名詞」述語と形容詞述語との意味上の異同について観察し、第4章と第5章では、「形容詞＋名詞」述語文の主語の示し方（第4章）や文の成分（状況語、修飾語、規定語）との共起関係（第5章）に注目して、形容詞述語文との比較考察を行った。二つの構文の共通点や相違点について実例分析を通して考察した結果、先行研究の指摘に加え、次の点を新たに提示した。

〈1〉「形容詞＋名詞」述語文と形容詞述語文における主語の示し方

まず、「形容詞＋名詞」述語文と形容詞述語文における主語の示し方をみると、いずれも主語が「は」で示されることが相対的に多い。但し、「「は」で示されるもの」の3種、すなわち「は」「というのは」類「とは」の合計は「形容詞＋名詞」述語文では71%なのに対し、形容詞述語文のほうはそれが半数以下（47.2%）である。形容詞述語文は、そのか

わり無助詞（「ご主人、ハンサムね」）が約 4 分の 1（25.4%）、「って」（「世の中って理不尽だなあ」）が 14.2%を占めるなど、全体として「形容詞＋名詞」述語文よりも主語の示し方のバリエーションが豊かだと言える。

また、二つの構文は主語名詞が個別・具体的なものか、あるいは一般・総称的なものかという性質によっても、主語の示し方に違いがみられる。個別・具体的なもの場合には、「形容詞＋名詞」述語文では 4 分の 3 近くが「は」で提示されているのに対して、形容詞述語文では「は」（45.6%）のほかに無助詞（32.3%）で提示される割合が高い。一方、一般・総称的なもの場合には、「形容詞＋名詞」述語文では「は」（41.7%）のほかに「というのは」類（「銀行というところは理不尽な組織だ」）と「とは」で提示される割合が高い（31.3%）のに対して、形容詞述語文では「は」（44.2%）のほかに「って」（34.8%）で提示される割合が高い。

〈2〉文の成分との共起関係からみた特徴

—主語名詞の表す事物の〈特性〉の恒常性と一時性—

「形容詞＋名詞」述語文と形容詞述語文は、意味の面において主語の恒常的な特性を表すこと、そして構文の面において述語に形容詞を含んでいることで共通しており、このことは二つの構文がともに程度副詞（5.2.1 節）や比較表現 I（5.2.2 節）などによる修飾が可能であることに現れている。

しかし、二つの構文は一方は述語に名詞を含んでいるが、他方は含んでいないという構文的な違いがあり、このような特徴は恒常的な特性を表すか一時的な現象を表すかという意味機能の違いに現れている。つまり、形容詞述語文は恒常的な特性（「山田先生はやさしい」）を述べることができるのはもちろん、一時的な事態も述べるのに対して（「最近、何だか無口ね」）、「形容詞＋名詞」述語文は恒常的な特性（「山田先生はやさしい人だ」）だけを述べることができ、一時的な事態を述べることはできない（?「最近、無口な人ね」）という性質である。

なお、通常の「形容詞＋名詞」述語文が許容されない環境で「形容詞＋モノダ」文が許容されることがあり、それは「もの」が述語名詞としての性格を失い、モーダルな意味を表す形式へ移行していることの傍証になるものと思われる。この結果を受け、本論Ⅱでは「形容詞＋モノダ」文と「形容詞＋コトダ」文を取り上げ、あらためて論じた。

《第Ⅲ部（本論Ⅱ）：述語名詞からモーダルな形式へ》

第Ⅲ部（本論Ⅱ）では、「形容詞＋モノダ」文と「形容詞＋コトダ」文において特性の持ち主がどう提示されるかに着目し、そのさまざまな具体的な形式が典型的な述語名詞とし

での「もの」「こと」からモーダルな意味を表す「ものだ」「ことだ」までのさまざまとかかわっていることを示そうとした。「形容詞＋モノダ」文と「形容詞＋コトダ」文をタイプ別にまとめた<表 28>を再掲する。

表 29 : 「形容詞＋モノダ」文と「形容詞＋コトダ」文のタイプ別のまとめ〔表28再掲〕

「形容詞＋モノダ」文のタイプ	「形容詞＋コトダ」文のタイプ	特性の持ち主	意味
「N ハ …… Adj モノダ」 (「N ガ …… Adj モノダ」)	「N ハ …… Adj コトダ」 (「N ガ …… Adj コトダ」)	名詞	典型的な述語名詞 
「N/節トイウノハ …… Adj モノダ」 「N トハ …… Adj モノダ」 「N/節ッテ …… Adj モノダ」 「N φ …… Adj モノダ」	「N/節トイウノハ …… Adj コトダ」 「N トハ …… Adj コトダ」 「N モ …… Adj コトダ」		
「N モ …… Adj モノダ」 「N ナンテ …… Adj モノダ」	「N/節ッテ …… Adj コトダ」 「N/節 φ …… Adj コトダ」		
「節＋Adj モノダ」 「節トハ …… Adj モノダ」 「節ナンテ …… Adj モノダ」	「節/N ナンテ …… Adj コトダ」 「節/N トハ …… Adj コトダ」 「節＋Adj コトダ」	節	典型的なモーダルな形式
「Adj モノダ」	「Adj コトダ」		
「節＋モノダ」	「節＋コトダ」		

文の構造の観点からみると、「もの」「こと」が典型的に述語名詞としてふるまう文のタイプ（「N ハ Adj モノダ／コトダ」）と典型的にモーダルな意味を表すと言える文のタイプ（「Adj モノダ／コトダ」「節＋モノダ／コトダ」）があり、その中間にはさらにさまざまな文のタイプが混在している。その中間的なタイプにおいては、いずれも特性の持ち主を名詞ではなく句や節で表す文のタイプであるほど、「ものだ」「ことだ」がモーダルな形式に近くなる。本来モーダルな意味というのは事柄に対する話し手の態度を示すものであり、それが文の形式の中に反映されていると言えそうである。

以上の「形容詞＋名詞」述語文と形容詞述語文、そして「形容詞＋モノダ／コトダ」文の考察にうかがえるように、構文的な環境には「形容詞＋名詞」述語文が現れやすい環境と形容詞述語文が現れやすい環境がある。但し、「形容詞＋名詞」述語文の中でも、「形容

詞＋モノダ」文と「形容詞＋コトダ」文のように、述語名詞（「もの」「こと」）が述語名詞性を失い、モーダルな意味を表す形式になると、その構文環境も形容詞述語文（「ものだ」「ことだ」のついていない形容詞述語）の構文環境に近づくのではないと思われる。

（Ⅱ）複合連体句内の意味関係：「動詞句＋形容詞句＋名詞ダ」型と「形容詞句＋動詞句＋名詞ダ」型の文の比較

第6章では「形容詞＋名詞」述語文のさらなる考察として、動詞句と形容詞句が連体句をなしている「動詞句＋形容詞句＋名詞ダ」型の文（「仕事ができる素晴らしい人だ」）と「形容詞句＋動詞句＋名詞ダ」型の文（「若いやせた女性だ」）を比較した。用例数からみると、「動詞句＋形容詞句＋名詞ダ」型の文が圧倒的に多い（95.5%）のに対して、「形容詞句＋動詞句＋名詞ダ」型の文は極めて少なく（4.5%）、「動詞句＋形容詞句＋名詞ダ」型の文を中心に「動詞句＋形容詞句」（複合連体句（下線部））の意味関係について述べた。

動詞句と形容詞句の意味関係をみると、特性の同質な側面を述べるものが異質な側面を述べるものより多くみられる。特性の同質な側面を述べる場合、「動詞句＋形容詞句＋名詞ダ」型の文では動詞句が個別かつ具体的な特性の側面を述べ、それを形容詞句によって一般化・評価づけしてあらためて示す（「すきま風の吹き抜ける古い家だ」）ことが多いのに対して、「形容詞句＋動詞句＋名詞ダ」型の文ではそういうむすびつきがほとんどみられない。このような表現のし方は「動詞句＋形容詞句」の意味的なあり方を示しているように思われる。

8.2 本研究の意義

これまでの研究の中で、本研究がどのような意義をもつのかについて述べる。

・「形容詞＋名詞」述語文と形容詞述語文の比較考察

動詞述語文は早くから研究が進んでいるが、名詞述語文はそれほど歴史がなく、特に名詞述語文と形容詞述語文の比較研究に関しては分析の観点も豊かではなかったように思われる。本研究の前半は、主に名詞述語文と形容詞述語文の重なりあうところに注目して考察を行っており、従来記述されてきた研究とは異なった観点から二つを比較分析した。そうすることによって、両者の違いを明らかにし、「形容詞＋名詞」述語文の特徴を見出すことができた。そして、その結果は「形容詞＋モノダ」文と「形容詞＋コトダ」文の研究にもつながることになった。

方法論においては、事例調査で得られた用例数の分布や数値的なデータによる量的な分析と構文的な観点からの質的な分析を同時に行っている。これによって、本研究の考察が実証的に支えられていると同時に、先行研究の指摘に加え、新たな結果を提示することができたと思われる。また、このような方法にたった分析は、「形容詞＋名詞」述語文を名詞述語文の枠組みの中でどのように位置づけるか、形容詞述語文との関係をどうとらえるかということについての手立てになると思われる。

・「形容詞＋モノダ／コトダ」文の総合的な考察への試み：述語名詞とモーダルな形式の連続性に注目

本論Ⅱでは本論Ⅰ（第４章と第５章）の結果を受けて、「形容詞＋モノダ」文と「形容詞＋コトダ」文において特性の持ち主がどう提示されるかに着目し、量的調査と質的分析を通して、「ものだ」と「ことだ」のモーダルな意味が実現する構文的な環境を具体的な文のタイプとして示そうとした。

このように述語名詞からモーダルな形式への構文的な環境に注目することによって、従来漠然とモーダルな意味と言われてきたものが文の形に支えられて表現されていることを確認することができたし、「モノダ」文と「コトダ」文の性質についても従来の研究とは異なる視点から観察することができたと思う。

また、本研究全体を通して、「形容詞＋名詞」述語文と形容詞述語文、そして「形容詞＋モノダ／コトダ」文の三つの構文の関係を事例調査に基づいて明確にすることを試み、その全体像を示そうとしたことに本研究の意義があると思われる。

・「動詞句＋形容詞句＋名詞ダ」型の文の考察：「形容詞＋名詞」述語文の内部構造に注目

そして、本研究の本論Ⅰの後半（第６章）で「動詞句＋形容詞句＋名詞ダ」型の文を取り上げ、これまであまり注目されなかった複合連体句内の意味関係のあり方について考察を試みたことに意義があると思われる。

本研究では、複合連体句の関係についてその内部の意味関係という新しい観点を取り入れ、事例調査を参考にしつつ多面的な分析を行い、従来の研究では指摘されることのなかった新しい知見を見出している。これはまた「形容詞＋名詞」述語文のさらなる考察として、今後の名詞述語文の研究にもつながるものと考えられる。

8.3 今後の展望と課題

最後に、今後の展望と課題について述べる。

・「モノダ」文と「コトダ」文についてのさらなる考察

「モノダ」文と「コトダ」文については、従来さまざまな研究がなされてきた。本研究でも先行研究を参考にしつつ、「ものだ」「ことだ」の意味と構文的な環境とのかかわりを具体的な文のタイプとして示すことができた。しかし、「形容詞＋モノダ」文と「形容詞＋コトダ」文を中心に考察を行っており、「モノダ」文と「コトダ」文全体を対象としていないため、網羅的に考察したとは言い難い。今後本稿で扱えなかった文を含め、「モノダ」文と「コトダ」文全体を対象に一般化を検討することが必要であると思われる。

また、本研究の考察で確認したように、従来の研究で言われてきた「ものだ」と「ことだ」のモーダルな意味というのは、構文的な形の支えを受けながら表現されていると言えそうである。しかし、「ものだ」と「ことだ」のモーダルな意味の解釈にはさまざまな要因がかかわっており、それぞれのモーダルな意味と構文的な形とのかかわりについては、今後続けて観察することが必要である。

・「モノダ」文と「コトダ」文の比較考察

第Ⅲ部のまとめにも言及したが、「モノダ」文と「コトダ」文を観察してみると、二つの構文にはモダリティ度における違いがみられる。つまり、事柄の内容に対する捉え方において両者の違いが観察されるが、これは「もの」と「こと」が本来有している意味と密接なかかわりがありそうである。「モノダ」文と「コトダ」文の違いをはっきりさせるためには、「もの」と「こと」の本来の意味と「ものだ」「ことだ」のモーダルな意味とのかかわりをもとに、二つの構文を比較考察することが必要であるように思われる。

また、本研究では「形容詞＋モノダ／コトダ」文について、「形容詞＋名詞」述語文、形容詞述語文との関係から総合的な考察を試みた。しかし、第5章で指摘した、「形容詞＋名詞」述語文と形容詞述語文の恒常的な特性を表すか一時的な現象を表すかという意味機能の違いが「形容詞＋モノダ／コトダ」文とどのようにかかわっているのかについては、詳しく掘り下げるができなかった。この三つの構文の関係や「モノダ」文と「コトダ」文の違いを明らかにするためには、〈特性〉の恒常性と一時性という観点からの考察も必要であると思われる。今後さらに追究していきたい。

・複合連体句内の意味的なあり方についての総合的な考察

第6章では「動詞句＋形容詞句＋名詞ダ」型の文を中心に、動詞句と形容詞句の意味関係について考察を行なったが、その考察結果をもとに、他の複合連体句についてもさらに調査していく必要があると思われる。

たとえば、「動詞句＋動詞句＋名詞ダ」型の文、「形容詞句＋形容詞句＋名詞ダ」型の文、「動詞句＋形容詞句＋形容詞句＋名詞ダ」型の文、「動詞句＋動詞句＋形容詞句＋名詞ダ」型の文、「名詞句＋形容詞句＋名詞ダ」型の文などさまざまな組み合わせが可能であり、今後これらを含めた総合的な観察が必要となる。

《「動詞句＋動詞句＋名詞ダ」型》

- ・ ものやわらかな顔つきで明解な主張をする好感のもてる男だと思っていたので
“海老原”という名を口にした時の山田の口調の方に嫌悪を覚えた。（僕って何）

《「形容詞句＋形容詞句＋名詞ダ」型》

- ・「キャッチ&スロー」はディスクの世界において、永遠のテーマと呼ぶにふさわしい、奥の深いものだと感じます。（ディスク&ドッグ）

《「動詞句＋形容詞句＋形容詞句＋名詞ダ」型》

- ・朝鮮には一つの民謡がある。苦しみ悩む人民の生きた心臓からつくり出された、美しい古い歌だ。しみじみと感じられる美しさがすべて悲しみをたたえているように、それは悲しい歌だ。（アリランの誕生）

《「動詞句＋動詞句＋形容詞句＋名詞ダ」型》

- ・重厚な木製のドアを押して中に入ると、細長い空間が広がっていた、両脇に研究員用の個室が並ぶだけで、やたらと目立つのが部屋の真ん中に置かれたどっしりとした大きいテーブルだ。（未来をつくる図書館）

《「名詞句＋形容詞句＋名詞ダ」型》

- ・ほかには教授の人柄を示すような写真も賞状も美術作品も、私物はいっさい置かれていない。蛍光灯で照らされたコンクリート・ブロックと冷たいタイル床の殺風景な部屋だ。（100歳まで生きてしまった）

これらの文における複合連体句内の意味関係のあり方を比較考察し、その意味関係と語

順との関係を解明していくことが今後の課題となる。

以上述べた点に関しては、今後の課題とし、さらに取り組んでいきたい。

参考文献

- 揚妻祐樹（1991）「実質名詞「もの」と形式的用法との意味的なつながり」『東北大学文学部日本語学科論集』1、pp.1-12、東北大学
- 揚妻祐樹（1992）「体言的素材性カテゴリーとしての「もの」」『東北大学文学部日本語学科論集』2、pp.1-11、東北大学
- 安達太郎（1998）「認識的意味とコト・モノの介在」『世界の日本語教育』8、pp.203-217、独立行政法人国際交流基金
- 安達太郎（2002）「現代日本語の感嘆文をめぐって」『広島女子大学国際文化学部紀要』10、pp.107-121、県立広島女子大学
- 荒正子（1989）「形容詞の意味的なタイプ」言語学研究会（編）『ことばの科学 3』pp.147-162、むぎ書房
- 石神照雄（1981）「比較表現から程度性副詞へ」島田勇雄先生古稀記念論文集刊行会（編）『ことばの論文集 島田勇雄先生古稀記念』pp.233-248、明治書院
- 井手至（1967）「形式名詞とは何か」松村明他（編）『講座日本語の文法 3 品詞各論』pp.37-52、明治書院
- 今井忍（2012）「なぜ「多い学生」「少ない本」と言えないのか：〈存在〉という意味成分に基づく再検討」『日本語・日本文化』38、pp.53-80、大阪外国語大学留学生日本語教育センター
- 大堀壽夫（2002）「第9章 文法化」『認知言語学』pp.179-202、東京大学出版会
- 大堀壽夫（2004）「文法化の広がりと問題点」『月刊言語』33-4、pp.26-33、大修館書店
- 奥田靖雄（1974）「単語をめぐって」教育科学研究会・国語部会（編）『教育国語』36、pp.35-41、むぎ書房〔再録：松本泰丈（編）1978、pp.11-20；奥田靖雄 1985、pp.41-51〕
- 奥田靖雄（1985a）「文のさまざま（1）文のこと」教育科学研究会・国語部会（編）『教育国語』80、pp.41-49、むぎ書房〔再録：奥田靖雄 1985b、pp.227-240〕
- 奥田靖雄（1985b）『ことばの研究・序説』むぎ書房
- 奥田靖雄（1988a）「文の意味的なタイプ—その対象的な内容とモーダルな意味とのからみあい—」教育科学研究会・国語部会（編）『教育国語』92、pp.14-28、むぎ書房
- 奥田靖雄（1988b）「時間の表現（1）（2）」教育科学研究会・国語部会（編）『教育国語』94、pp.2-17；95、pp.28-41、むぎ書房
- 奥田靖雄（1996）「文のこと—その分類をめぐって—」教育科学研究会・国語部会（編）『教育国語』2-22、pp.2-14、むぎ書房
- 尾上圭介（1973）「文核と結文の枠—「ハ」と「ガ」の用法をめぐって—」『言語研究』63、pp.1-26、

- 日本言語学会〔再録：尾上圭介 2001、pp.17-49〕
- 尾上圭介（1986）「感嘆文と希求・命令文—喚体・述体概念の有効性—」『松村明教授古稀記念国語研究論集』 pp. 555-581、明治書院〔再録：尾上圭介 2001、pp.167-198〕
- 尾上圭介（2001）『文法と意味Ⅰ』くろしお出版
- 尾上圭介（2004）「主語と述語をめぐる文法」『朝倉日本語講座 6 文法Ⅱ』 pp.1-57、朝倉書店
- 木坂基（1978）「近代文章における「こと」語・「こと」表現の性格」『山口女子大学研究報告 第 1 部人文・社会科学』 3、 pp.1-10、山口女子大学〔再録：木坂基 1988、pp.421-440〕
- 木坂基（1988）『近代文章成立の諸相』和泉書院
- 木下りか（2004）「形容詞の装定用法をめぐる一考察—「多い」「遠い」の場合—」『大手前大学人文科学部論集』 5、 pp.25-35、大手前大学・大手前短期大学
- 久島茂（2010）「形容詞の意味—「多い」を中心として—」澤田治美（編）『ひつじ意味論講座 第 1 巻 語・文と文法カテゴリーの意味』 pp.173-190、ひつじ書房
- 工藤浩（1982）「叙法副詞の意味と機能—その記述方法をもとめて—」『研究報告集』 3、〔国立国語研究所報告 71〕 pp.45-92、秀英出版
- 工藤浩（1983）「程度副詞をめぐる」渡辺実（編）『副用語の研究』 pp.176-198、明治書院
- 工藤浩（1997）「評価成分をめぐる」川端善明・仁田義雄（編）『日本語文法 体系と方法』 pp.55-72、ひつじ書房
- 工藤浩（2000）「副詞と文の陳述的なタイプ」『日本語の文法 3 モダリティ』 pp.163-234、岩波書店
- 工藤真由美（2002a）「日本語の文の成分」飛田良文・佐藤武義（編）『現代日本語講座 第 5 巻 文法』 pp.101-119、明治書院
- 工藤真由美（2002b）「現象と本質—方言の文法と標準語の文法—」『日本語文法』2-2、 pp.46-61、日本語文法学会
- 工藤真由美（2012）「時間的限定性という観点が提起するもの」影山太郎（編）『属性述語の世界』 pp.143-176、くろしお出版〔再録：工藤真由美 2014、pp.31-57〕
- 工藤真由美（2014）『現代日本語ムード・テンス・アスペクト論』ひつじ書房
- 国立国語研究所（1951）『現代語の助詞・助動詞—用法と実例—』〔国立国語研究所報告 3〕秀英出版
- 国立国語研究所（1963）『話しことばの文型 2 独話資料による研究』〔国立国語研究所 23〕国立国語研究所
- 国立国語研究所〔宮島達夫〕（1972）「動詞の意味と文法的性質」『動詞の意味・用法の記述的研究』〔国立国語研究所報告 43〕 pp.665-708、秀英出版〔再録：宮島達夫 1994、pp.337-393〕
- 国立国語研究所〔西尾寅弥〕（1972）『形容詞の意味・用法の記述的研究』〔国立国語研究所報告

44] 秀英出版

佐伯哲夫 (1960) 「現代文における語順の傾向—いわゆる補語のばあい—」『言語生活』111、
pp.56-63、筑摩書房 [再録：佐伯哲夫 1975、pp.107-119]

佐伯哲夫 (1975) 『現代日本語の語順』笠間書院

佐久間鼎 (1941) 『日本語の特質』育英書院 [佐久間鼎 (1995) 『日本語の特質』くろしお出版]

佐久間鼎 (1951) 『日本語学』朝日新聞社

佐久間鼎 (1958) 「修飾の機能」『日本文法講座 5 表現文法』pp.23-55、明治書院

佐藤里美 (1997) 「名詞述語文の意味的なタイプ—主語が人名詞のばあい—」言語学研究会 (編)
『ことばの科学 8』pp.151-212、むぎ書房

佐藤里美 (1998) 「名詞述語としての「することだ」」『日本東洋文化論集』4、pp.1-56、琉球
大学法文学部

佐藤里美 (2000) 「「ものだ」の機能」『日本東洋文化論集』6、pp.1-41、琉球大学法文学部

佐藤里美 (2001) 「テキストにおける名詞述語文の機能—小説の地の文における質・特性表現
と《説明》—」言語学研究会 (編)『ことばの科学 10』pp.67-116、むぎ書房

佐藤里美 (2009) 「名詞述語文のテンポラリティー」言語学研究会 (編)『ことばの科学 12』
pp.139-181、むぎ書房

佐藤里美 (2010) 「述語のひろがり—合成述語を中心に—」至文堂 (編)『国文学 解釈と鑑賞』
75-7、pp.50-59、ぎょうせい

佐野由紀子 (1998) 「比較に関わる程度副詞について」『国語学』195、pp.112-99、国語学会

佐野由紀子 (2016) 「「多い」の使用条件について」『日本語文法』16-2、pp.77-93、日本語文
法学会

澤田浩子 (2003) 「属性叙述における名詞述語文」『日本語教育』116、pp.39-48、日本語教育
学会

澤田浩子 (2010) 「彼は親切的な性格だ」と「彼は性格が親切だ—中国語から日本語を考える—」
砂川有里子他 (編)『日本語教育研究への招待』pp.251-271、くろしお出版

新屋映子 (1989) 「“文末名詞”について」『国語学』159、pp.左 1-14、日本語学会 [再録：新屋
映子 2014、pp.85-105]

新屋映子 (2003) 「日本語の述部における名詞の機能」『Journal CAJLE』5、pp.131-147、カ
ナダ日本語教育振興会 [再録：新屋映子 2014、pp.3-19]

新屋映子 (2009) 「形容詞述語と名詞述語—その近くて遠い関係—」至文堂 (編)『国文学 解
釈と鑑賞』74-7、pp.30-40、ぎょうせい [再録：新屋映子 2014、pp.21-31]

新屋映子 (2013) 「名詞句の性状規定性に関する一考察」『日本研究教育年報』17、pp.19-32、
東京外国語大学日本専攻 [再録：新屋映子 2014、pp.51-68]

- 新屋映子（2014）『日本語の名詞指向性の研究』ひつじ書房
- 鈴木重幸（1972）『日本語文法・形態論』むぎ書房
- 鈴木重幸（1992）「主語論をめぐって」言語学研究会（編）『ことばの科学 5』pp.73-108、むぎ書房
- 高市和久（1991）「述語での「もの」の用法」『日本文芸論集』23・24、pp.195-216、山梨英和大学
- 高梨信乃（2006）「助動詞「ものだ」「ことだ」：評価のモダリティを表す用法」『神戸大学留学生センター紀要』12、pp.1-23、神戸大学留学生センター
- 高橋太郎（1959）「動詞の連体修飾法」『ことばの研究』〔国立国語研究所論集 1〕pp.169-182、国立国語研究所〔再録：高橋太郎 1994、pp.279-294〕
- 高橋太郎（1965）「動詞の連体修飾法（2）一場所的な結びつきと状態的な結びつき」『ことばの研究 第2集』〔国立国語研究所論集 2〕pp.39-62、国立国語研究所〔再録：高橋太郎 1994、pp.295-322〕
- 高橋太郎（1973）「動詞の連体形「する」「した」についての一考察」『ことばの研究 第4集』〔国立国語研究所論集 4〕pp.101-132、国立国語研究所〔再録：高橋太郎 1994、pp.58-88〕
- 高橋太郎（1974）「連体形のもつ形態論的な機能と形態論的な性格の関係」教育科学研究会・国語部会（編）『教育国語』39、pp.41-57、むぎ書房〔再録：松本泰丈（編）1978、pp.233-258；高橋太郎 1994、pp.33-57〕
- 高橋太郎（1975）「文中にあらわれる所属関係の種々相」『国語学』103、pp.1-17、国語学会
- 高橋太郎（1978）「「も」によるとりたて形の記述的研究」『研究報告集』1、〔国立国語研究所報告 62〕pp.1-52、国立国語研究所
- たかはししょう（1979）「連体動詞句と名詞のかかわりあいについての序説」言語学研究会（編）『言語の研究』pp.75-172、むぎ書房〔再録：高橋太郎 1994、pp.323-420〕
- 高橋太郎（1984）「名詞述語文における主語と述語の意味的な関係」『日本語学』3-12、pp.18-39、明治書院
- 高橋太郎（1986a）「形容詞のテンスについて」宮地裕（編）『論集日本語研究（一）現代編』pp.137-161、明治書院
- 高橋太郎（1986b）「動詞の動詞らしさについて」『国文学 解釈と鑑賞』51-1、pp.6-16、至文堂〔再録：高橋太郎 1994、pp.19-32〕
- 高橋太郎（1987）「連体動詞句をうける名詞の意味の2つの側面—存在のしかたの側面と関係のしかたの側面—」『国文学 解釈と鑑賞』52-1、pp.31-42、至文堂〔再録：高橋太郎 1994、pp.421-433〕
- 高橋太郎（1994）『動詞の研究—動詞の動詞らしさの発展と消失—』むぎ書房

- 高橋太郎 (1995) 「ダブルテンスの観点からみた<スルコトダ>の種々相」『立正大学文学部研究紀要』11、pp.1-17、立正大学文学部
- 高橋太郎 (1996) 「品詞の構成」『国文学 解釈と鑑賞』61-1、pp.14-19、至文堂
- 高橋太郎 (1997a) 「～というもの」「～ということ」「～というの」『立正大学人文科学研究所年報』34、pp.41-52、立正大学人文科学研究所
- 高橋太郎 (1997b) 「連体機能をめぐって」川端善明・仁田義雄 (編)『日本語文法 体系と方法』pp.39-54、ひつじ書房
- 高橋太郎 (1998a) 「動詞から見た形容詞」『月刊言語』27-3、pp.36-43、大修館書店
- 高橋太郎 (1998b) 「述語形式「するものだ」の用法」『立正大学文学部研究紀要』14、pp.141-189、立正大学文学部
- 高橋太郎他 (2005)『日本語の文法』ひつじ書房
- 高橋雄一 (2007) 「「ものだ」をめぐる諸論考について—連体修飾構造の観点から—」『東海大学紀要 留学生教育センター』27、pp.1-20、東海大学
- 高橋雄一 (2010) 「複合辞「ものだ」についての一試論—「内容節的な構造」を手掛かりに—」『専修国文』87、pp.137-167、専修大学日本語日本文学文化学会
- 高橋雄一 (2012) 「複合辞の「ことだ」についての一試論」『専修人文論集』91、pp.1-23、専修大学学会
- 田辺和子 (1997) 「形式名詞「モノ」における文法化としての文脈化と主観化」『日本女子大学紀要 文学部』47、pp.左 51-65、日本女子大学
- 田和真紀子 (2011) 「程度副詞の評価性をめぐって」『宇都宮大学教育学部紀要 第1部』61、pp.25-36、宇都宮大学
- 坪根由香里 (1994) 「「ものだ」に関する一考察」『日本語教育』84、pp.65-77、日本語教育学会
- 坪根由香里 (1996) 「「ことだ」に関する一考察—そのモダリティ性を探る—」『ICU 日本語教育センター紀要』5、pp.45-62、国際基督教大学日本語教育研究センター
- 寺村秀夫 (1968) 「日本語名詞の下位分類」『日本語教育』12、pp.42-57、日本語教育学会〔再録：寺村秀夫 1992、pp.3-20〕
- 寺村秀夫 (1973) 「感情表現のシンタクス—「高次の文」による分析の一例—」『月刊言語』2-2、pp.18-26、大修館書店〔再録：寺村秀夫 1993、pp.3-16〕
- 寺村秀夫 (1975-1978) 「連体修飾のシンタクスと意味—その 1、2、3、4—」『日本語 日本文化』4、pp. 71-119 ; 5、pp.29-78 ; 6、pp.1-35 ; 7、pp.1-24、大阪外国語大学研究留学生別科〔再録：寺村秀夫 1992、pp.157-336〕
- 寺村秀夫 (1980) 「ムードの形式と意味 (2) —事態説明の表現—」『文藝言語研究 言語篇』

5、pp.103-119、筑波大学文芸・言語学系

- 寺村秀夫（1981）「『モノ』と『こと』」『馬淵和夫博士退官記念国語学論集』 pp.743-763、大修館書店〔再録：寺村秀夫 1992、pp. 75-93〕
- 寺村秀夫（1982）『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』くろしお出版
- 寺村秀夫（1984）『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版
- 寺村秀夫（1991）『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』くろしお出版
- 寺村秀夫（1992）『寺村秀夫論文集Ⅰ—日本語文法編—』くろしお出版
- 寺村秀夫（1993）『寺村秀夫論文集Ⅱ—言語学・日本語教育編—』くろしお出版
- 中西久実子（1995）「モとマデとサエ・スラ—意外性を表すとりたて助詞—」宮島達夫・仁田義雄（編）『日本語類義表現の文法（上）単文編』 pp.308-316、くろしお出版
- 仁田義雄（1980）「『多イ』『少ナイ』の装定用法」『語彙論的統語論』 pp.233-250、明治書院
- 仁田義雄（1989）「現代日本語のモダリティの体系と構造」仁田義雄・益岡隆志（編）『日本語のモダリティ』 pp.1-56、くろしお出版
- 仁田義雄（1998）「日本語文法における形容詞」『月刊言語』 27-3、pp.26-35、大修館書店
- 仁田義雄（2002）『新日本文法選書 3 副詞的表現の諸相』くろしお出版
- 日本語記述文法研究会（編）（2003）『現代日本語文法 4 第 8 部モダリティ』くろしお出版
- 日本語記述文法研究会（編）（2008）『現代日本語文法 6 第 11 部複文』くろしお出版
- 丹羽哲也（1989）「無助詞格の機能—主題と格と語順—」京都大学文学部国語学国文学研究所（編）『国語国文』 58-10、pp.38-57、中央図書出版社
- 丹羽哲也（1994）「主題提示の『って』と引用」『人文研究』 46-2、pp.79-109、大阪市立大学
- 丹羽哲也（1999）「主題文の性格と『は』の使用条件について」『人文研究』 51-5、pp.493-520、大阪市立大学
- 丹羽哲也（2000）「副詞につく『は』について」『人文研究』 52-3、pp.311-332、大阪市立大学文学部
- 丹羽哲也（2004a）「名詞句の定・不定と『存否の題目語』」『国語学』 55-2、pp.1-15、日本語学会
- 丹羽哲也（2004b）「第 11 章 主語と題目語」尾上圭介（編）『朝倉日本語講座 6 文法Ⅱ』 pp.257-278、教文堂
- 丹羽哲也（2004c）「コピュラ文の分類と名詞句の性格」『日本語文法』 4-2、pp.136-152、日本語文法学会
- 丹羽哲也（2006）『日本語の題目文』和泉書院
- 野田春美（1995）「モノダとコトダとノダ—名詞性の助動詞の当為的な用法—」宮島達夫・仁田義雄（編）『日本語類義表現の文法（上）単文編』 pp.253-262、くろしお出版

- 早津恵美子 (2010) 「連体修飾語の解体—再構築にむけて—」 至文堂 (編) 『国文学 解釈と鑑賞』 75-7、pp.60-68、ぎょうせい
- 樋口文彦 (1989) 「評価的な文」 言語学研究会 (編) 『ことばの科学 3』 pp.181-192、むぎ書房
- 樋口文彦 (1996) 「形容詞の分類—状態形容詞と質形容詞—」 言語学研究会 (編) 『ことばの科学 7』 pp.39-60、むぎ書房
- 樋口文彦 (2001a) 「形容詞の評価的な意味」 言語学研究会 (編) 『ことばの科学 10』 pp.43-66、むぎ書房
- 樋口文彦 (2001b) 「状態形容詞と特性形容詞、その評価性をめぐって」 教育科学研究会・国語部会 (編) 『教育国語』 4-3、pp.4-10、むぎ書房
- 備前徹 (1989) 「「～ことだ」の名詞述語文に関する一考察」 『滋賀大学教育学部紀要 人文科学・社会科学・教育科学』 39、pp.1-12、滋賀大学教育学部
- 飛田良文、佐藤武義 (編) (2002) 『現代日本語講座 第5巻文法』 明治書院
- 姫野昌子 (2000) 「形式名詞「こと」の複合辞的用法—助詞的用法と助動詞的用法をめぐって—」 『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』 26、pp.17-31、東京外国語大学
- 黄允實 [ファンユンシル] (2016) 「「山田先生は優しい人だ」構文に関する一考察—「山田先生は優しい」構文と比較しながら—」 『日本研究教育年報』 20、pp.1-18、東京外国語大学日本専攻
- 黄允實 [ファンユンシル] (2017) 「「形容詞＋名詞」述語文と形容詞述語文—主語名詞の表わす事物の「特性」の恒常性と一時性—」 『日本研究教育年報』 21、pp.1-18、東京外国語大学日本専攻
- 藤田保幸 (2002) 「6「～トハ」構文について」 『国語引用構文の研究』 pp.459-484、和泉書院
- 船田逸夫 (1969) 「モノとコト」 『言語生活』 218、pp.81-87、筑摩書店
- 細川英雄 (1989) 「現代日本語の形容詞分類について」 『国語学』 158、pp.103-91、日本語学会
- 松下大三郎 (1924) 「第三章品詞の細分 第一節名詞の細分」 『標準日本文法』 pp.204-232、紀元社
- まつもとひろたけ (1978) 「あわせ述語の記述をめぐって」 『語文論叢』 6、pp.1-12、千葉大学
- 松本泰丈 (編) (1978) 『日本語研究の方法』 むぎ書房
- 松本泰丈 (2005) 「品詞と文の部分」 松本泰丈 (編) 『語彙と文法の相関—比較・対照研究の視点から—』 [千葉大学社会文化科学研究科研究プロジェクト報告書 123] pp.1-21、千葉大学大学院社会文化科学研究科 [再録：松本泰丈 2006、pp.249-269]
- 松本泰丈 (2006) 『連語論と統語論』 至文堂
- 三宅知宏 (2005) 「現代日本語における文法化—内容語と機能語の連続性をめぐって—」 『日本語の研究』 1-3、pp.61-76、日本語学会

- 宮島達夫（1962）「かかりの位置」『計量国語学』23、pp.3-11、計量国語学会〔再録：宮島達夫 1994、pp.513-521〕
- 宮島達夫（1994）『語彙論研究』むぎ書房
- 村田昌巳（2001）「実質と形式—モノ・コトの用法から—」『同志社国文学』54、pp.122-113、同志社大学国文学部
- 榊山洋介（1990）「現代日本語「モノ」の諸相」『Litteratura』11、pp.1-27、名古屋工業大学外国語教室
- 榊山洋介（1991）「修飾語句を伴わない「モノ」の意味・用法」『言語文化論集』13-1、pp.105-118、名古屋大学言語文化部
- 榊山洋介（1992）「文末の「モノダ」の多義構造」『言語文化論集』14-1、pp.19-31、名古屋大学
- 森田良行・松木正恵（1989）『日本語文型表現 用例中心・複合辞の意味と用法』アルク
- 守屋三千代（1989）「「モノダ」に関する考察」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』1、pp.1-25、早稲田大学日本語研究教育センター
- 守屋三千代（1990）「形式名詞の文末における用法について」『津田塾大学紀要』22、pp.109-125、津田塾大学紀要委員会
- 八亀裕美（2001）「現代日本語の形容詞述語文」『阪大日本語研究』pp.1-144、大阪大学大学院文学研究科日本語学講座
- 八亀裕美（2003）「形容詞の評価的な意味と形容詞分類」『阪大日本語研究』15、pp.13-40、大阪大学大学院文学研究科日本語学講座
- 八亀裕美（2004）「形容詞の文中での機能」『阪大日本語研究』16、pp.51-65、大阪大学大学院文学研究科日本語学講座
- 八亀裕美（2008）『日本語形容詞の記述的研究—類型論的視点から—』明治書院
- 八亀裕美（2009）「形容詞述語文をとらえるために—分析に必要な視点—」至文堂（編）『国文学 解釈と鑑賞』74-7、pp.20-29、ぎょうせい
- 山田敏弘（1995）「ナドとナンカとナンテ—話し手の評価を表すとりたて助詞—」宮島達夫・仁田義雄（編）『日本語類義表現の文法（上）単文編』pp.335-344、くろしお出版
- 渡辺実（1990）「程度副詞の体系」『上智大学国文学論集』23、pp.1-16、上智大学国文学会〔再録：渡辺実 2002、pp.298-313〕
- 渡辺実（2002）『国語意味論』塙書房

参考資料

- 日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部（編）（2000–2002）『日本国語大辞典』第二版、小学館〔初版：日本大辞典刊行会（編）（1972–1976）〕
- 松村明（編）（2002）『大辞林』第二版新装版、三省堂〔初版：松村明（編）（1988）〕
- 飛田良文・浅田秀子（1991）『現代形容詞用法辞典』東京堂出版
- 飛田良文・浅田秀子（1994）『現代副詞用法辞典』東京堂出版
- 森田良行（2007）『助詞・助動詞の辞典』東京堂出版

言語資料一覧

第1章の1.2.2節において、本研究の考察に用いた資料について説明した。ここに作品の一覧を挙げる。

《手作業による用例の資料》

□ 文庫本

	作者名	刊行年	作品名〔文庫本〕	出版社
1	浅倉卓弥	2004	『四日間の奇蹟』	宝島社
2	有川浩	2010	『阪急電車』	幻冬舎文庫
3	池井戸潤	2007	『オレたちバブル入行組』	文春文庫
4		2010	『オレたち花のバブル組』	文春文庫
5		2013	『ようこそ、わが家へ』	小学館文庫
6		2014	『ルーズヴェルト・ゲーム』	講談社文庫
7	乾くるみ	2007	『イニシエーション・ラブ』	文春文庫
8	伊坂幸太郎	2003	『オーデュボンの祈り』	新潮文庫
9		2005	『ラッシュライフ』	新潮文庫
10		2006	『重力ピエロ』	新潮文庫
11		2007	『チルドレン』	講談社文庫
12		2007	『グラスホッパー』	角川文庫
13		2008	『死神の精度』	文春文庫
14		2009	『終末フルール』	集英社文庫
15		2011	『モダンタイムス（上・下）』	講談社文庫
16		2013	『マリアビートル』	角川文庫
17		2013	『バイバイ、ブラックバード』	双葉文庫
18	石田衣良	2005	『4TEEN』	新潮文庫
19		2007	『1 ポンドの悲しみ』	集英社文庫
20		2008	『眠れぬ真珠』	新潮文庫
21		2008	『愛がない部屋』	集英社
22		2014	『夜を守る』	文春文庫
23	市川拓司	2007	『そのときは彼によろしく』	小学館文庫
24		2007	『世界中が雨だったら』	新潮文庫

25	井上靖	2012	『わが母の記』	講談社文庫
26	江国香織	2006	『東京タワー』	新潮文庫
27		2010	『がらくた』	新潮文庫
28	奥田英朗	2007	『サウスバウンド（上・下）』	角川文庫
29	海堂尊	2007	『チーム・バチスタの栄光（上・下）』	宝島社文庫
30		2008	『螺鈿迷宮（上）』	角川文庫
31	角田光代	2005	『空中庭園』	文春文庫
32		2011	『八日目の蝉』	中央公論新社
33	片山恭一	2006	『世界の中心で、愛をさけぶ』	集英社文庫
34	川上弘美	2007	『センセイの鞆』	新潮文庫
35		2011	『風花』	集英社文庫
36	北川悦吏子	1997	『愛してると言ってくれ』	角川文庫
37		2007	『たったひとつの恋』	角川文庫
38	北林一光	2010	『ファントムピークス』	角川文庫
39	霧村悠康	2007	『完全版昏睡』	新風舎文庫
40	今野敏	2008	『隠蔽捜査』	新潮文庫
41		2012	『同期』	講談社文庫
42	坂木司	2012	『和菓子のアン』	光文社文庫
43	さくらももこ	2001	『もものかんづめ』	集英社文庫
44	重松清	2005	『流星ワゴン』	講談社文庫
45	白石一文	2008	『私という運命について』	角川文庫
46	朱川湊人	2008	『かたみ歌』	新潮文庫
47	高杉良	2010	『消失（上）』	角川文庫
48	高野和明	2013	『ジェノサイド（上・下）』	角川文庫
49	高橋克彦	1994	『星封陣』	講談社文庫
50	林誠人 笹原ひとみ	2007	『東京少女』	泰文堂
51	谷瑞恵	2012	『思い出のとき修理します』	集英社文庫
52	中島京子	2012	『小さいうち』	文春文庫
53	東野圭吾	1994	『変身』	講談社文庫
54		1996	『分身』	集英社文庫
55		2001	『秘密』	文春文庫

56	東野圭吾	2002	『探偵ガリレオ』	文春文庫
57		2002	『白夜行』	集英社文庫
58		2006	『手紙』	文春文庫
59		2008	『さまよう刃』	角川文庫
60		2008	『容疑者 X の献身』	文春文庫
61		2009	『赤い指』	講談社文庫
62		2010	『夜明けの街で』	角川文庫
63		2011	『あの頃の誰か』	光文社文庫
64		2011	『ガリレオの苦悩』	文春文庫
65		2012	『聖女の救済』	文春文庫
66		2012	『プラチナデータ』	幻冬舎文庫
67		2013	『真夏の方程式』	文春文庫
68	百田尚樹	2013	『幸福な生活』	祥伝社文庫
69	誉田哲也	2008	『ストロベリーナイト』	光文社文庫
70		2013	『月光』	中公文庫
71	三浦しをん	2011	『きみはポラリス』	新潮文庫
72		2013	『光』	集英社文庫
73	湊かなえ	2010	『告白』	双葉文庫
74		2012	『少女』	双葉文庫
75		2013	『夜行観覧車』	双葉文庫
76		2013	『花の鎖』	文春文庫
77		2014	『Nのために』	双葉文庫
78	村上春樹	1985	『羊をめぐる冒険（上・下）』	講談社文庫
79		2000	『辺境・近境』	新潮文庫
80		2002	『神の子どもたちはみな踊る』	新潮文庫
81		2004	『ノルウェイの森（上・下）』	講談社文庫
82		2005	『海辺のカフカ（上・下）』	新潮文庫
83		2006	『アフターダーク』	講談社文庫
84		2012	『1Q84(1)(2)(3)前編・後編』	新潮文庫
85	群ようこ	2008	『かもめ食堂』	幻冬舎文庫
86	百瀬しのぶ	2008	『奈緒子』	小学館文庫
87		2008	『おくりびと』	小学館文庫

88	百瀬しのぶ	2009	『ウルル森の物語』	小学館文庫
89		2011	『はやぶさ』	角川文庫
90		2012	『ひみつのアッコちゃん』	小学館文庫
91		2012	『ペンギン夫婦の作りかた』	ポプラ文庫
92	渡邊睦月 村上桃子	2007	『東京少年』	泰文堂
93	唯川恵	2008	『恋せども、愛せども』	新潮文庫
94	吉本ばなな	2002	『アムリタ（上・下）』	新潮文庫

□ 単行本

	作家名	刊行年	作品名〔単行本〕	出版社
95	伊坂幸太郎	2007	『ゴールデンランバー』	新潮社
96		2010	『オー！ファーザー』	新潮社
97	伊坂幸太郎他	2005	『ILOVEYOU』	祥伝社
98	片山恭一	2004	『雨の日のイルカたちは』	文芸春秋
99	村上春樹	2013	『色彩を持たない多崎つくると彼の巡礼の年』	文芸春秋
100	森博嗣	2006	『カクレカラクリ』	メディアファクトリー
101	吉本ばなな	1989	『キッチン』	福武書店
102		2000	『不倫と南米』	幻冬舎

《『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ) の用例》

本文に挙げた用例のうち、頁数を記していない用例はすべて国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ) から検索アプリケーション「中納言」「少納言」を用いて採集したものである。第6章から第7章までは主に BCCWJ を利用して採集した用例を対象としている。以下の表は、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』利用の手引第1.1版を参考に作成したものである。

(http://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/bccwj/doc/manual/BCCWJ_Manual_02.pdf の表 2-1 から引用、非 NumTrans 版の語数は省略)

サブコーパス	レジスター	サンプル(個)	NumTrans 版の語数(万)
出版サブコーパス	書籍(PB)	10,117	2,855
	雑誌(PM)	1,996	444
	新聞(PN)	1,473	137
図書館サブコーパス	書籍(LB)	10,551	3,038
特定目的サブコーパス	白書(OW)	1,500	488
	教科書(OT)	412	93
	広報誌(OP)	354	376
	ベストセラー(OB)	1,390	374
	Yahoo!知恵袋(OC)	91,445	1,026
	Yahoo!ブログ(OY)	52,680	1,019
	韻文(OV)	252	23
	法律(OL)	346	108
	国会会議録(OM)	159	510
合計		172,675	10,491

謝 辞

本研究は東京外国語大学大学院博士後期課程在籍中に行った研究成果をまとめたものです。論文の執筆にあたって多くの方々に御世話になり、ここに深く感謝の意を表したいと思います。

私の指導教官である東京外国語大学の早津恵美子先生には、終始暖かい激励と研究全体にわたりご指導ご鞭撻を賜りました。先生のご指導のおかげで、この論文を仕上げることができました。そのご指導がきちんと反映されているか心もとないところもありますが、この場を借りて深くお礼申し上げます。

副指導教員の川村大先生と南潤珍先生にも多くの意義深いご助言をいただきました。川村大先生には国語学で蓄積された知見に触れる機会を与えていただき、論文の細部にわたるまで構成に関するご指摘、論文の内容に関わる有益なご助言をいただきました。また、南潤珍先生より貴重なご意見をいただき、論文の内容を深めることができました。ここに記して深謝いたします。

審査委員をつとめてくださった桜美林大学の新屋映子先生と東京外国語大学の加藤晴子先生からもご助言や暖かい励ましのお言葉をいただきました。新屋映子先生には途中の段階で拙稿についての有益なご意見を賜り、そのおかげで論文の執筆を進めることができました。心より深く感謝申し上げます。

これまで本研究の内容を発表させていただき、日頃よりご助言をくださった早津ゼミの皆様にも感謝いたします。なお、留学中にいただいた「国際教育支援基金」「長谷川留学生奨学財団」のご支援のおかげで、研究に専念することができました。心よりお礼申し上げます。

ここに重ねて厚く謝意を表し、謝辞といたします。

2018年9月 黄 允實 [ファン ユンシル]